覇王の兄の憂鬱(仮)

朝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
覇王の兄の憂鬱（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９８７５Ｍ

【作者名】
朝人

【あらすじ】
勢いで書いてしまったｖｉｖｉｄの二次です。
オリ主物で、アインハルト等のキャラが変わっている可能性があると思いますので、ご注意下さい。

プロローグ（前書き）

勢いで書いたｖｉｖｉｄの二次です。
アインハルトがメインヒロイン（？）です……たぶん。

プロローグ

新暦６７年
第１管理世界ミッドチルダ
首都クラナガン、その一般道路をとある一台の車が走っていた。

「父よ、一つ訊きたい……」
「何だ！　息子よ！！」
そんな車内の中、助手席に座っていた少年が、運転席に座り猛スピードで車を走らせている男性―父に問う。
「……出来れば、あまり聞きたくはないんだが……今の時速は？」
流れていく景色が異様に速い為、恐る恐るだが、訊いてみた。

「ウム。ざっと、２００キロ弱だ！」

「……」
返ってきた応えは非情な物だった。
もしかしたらとは思っていたが……少年の予想していたよりも遥かに越えていた。
「……じゃあ、背後に見える『アレ』は気のせいじゃないんだな？」
後ろを振り向くと数名の魔導師らしき人達が飛行魔法を使い、追いかけて来る。
「ウム。紛れもなく、『時空管理局』だな」
それに対して当の本人は気にせず、「はっはは」と笑いながら尚もスピードを上げる。
「捕まるぞ？」
何の許可も取らず、無断で改造を行なっった一般車両で、一般道路を大爆走しているのだ。

例え、今が非常時でも関係なく捕まるだろう。
「フッ……息子よ、昔の偉い人はこんな言葉を残した」
かなりの速度を出しているはずだが、器用に次々と車を追い越して行く。
そして、一旦気持ちを落ち着けると、彼は高らかに宣言した。

「速さとは……力だ！！」

「……くだらない事を言ってる暇があるなら、ちゃんと運転しろ」
最近、日本のアニメに嵌まっている父の言葉を無視し、冷たくそう言った。
「くぅぅっ……最近、息子が冷たい……反抗期なのだろうか？　……コレもみんな管理局の所為だ……！！」
変な解釈で管理局に八つ当たりした父は更に車のスピードを上げる。
現在３００キロに到達した。
「……よく、事故らないな」
無駄にこういう方面だけには強い父に、少年は呆れながらため息を吐く。

場所は変わりクラナガンの大型病院。
そこに一人の女性がいた。碧銀の長い髪が特徴的な綺麗な女性だ。
患者が着る水色の服を纏っている彼女は、しかしどこかが悪いという訳でもなかった。

「よしよ～し」
そんな彼女の腕には小さい子供―と、言うより赤ちゃんが抱き抱えられていた。
そう、彼女は出産の為に入院していたのだ。そして、つい昨日彼女と同じ碧銀の髪の女の子が生まれた。

その際に、普通なら立ち合うはずの家族の姿がなかったが、理由は予定よりも早く、更には昼という事もあり、学生である息子は来れなかったのだ。まあ、それは仕方ないのだが……生涯の伴侶である夫の方は、本来なら来るつもりだったらしいが、何の手違いか連絡が届いていなかったらしく、結局来れなかったらしい。
代わりに今日、仕事をほっぽり出してでも来る、と意気込んでいたが……。

「遅いわねぇ……」
そう呟いた時、廊下の方から足音が聞こえた。それも走っている様な音が……。
そして、次の瞬間。
「待たせたな！！　俺、参.J……」
「いいからとっとと入れ、馬鹿親父」
部屋の扉が開くとともに白衣を着た男性が何かのポーズを取りながら台詞を言うが、言い終わる前に後ろにいた黒髪の少年に思いっきり蹴られてしまった。
「痛いではないか！？　息子よ！！」
「黙れ、クソ親父」
それは、先程までスピード違反をして管理局に追われていた親子であり、そして彼女の家族だった。
「あら？　ようやく来たの？」
「おおおぉぉぉぉ！！！！！　この子が我が愛しの娘か！！」
妻の質問にも応えず、夫は女性からまるで奪う様に赤ちゃんを取り、抱き上げる。
「あう？」
赤ちゃんは不思議そうに実の父を見る。
「むむむ……」
しかし、それは父も同じでまじまじと娘を見る。
妻と同じ碧銀の髪に、右が紺、左が青という虹彩異色。

「あ……ああ……！！」
それを見た父は震えだし、そしてその様子に妻と息子が心配そうにしている。
それから十数秒程固まっていた父はどうにか回復してから、言葉を放った。

「……この子は将来、見事な萌えキャラになるだろう」
「くたばれゲスが！！」
すかさず少年が蹴りでツッコミを入れる。
「グハ！？」
あまりの威力に父は廊下の壁に打ち付けられた。
蹴りが入った際、赤ちゃんが宙に放り出されたが、そこは少年がすかさずキャッチした。
「ん？」
「きゃはは♪」
少年と目が合うと、何がおかしいのか赤ちゃんが笑いだす。
「あら、気に入られたみたいね」
「あう～」
その様子に母は笑って言い、それに応える様に赤ちゃんが少年へと手を伸ばす。
「俺を気に入るなんて……趣味悪いぞ、お前」
妹の将来が若干不安になった少年。数年後、その予感はある意味で当たる。
「ところで母よ、コイツの名前は？」
妹が出来る事は聞いていたが、名前の方は一切聞いた事がなかった。
その事を訊くと母は、微笑みながら言う。
「アインハルトよ。その子の名前は、アインハルト・ストラトス」
「あう～」

母が名前を言い終えると、まるで『よろしく』と言ってるかの様にアインハルトが声を上げる。
「アインハルトって、男の名前じゃあ……」
確か、地球の何処かの国ではそうだった気がする……。
「いいじゃないか！！　ギャップ萌えってヤツだね！！」
と、そこで今まで倒れてはずの父が復活。
「また、うるさくなるのか」と少年が嫌そうに思っていると……。

カチャッ
「ん？」
父の腕に手錠らしき物……というより手錠が掛けられた。
「……ようやく捕まえましたよ……主任」
横を見ると、そこには何故か自分の部下の女性がいた。
しかも、凄くイイ笑顔で……。
「あ～……何故、キミが此処に？」
当然思った質問を訊いてみる。
「身に覚え、ありませんか？」
すると、すかさず彼女から凄い威圧感が放たれた。
「……仕事は終わらせたはずだが……？」
「ええ、それは終わってます」
やり残しがあったのかと思ったが、どうやら違う様だ。
「……主任、此処に来るのに何使いました？」
「はぁ？」
「ああ……」
女性の言葉に父は疑問符を浮かべるが、息子はどうやら分かったらしい。
「あのですね、陸士部隊からウチの課に苦情が来たんです」
「……？」
「『おたくの主任が改造車で爆走しているから、どうにかして欲しい……』って……」

「おお！？」
そこでようやく父は納得出来たらしい。
だが、女性の威圧感は一向に消えない。
「それでですね、技術課の皆で話合ったらしいんです」
「ふむ……」
「その結果、近くにいる人に確保を任せようって事になったらしいんですよ」
少年は嫌な予感を感じ、アインハルトを連れ、部屋の奥へと避難した。
「それで……偶々、休みで近くに住んでいた私に白羽の矢が立ったんですよ！！」
その瞬間、女性の怒りが爆発した。
折角の休みを邪魔されただけでなく、これからこの男性を管理局に連れて行かなくればならないのだから無理もない。
「ほら！！　ちゃっちゃっと行きますよ！！」
「のおぉぉ！？　そんなに強く引っ張らなくても……」
「何か？」
「い、いや……」

そんな感じで部下に連行される父の姿を見て、息子は思う。
「頼むから、お前は　『ああ』なるなよ」
「あう？」
あの父の血を継いでいる妹の将来が本当に心配だと……。

プロローグ（後書き）

勢いで書いてしまいました（大事な事なので何回も……）
ですので、たぶんかなりの不定期更新になると思います。

一話　『いつも通りの朝』（前書き）

この物語は、１００％の妄想と２０％の勢いで御送りします（オイ

注意：全般的に駄目人間な作者の妄想なので、過度な期待はしない

で下さい。

一話　『いつも通りの朝』

五年後、新暦７２年。
朝六時、とある家の台所で一人の少女が料理をしている最中だった。
野菜を刻んだり、煮込んだり、と慣れた手つきで次々と作業を終わらせていく。
そして、３０分もしない内にあらかた終わり、後は……。

「……よし」
そう意気込むと、少女は移動を開始した。
向かうは二階のとある一室。
その部屋の前に来ると一度深呼吸。

そして意を決し、扉を開けると……。
「うぅ……やっぱり……」
そこにはベッドの上で幸せそうに寝ている少年の姿があった。
歳はおよそ１６、７で、ミッドでは比較的に珍しい純粋な黒髪。
「もぅ……あさですよ、にいさん。おきてください」
対照に、碧銀の髪と紺と青の虹彩異色が特徴的な彼女は彼の妹―アインハルト。
健気にも兄を起こそうとする彼女は、まだ五才。両親が共働きで忙しい為、家事等は交代制なのだが、十以上も歳の離れた妹に起こして貰うのは、兄としてどうなのか……。

「むぅ……」
起こそうと試みる事一分。なかなか起きない兄にアインハルトは痺れを切らした。

「さいしゅうしゅだんです」
舌足らずな言葉でそう言うと、彼女は一度兄から距離を取り、構える。
「すぅ……はぁ……」
深呼吸をし、身体から余分な力を抜く。
「いきます……」
そして……。

「だん・くう・けーんッ！！」
母親直伝の、魔力の拳が唸りを上げた。
「ぎゃあああああああ！！？！？」
少年の一際大きな悲鳴が辺り一帯に響き渡る。本来なら苦情とか来そうなのだが……その頃の近所のおばさん達の反応は「本当に仲が良いわねぇ」、「あら、また寝坊」、「今日はいい感じに決まったねぇ」等と、特に悪く思ってはいなく、寧ろ日常の一部と化していた。

「……お前、最近母さんに似てきてないか？」
「？　そうですか……？」
あの後、何とか無事に起きた少年は、不意に朝食の最中そう言った。その言葉にアインハルトは小首を傾げるが……実際問題、似てきている。
前までは普通に揺すったりしていただけなのだが……この前、久しぶりに帰って来た母が何か吹き込んだらしく、以後毎回技をかまされる事になった。……まあ、母より威力が低い分、今の所大きな怪我等はしていないが……。
「はぁ……結界でも張ろうかな……」
それでも、流石に毎回喰らいたくはないので、本気でそんな事を考

えてみる。
「むぅ……そんなことしたら、おこせないじゃないですか」
それに対し、頬を膨らませ抗議するアインハルト。
「いやでも、流石に断空拳は、なぁ……」
正直喰らいたくはない。おそらく今のアインハルトでも、アレを使えばコンクリート位なら簡単に壊せるだろう。
「……わかりました、それじゃあ……」
諦めが着いたのかアインハルトは俯きながら言う。その様子に少し安心した少年は、コーヒーを飲む。
流石に、『断空拳』以上に厄介な物はないだろうと思いつつ、耳を傾ける。

「いっしょにねてください」

「ぶーーーーーーーッッッ！？！？！！」
だが、放たれた言葉に少年は吹いた。それはもう盛大に……。
「だ、だいじょうぶですか！？　にいさん！！」
ゴホゴホと噎(む)せる少年にアインハルトは布巾片手に慌てて寄ってくる。
「お、お前なぁ……！！」
口を拭われながらもなんとか言う。
「うぅぅ……だって、さいきんいっしょにねてくれないじゃないですか……」
拗ねた様にアインハルトは唇を尖らせる。
「以前はともかく、今そんな事したら確実にロリコンの烙印を押されるんですけど、俺……」
主に同僚達に白い眼で見られる光景がありありと予想出来る。
何せ、アインハルトを妹だと説明しただけで犯罪者呼ばわりされたのだから……。

「ダメ、ですか……にいさん……」
潤んだ瞳で妹が問い掛ける。
「ぐ……」
純粋無垢な少女の悲しそうな顔に、少年の心を罪悪感が襲う。
「……好きにしろよ、もう……」
結局、簡単に折れてしまった。実はこの少年、シスコンと呼ばれる程、妹にかなり甘い。
「ぁ……にいさん、だいすきです！！」
そんな告白とともにアインハルトは兄に抱きつく。
兄が兄なら妹も妹、お兄ちゃんっ子であるアインハルトのブラコンっぷりもかなり凄い。

こうして、いつも通りのストラトス家の朝が過ぎて行く。

一話　『いつも通りの朝』（後書き）

とりあえず、一話を投下。

まえがきでも書いた通り、この話は完全に作者の妄想です。ですので、アインハルトの親云々も妄想です。実際のｖｉｖｉｄとは一切関係ありません……当たり前だけど。

それにしても、オリ主の名前がまだ出ていなかったとは（↑今気付いた）……次回かな……。

二話　『物は所詮物、肝心なのは……』（前書き）

この物語は、変態な作者の１００％の妄想と２０％の勢いでお送りします。

題名が少し変わっている気がするが……気にしたら負けじゃ。

二話　『物は所詮物、肝心なのは……』

「さてと……」
朝食の一件が過ぎ、片付け等を終わらせた二人は今、丁度家を出て、身なりやらの確認をしている所だった。
「ハンカチとちり紙は持ったか？」
「はい！」
「洗濯物と、今日の天気は？」
「ふたりぶん、ちゃんとほしました。そして、きょうはいいおてんきです♪」
「家の方、見落としはないな？」
「だいじょうぶです！」
「お菓子は？」
「しつよりりょう、ご○んチョコを６０こかいました♪」
「……いや、まあ……」
最後のはノリで言っただけなのだが、見事に普通に返された。
『ほら』と、アインハルトが背負っている小さなリュックを見せる。
確かに、若干膨らんでいる気がする……。
……それにしても……。「６０は多過ぎだろ？」
「ぶつりょうさくせんです♪」
「はぁ……」
妹よ……その言葉、何処で覚えた……。
「かずのぼーりょくです♪」
「……お前、意味分かって言ってるか？」
十中八九分かってはいないだろうが、何故覚えたのかが気になる。
「？　いえ、でもこうこたえるのが『おとなのまなー』だって……」
「そんなマナーはありません、今すぐ忘れなさい」
「うぅぅ……」

誤った知識を少年に一蹴されると、アインハルトは目で分かる程落ち込む。

「ほら、さっさと行くぞ？」

「ぁ……」

だが、そんな妹の手を取り、少年は歩き始める。

「はい！　いってきま～す！！」

元気よく兄に応えた後、家に向かっても挨拶した。

「～♪」

道中、アインハルトが繋いでいた腕に抱きついてきたりしたが、少年にとっては『いつもの事』なので特に何も言わなかった。

まあ、言った所で少年の方が折れるだけなのだろうが……。

「つきました～♪」

そうこうして、二人はクラナガンのとある喫茶店に着いた。

他の建物やカフェとは違い、木製で少し歴史を感じさせる造りだ。

その喫茶店に二人は入って行く。

「いらっしゃいませ、ご主人様」

出迎えたのは一人の店員だった。

黒を基調とした、フリル等もふんだんに使った可愛らしいメイド服。

セットなのか、黒いカチューシャが頭に着けてある。

「わあぁ……」

そのデザインの良さにアインハルトは感嘆の声を漏らす。

そして、それは少年も同じだった。

もっとも……着ているのが２ｍを越える長身で、筋肉ガチガチの、怖声・怖顔のガタイのいいオッサンでなければ、だが……。

「何してるんですか……店長」
「なに、ちょっとした試着よ」
少年の問いに男―この喫茶店の店長は軽く応える。服が今にも破れかねない程にギジギジだ。
尚、別に店長は“そういう”趣味の人ではない。ただ、偶に行き過ぎるだけである。
「に、にいさん？」
その色々な意味でお子様に見せられないと悟った少年はアインハルトの目を手で覆う。

「……店長、店の評判と妹の精神衛生上よくないので、“それ”今すぐ止めて下さい」
「う、ウム……」
少年が、まるで人を殺せる程の冷たい視線を向ける。それに対し、店長はたじろぎながらも頷き、店の奥へ消えた。
それを確認すると、アインハルトから手を退ける。

「あれ？　にいさん、てんちょーは？」
「着替えに行ったよ」
「そうですか……ざんねんです」
「は……？」
「てんちょー……かわいかったのに……」
「……」
少年は妹の将来が本当に心配になった……。

二話　『物は所詮物、肝心なのは……』（後書き）

またオリ主の名前出し忘れた……ｏｒｚ
まあ、勢いで書いているから仕方ないと言えば仕方ないけど……。

それはそうと、主人公の名前がどうこうって感想にあったけど、別に決まってない訳じゃない。ただ忘れているだけで（ダメダコイツはや（ｒｙ

三話　『逃げる事も、時には正しい（現在の作者の心境）』（前書き）

現実から目を背けたっていいじゃない！！　アインハルトに癒されたいんだよぉぉぉ！！！！

→以上の事情により、今回の妄想もかなりアレです……。

三話　『逃げる事も、時には正しい（現在の作者の心境）』

日曜日、それは世間一般で言う『休日』。
大抵の人は休みとなり、平日以上に人が賑わう日。
接客業等では稼ぎ時の一つでもある。
だが、此処―少年達が入った喫茶店は特にそういった様子を微塵も見せていなかった。

先程の騒動から小一時間。
少年はこの店の制服へと着替えていた……と言ってもYシャツと黒いエプロンという、至ってシンプルな物だが……。
そう、少年はこの店に『客』として来たのではなく、『仕事』に来たのだ。
そして、お兄ちゃんっ子であるアインハルトは、その付き添いで……。
ちなみに、この店は人通りの少ない所にある所為か、人はあまり来ず。
『満席』等の言葉とは無縁の店である。
「にいさん、ココアおかわりです」
「はいはい」
アインハルトが空になったカップを預ける。それを受け取ると、少年は慣れた手つきでカップにココアを注ぎ、彼女に返す。
すると、アインハルトは嬉しそうにカップを両手で持って、口を付ける。
「あつ……！？」
「淹れたてなんだから、気をつけろよ？」
「は～い」
そう返事すると、今度は熱くない様にココアにふぅふぅと息を吹き

かける。
そんなアインハルトの様子を遠くから眺める人影が三つ。
「あぁぁ～～……今日も可愛いなぁ～……アインちゃん」
「見てるだけで癒されますなぁ……」
「俺、もうロリコンでいいや……」
と、若干危ない発言をしている者もいるが、彼らは皆『管理局』の制服を着ていた。もっとも、本局ではなく地上の方の制服だが……。

「あつ……うぅぅ……」
一生懸命息を吹きかけているはずなのに、何故かまた熱を感じ舌を引っ込める。そして、若干涙目でココアを睨み付ける。
『癒される～……』
その仕草に、三人の男性局員の顔がだらしなくニヤける。

「うぅぅ……にいさん……」
「なんだ？」
今まで、カウンターの後ろでのんびり新聞を読んでいた少年にアインハルトはカップを差し出す。
ちなみに、アインハルトはいつもカウンター越しの席にちょこんと座っている。
「……氷か？」
差し出されたカップを見て、少年はなんとなくそんな事を言った。
「むぅ……ちがいます……」
それに対し、アインハルトは口を尖らせる。
「悪い悪い」
「もぅ……」
ちょっとした冗談のつもりだったのだが、思ったよりも妹の機嫌が悪くなったらしい。
それを感じた少年は、アインハルトからカップを受け取るとすぐに

冷ます様に息を吹きかける。
十数回程吹いた後、アインハルトに返すと彼女は迷わずにココアを飲む。
「ありがとう、にいさん♪」
そして、飲める様になった事が分かると、兄に向け笑顔で礼を言う。

『ぐはぁぁッ！！？！』
その瞬間、離れた隅の席からダメージを受けた様な音が聞こえたが、少年は無視した。

三話　『逃げる事も、時には正しい（現在の作者の心境）』（後書き）

忙しいバイトから目を背けたいが為に、客があまりいない店にしてみました。

小説の中でくらいはのんびりさせて！！

四話　『後輩って、元気なキャラが多いよね？』（前書き）

今回もまた妄想率１２０％の提供でお送りします。　え？　上がった？　作者の妄想は常に限界を超えていますからね。一日の半分以上は、妄想が頭の中を占める廃人ですから（ダメだコイツ既に手遅れｄ……

四話　『後輩って、元気なキャラが多いよね？』

少年とアインハルトがほのぼのとしていると、不意に勢いよく店の扉が開く。

「ごめんなさ～い、遅くなっちゃいました」
入って来たのは、赤みを帯びた長い茶髪をポニーテールにした、少年と同じ歳位の元気な少女だった。
「大丈夫だ、この店が忙しくなる事なんて、まずないだろうからな」
入店早々謝って来た彼女に、少年はそう言って諭す。
「あは♪　ありがとうございます、先輩」
「いいからとっとと着替えて来い」
礼を言われたが、それを軽く無視し少年は店の奥を指差し、促す。
ちなみに、彼女は少年の一つ下の後輩である。学校やバイトでも……。
「は～い、ちょっと待っててて下さいね」
そして、その後輩は着替えの為、店の奥へと向かった。

数分後。
「お待たせしました～」
出て来た少女の姿は、先程店長が試着していたメイド服だった。
『ぶふぁッ！！？！」
その姿に、先程ダメージを受けていた客は追い打ちを受けた。
「わあぁ……ルリエルさん、かわいいです……」
「えへへ～♪　ありがとう、アインちゃん」
店長の時とは違い、ちゃんとピッタリのサイズなので無理なく着られた。元が良いだけに、その姿はよく映えている。
ちなみに、『アイン』とはアインハルトの愛称である。

「アインちゃんも、今日もまた可愛いねぇ～」
「ありがとうございます♪」
お互いに褒め合い、微笑み合う二人。
『ぐふぉッッ！！？！？！』
周りに百合の花が咲いてもおかしくないその状況は、例の三人の管理局員に止(とど)めを刺した。
「はぁ……仕方ないな」
それを見た少年は通信端末を取り出し、ある所に連絡を入れる。
「ほんっっっっっとうにお持ち帰りしたい程可愛いよ……ねぇ、先輩……ダメ？」
アインハルトに当てられた少女―ルリエルは上目遣いで訊く。
「ダメに決まってるだろ」
「うぅ～……酷い……」
振り返る事もせず、コンマ単位でざっぱりと切り捨てられた事に精神的なダメージを受けた。
「ごめんなさい、ルリエルさん……。でも、わたしもにいさんとははなれたくないです……」
「うぅ～……アインちゃん。なんて健気な子……」
少し落ち込んでいたルリエルにアインハルトは申し訳なさそうに言う。
ただでさえ、五才という幼子なのに、更にお兄ちゃんっ子でもあるアインハルトが、兄である少年から離れる事は、世界が滅びるよりも嫌らしい。
『お兄ちゃん＞世界』な少女の瞳がどんどんと潤んでいく。
「ああ！？　泣かないで、アインちゃん！！　大丈夫、そんな事し

ないから！！」
「ぐす……ほんと、ですか……？」
既に想像してしまい悲しくなったのだろう、アインハルトは若干泣きながら訊く。
「本当だから、ね？」
本当も何も、実際にそんな事をしたら犯罪になるからやってはいけないのだが……。
「うぅぅ……はい……」
半泣きにまでなっていたアインハルトをなんとか宥めて一息する。

「まあ……でも、確かに、アインちゃん貰っちゃったら、先輩と会える機会がなくなっちゃうかも……ね、先輩♪」
心機一転、明るい笑顔で大胆に告白（？）するルリエル。

「あ……ゲンヤさん？　御宅んとこの局員がまた……」
しかし当の本人は、ようやく連絡がついた相手と話している最中だった。

「うわ～い、さすが先輩。こういう時の間の悪さは天下一品ですね」
過去数回、同じ事があったので最早慣れてしまった。
『告白に慣れる』というのもおかしな気がするが……。

「むぅ～……やはり、にいさんはきょうてきです」
若干気を落としているルリエルの姿を見たアインハルトは、そんな事を呟いていた。

四話　『後輩って、元気なキャラが多いよね？』（後書き）

ヤッホー、新キャラ登場！！　そして何故か新キャラの方がオリ主より先に名前が出るとか……ｏｒｚ

ちなみに、新キャラの自分の中での『後輩』キャラをまんまイメージしてみました。後輩は、元気なイメージが強い自分。

五話　『妄想は生きる為の活力』（前書き）

今回の題名も本編とは一切関係ない上に、危ない作者がなんとなく思った事です。

まあ、いつも通り妄想と勢いで書いたけど……。

五話　『妄想は生きる為の活力』

更に時間は経ち、正午。

「おう、邪魔するぜ」
店に新たな客がやって来た。
「ウチのモンが迷惑掛けたな」
入って来たのは、これまた管理局の制服を人が二人。
その内の一人、先程少年が取っていた相手―ゲンヤ・ナカジマはテーブルに顔面から俯している三人を見ると、カウンター越しにやって来て少年に謝った。
「ま、いつもの事ですから別にいいですよ。……それはそうと……」
「ん？」
だが、少年は特に気にせず、違う話題を持ってくる。

「部隊長昇任、おめでとうございます」
「……ああ」
その言葉を聞きゲンヤは納得した。
確かについ先日、陸士１０８部隊の部隊長になったのだった。
「いやなに、面倒が増えただけだ」
しかし、彼は特に気取った事はせず、本心だけを言う。
「はぁ……父さんったら、また……」
そんなゲンヤの反応に、もう一人―ゲンヤの娘、ギンガはため息を漏らす。ちなみに、彼女は今まであの三人組を表に停めてある車の後部座席に投げ入れていた。

「何か食べていきますか？」
「昇進祝いに一品位なら奢りますよ」

「ほう、そいつは有り難い」
ギンガの呟きはスルーされ、ルリエルが訊きながらメニューを渡すと、少年が付け足して言う。それを聞いたゲンヤは、嬉しそうにメニューに目を通す。
「にいさん、わたしにもメニューをください」
「ほら」
感化されたのかアインハルトも、真似する様にメニューを見た。
実は、少年は昔から両親と離れて暮らす事が多かった為、家事全般等はかなり上手い。更に、その中でも料理は格段に上手だった。
その事を知っているゲンヤは熱心にメニューを見て、どれにしようか迷っていた。

「もう！！　父さん、いい加減にして下さい！　まだ仕事中ですよ！！」
そんな父親の態度に真面目なギンガは怒りを露にする。

ぐぅ〜〜〜〜……。
「ッ！？」
だが、それと同時に腹の虫がなった。あえて、『誰の』とは言わないが……。
「まあ、丁度飯時だからな」
「はい、どうぞ」
父親の優しさに、仕方ないと思いつつ、ルリエルからメニューを受け取る。
「う〜……今回だけですからねぇ……」
そう言うものの、少年の料理の旨さに負け、後日完全に常連となるギンガの姿が見られた。

五話　『妄想は生きる為の活力』（後書き）

バイトで疲れた中書いたので文が若干怪しいかも……。

六話　『ギャップって、女の子がやるからいいんだよね？』（前書き）

今日も妄想と勢いで行くぜぃ。

ページ数ホント少ないけど……。

六話　『ギャップって、女の子がやるからいいんだよね？』

「ただいま」
「おかえりなさい」
ナカジマ親子が帰った後、今まで何処に行ってたのか、店長が帰って来た。
「てんちょー、どこにいってたんですか？」
「ウム、ちょっとばかし買い出しにな」
ちなみに、店長はどんなに時間を掛けてでも良い物を選ぶ癖がある。
その為、店長の買ってきた物品は数品しかないが、これでも９時には店を出ていたのだ。

「さて、ではルリエルくんも来た事だし、今日も張り切って行くかね」
「「お～～～」」
「ま、そこまで混まないと思うけどね……」
店長の言葉に楽しそうに腕を上げて応えるアインハルトとルリエルに対し、少年はやる気がないのかそんな事を呟く。

「ところでヒロくん」
「はい？」
店長に呼び止められた少年―もとい、やっと本日初めて名前を呼ばれたヒロは、嫌々ながらも振り返る。
「ルリエルくんの新しい制服についてどう思う」
「……まあ、いいんじゃないですか？」
小さく耳元で囁く店長の問いに軽く応える。
正直、マッチョなオッサンに囁かれるのは嫌なので、半分以上は流

していたが……。
「ふむ、では今度は『巫女服』という物に挑戦してみよう」
ちなみに、あのメイド服はそんなゴツいオッサンが作っていた。
「……頼むから、試着だけはしないで下さいよ」
今朝の一件があり、釘を打っておく。
それと『巫女服』に対して突っ込まない理由は、近年クラナガンの一角に某電気街並のアレ関係のエリアが出来た為である。

「う、ウム……」
ヒロの冷めた視線を再び受けると、店長は承諾する。
さすがに、アインハルトには見せたくはないから、という兄の心配りである……。もっとも今朝の反応を見る限り、当人は喜びそうな気がするが……それはそれで兄として妹の将来が心配なので、やっぱり止めて貰いたい。

「せんぱ～い！　ちょっと、手伝って下さ～い！」
話が一段落すると、今度は後輩に呼ばれた。
「あー……はいはい、今行くって……」
対して、やはりやる気がないヒロ。
「にいさん、がんばってください」
だが、アインハルトに声援を貰うと少しはやる気が出たらしい。
「ありがとな」
「えへへ♪」
礼を言った後、ついでに感謝の意を込めてアインハルトの頭を撫でてから、ルリエルの元に向かう。
そんな兄の姿を見ながら、先程撫でられた箇所を触ると自然に笑顔がこぼれた。

六話　『ギャップって、女の子がやるからいいんだよね？』（後書き）

ようやくオリ主の名前が……。
みんなが予想していたのよりはかっこよくないけど、あの名前にした理由はちゃんあったりなったり……。

七話　『べ、別にロリコンって訳じゃないんだからね！！』ｂｙ駄作者（前書き

さぁ、今回の妄想は１５０％だ。
もし、観るなら食事中以外にした方がいいぜぃ。
……個人的に、結構甘くしたはずだから……。

七話　『べ、別にロリコンって訳じゃないんだからね！！』ｂｙ駄作者

あれから、特に店が混む程の客は来ず、何事もなく仕事を終えたヒロは一人で家に帰っていた。

アインハルトがいないのには理由があり、ヒロが帰っている今の時間は八時になろうかという辺りだ。
ヒロの仕事は基本的に七時に上がる事が多い。その為、洗濯物を取り込む作業等の為にアインハルトは先に帰ったのだ。
無論、一人では危ないので、近くにいたら近所のおばさんに連絡して頼んだり、特に忙しくないので実は料理等があまり得意でない店長に頼んだりしている。
本来なら家から出ない方がいいのだろうが、人一倍ブラコンなアインハルトにそれは耐えられなかった。

「おかえりなさい！　にいさん♪」
それから五分もしない内に家に帰ってくると、迎えの言葉を言いながらアインハルトは勢いよく抱きついて来た。
「ああ、ただいま……」
そんな妹の頭を撫でながら、ヒロも応えた。

「あ、そうでした……」
アインハルトを降ろし、移動を始めようとした時、妹は何かを思い出したらしく、慌ててヒロの前に移動する。
「えっと……その……」
何やらもじもじとしているが、意を決して言う。
「ご、ごはんにしますか？　おふろにしますか？　そ、それとも…

…わ、わたｓ……」

「ストーーーーーッップ！！！！！！！」

アインハルトが言い終わる前に、ヒロは止めに入った。それはもう、全力で……。

「何言ってんの！？　お前！！」

「え、えっと……『おんなのたしなみ』です……」

若干頬を染めながら妹は応えた。

「早いって！？　最低でも後１１年は早いから！！」

アインハルト・ストラトス、現在五才。そんな言葉のやり取りをするには、まだまだ早いお年頃。

「うぅぅ……でも、こういえば『にいさんがよろこぶ』ってルリエルさんが……」

「あのやろう……余計な事吹き込みやがって……！！」

後輩に僅かな殺意が沸いたヒロだった。

それからは特にコレといった事はなく、普通に夕飯を食べ、普通に片付けをし、普通に風呂に入り、後は普通に寝るだけだった。

ちなみに、両親は今日“も”帰って来なかった。ともに管理局の、それなりの地位にいる為なかなか帰って来れない様だ。

「仕方ない、か……」

ベッドの上で寝転びながら、ヒロは呟く。

別に、今に始まった事ではないので、あまり気にはしないが、そろそろ帰って来ないと親としての地位は危ない様な気がする……。なにしろ、最後に帰って来たのは一ヶ月と半月程前だ。

そんなに長い期間いなければ娘に忘れられてしまうのでは、と思う。

実際問題、既にアインハルトは兄さえ居ればそれでいい、と考えて

いる。

「はぁ……」
ため息を吐くと同時に、扉をノックする音が聞こえた。
「ん？」
不思議に思いながらも扉を開ける。

「えへへ～♪」
そこには髪を降ろし、水色の寝間着に身を包んだアインハルトが笑顔で立っていた。腕には、去年の誕生日にプレゼントしたクマのぬいぐるみが抱えられ、頭には緑色の三角帽を被っている。
「どうした？」
「やくそくどおり、いっしょにねむりにきました♪」
「……え？」
ヒロの問いに屈託のない笑顔で応えるアインハルト。
それに対し、ヒロは首を傾げそうになるが、今朝のやり取りを思い出した。

「マジか……」
まさか本当に来るとは思ってもいなかった為、唖然とした。
「……にいさんは、わたしといっしょはいや、ですか……？」
そんなヒロの反応を見たアインハルトは悲しそうな表情で訴え掛ける。
「あー……もう、分かったから泣くな！！」
「ひゃ！？」
妹の涙に負けたヒロは、アインハルトを抱き上げ、ベッドまで連れて行く。

そして、二人共ベッドに横たわる。
「にいさん♪」

すると、アインハルトが抱きついてくる。
「……にいさんのにおい……♪」
ヒロの胸に顔を埋めると、穏やかな表情でそう言う。
「すぅ……すぅ……」
その後、十秒もしない内にアインハルトは眠りに落ちた。
やはり、アインハルトにとってヒロは安らげる存在の様だ。

「やれやれ」
昔から寝つきがいい妹の寝顔を見て、ヒロは苦笑する。
―やはり、妹にはかなわない。
本人のシスコンが原因でもあるが、改めてそう思う。
「う……ん～……にい、さん……♪」
だが、幸せそうに眠る妹の姿を見ると、些細な事と思えてしまう。

「おやすみ、アイン」
可愛い妹の寝顔を見ながら、眠りに着こうとした、その時。

ヒロの携帯端末に一通のメールが届いた。

七話　『べ、別にロリコンって訳じゃないんだからね！！』ｂｙ駄作者（後書き

さて、どうだったかな……？
個人的には、甘くしたと思うんだけど……もし、『まだまだ緩い！！』とか『こんなん甘くねぇ！！』とか思ったら、それは作者の力不足です。
ごめんなさい。

間話（前書き）

バイトで疲れて眠いのに、無理して書いたからか……気が着いたらこんな事に……。

間話

とある管理外世界。
文明等はなく、ただただ荒れ果てた大地が続くだけの何もない世界。
だが、そこに大きな爆発音が響き渡った。

音のした方を見ると、何十というガラの悪そうな魔導師達がたった一人の男を囲んでいた。
その男は黒い髪に黒いコート、それから黒いバイザーを着けてる、全身黒まみれだった。

端から見れば圧倒的に男の方が不利に思えるが、実際はその逆で追い詰められているのは囲んでいる魔導師達だった。

彼らは今尚思う、『何故、こうなったのか？』と……。

彼らは皆そこそこ知名度のある犯罪者だった。ランクを付けるなら最低でもBはくだらない。
そんな彼らが、最近一人の強力な犯罪者の下に着く事になった。その数、実に千。
本来ならそんな事はなかったかもしれない。だが、彼にはそうさせるだけの魅力があった。
魔導師ランクSS。管理局ですらそうそう見る事は出来ないランク。
そして、彼には実績があった。
彼は、既に合計三人の執務官を殺している。しかもSランクの実力者を。
結果、管理局は迂闊に手を出せない相手と判断、暫く様子見する事になった。

それを聞きつけた、そこまで力がない者達は部下や仲間を連れ、彼の下に着いた。そして、一つの組織が出来上がり、管理局の驚異となる……はずだった。

つい先刻、あの男が現れなければ……。

男は右腕を“振るう”。
それは特に変わった事はない、ただ“振る”という動作を行なっただけの事……。しかし、次の瞬間強力な五つの斬撃が放たれ、人を切り裂き、大地を抉り、シールドやバリアジャケットは、まるで存在しないかの様に、“本体”ごとあっけなく両断される。

“アレ”は何だ？
デバイスの能力か？　しかし男は素手だ、デバイスを着けてる様子は見られない。
なら、魔法か？　あんなデタラメな魔法が存在するのか？　タメや詠唱といった物が一切見られないし、尚且つデバイス無しでそんな高度な魔法が使えるのか？
理解出来ない、理不尽且つ圧倒的な“力”によって十余人あまりの人間が、『また』肉塊へと変わる。

「化物……」
“それ”を言ったのは誰なのか？
その言葉が放たれるのと同時に、再び男は腕を“振るう”、今度は左で。
結果、“それ”を言ったと思われる人物がいた周辺は、例外なく皆ただの肉塊へと変わっていた。
その後、男は数回腕を“振るう”と、千もいた巨大な集団はたった

一人だけとなった。
「まさか……コレ程とは……！？」
最後の一人、ＳＳランクの次元犯罪者―タイナ・フォレスは驚愕する。
タイナは知っていた、目の前にいる男の事を……。

「だが、準備は既に整った！！」
故に、容赦は無用。
タイナが宣言すると、男をバインドが捕らえる。
「すまないが、私にはまだやる事があるのだ」
そして、タイナが手を翳すと巨大なミッド式の術式が男の四方と頭上に現れ、凄いスピードで魔力を収束していく。

「だから、やられる訳にはいかないのだよ、“クロウ”！！！！」
次の瞬間、収束していた魔力が一気に解放され、男―クロウに放たれる。
バインドで身動きが取れなかったクロウを、圧倒的な魔力量が呑み込んでいく。
巻き込まれない様にタイナは転移魔法を使い、離れた所に移動する。

「如何に“アヴェンジャー”のリーダーといえども、これでは生きていまい」
そう言って、タイナは見る。
対象を呑み込んで尚膨張し続ける半円型の巨大な魔力を。

“アヴェンジャー”
知名度は低いが、おそらく現在確認されている中で最強の組織だろう。
“超”が着く程の少数精鋭で、現在たった五人しかいないとされている。知名度が低いのはコレが崇っており、部下すらいない。

しかし、彼らの力は強力であり、一人で時空艦隊を潰せる程だとか……特にリーダーであるクロウの力は別格で、『一人で世界を壊せる』という噂すら存在する。

故に、タイナは全力を尽くした。先程の一撃で魔力を全て使い切った。

そうしなければ殺されていた。

相手は、あの“化物”なのだ。

「ふぅ……」

タイナが一息吐いたその時、膨張していた膨大な魔力の内側から幾つ物斬撃が放たれ、魔力は切り裂かれ霧散していく。

「ッ……！？」

その光景にタイナは言葉を失った。

先程放った魔法の威力はＳＳ。詠唱を必要とし時間が掛かる魔法だが、都市一つは軽く滅ぼす事が出来る強力な物だ。

だというのに、クロウはまるで何事もなかったかの様にそこに立っている。

次の瞬間、瞬時にタイナの前に移動するクロウ。

そして、バリアやシールドが意味をなさない圧倒的な“力”が、無慈悲に振り降ろされた。

暗く、広い室内。

大きな円形の机に複数の人が座り、先程まで行われていた戦闘……

いや、『虐殺』をモニターを通して観ていた。

「千もの大群と、我々ですら手こずった相手をこうも圧倒するとは……」

「まさに“化物”。もはや人間ではないな」
渋る老人に、隣に座っていた中年が同意するかの様に頷く。
「ならばどうする？　消すか？」
そんな態度を見せる二人に、強気な男が訊く。
「馬鹿を言うな、仮に奴らと殺り合い勝ったとしてのも、我々とて無事では済まないんだぞ」
それに応えたのは別の“誰か”だった。
その“誰か”は想像したのだろう。“アヴェンジャー”と自分が所属する組織が戦った場合を……。
「ならば、やはり……」
「うむ、奴らとて我々と戦う事は避けたいだろう」
同じく想像した者達は、話の流れを『そっち』へと持って行く。
「では、“アヴェンジャー”は暫く様子見する事としよう」
そして、議長の様な人物がそう結論着けると、集まっていた人達は皆散り散りと解散して行った。

その中の一人ー銀色の髪をした青年は、他の人達とは違い、少し遠回りの道の方へ行く。
そこはエレベーター等の自動設備はなく、只のさっぱりとした通路。
真っ直ぐ行けば非常階段に出るが、彼はその３０ｍ程手前で止まる。

「ご苦労だったね、クロウ」

彼が少し通り過ぎた、備品等が置かれる部屋に続く通路。その壁に黒いコートの男ークロウが、腕を組み、壁に背中を預けた状態で青年に顔を向ける。
「あんな下らない事で俺を呼び出すな」
開口一番放たれたのは、静かな怒声。
本来なら、あんなふざけた戦力がいる中に送り込まれた事を怒るのが普通の反応だと思うが、彼は違う事に腹を立てていた。

「いや～、すまないね。でも、おかげでキミはまた有名になったよ」
「そんな物に興味はないし、欲しいと思った事すらない」
ヘラヘラと笑い、本当に謝っているのか怪しい青年に対して、クロウは吐き捨てる。
「相変わらずだねぇ……あ、そうそう。報酬はいつも通りに振り込んでおくよ」
先程行なってきた『虐殺』、アレはこの青年からの依頼だった。
クロウ自身は乗り気ではなかったが……青年は、“アヴェンジャー”のスポンサーとして資金等を送っており、下手な事をして関係を壊す訳にはいかなかった。……もっとも、その程度で壊れる程安い関係でもないが……。
「そうか」
青年の言葉を聞き終えると、用件は終わりだろうと壁から背中を離し、帰ろうとする。

「と、そうだった。あと一つ有ったんだった」
だが、思い出した様に青年は言うと、ポケットからメモリースティックを取り出し、クロウ目掛けて投げる。
「君達の仲間かもしれない子のデータだよ」
それを受け取ると青年が続けて言う。
「そうか。なら今度、アイツらに探らせてみるか」
礼を言う訳でもなく、ただそう呟くとクロウは転移魔法を使い、その場からいなくなった。

「さて、それではこちらも“表”の仕事をしますか？」
その場に残された青年ーリーオ・オルグラスはそう言うと、肩を回しながら仕事を始める為、執務室へと向かった。
時空管理局の少将としての仕事を……。

間話（後書き）

はい、チートキャラ。
最初から何してんだろ、コイツは……。
やはり、眠いせいか……上手く頭が回らない……。

まあ、次話からはまたアインハルトが出るはず……。
今回の話があまりに不評だった場合は、消すかも……。

八話　『しつこいと嫌われる』（前書き）

いつも通り、妄想と勢いで書いたぜよ。

八話　『しつこいと嫌われる』

「う……ん～……」
朝。
窓から差し込む光が瞼を刺し、目覚めへと誘う。
「あふ……」
気の抜けた声とともに体を起こす。
まだ眠たいのだろう、しょぼしょぼとする瞼を擦る。

「あれ……？」
だが、そこで違和感に気付く、いつもと部屋の様子が違うのだ。
「あ、そうだ……」
そして、思い出した。
昨夜、自分は兄の部屋で一緒に寝たのだと……。
そこでまた気付く、兄の姿が何処にもない事に……。

不安に駆られ、部屋から出ると下から何かを良い匂いが漂ってきた。
それに気付いたアインハルトは、着替えもせずに寝間着姿のまま下に降りた。

すると、そこには予想通り朝食の用意をしている……いや、し終わったヒロの姿があった。
「にいさん！！」
その姿を見た時、アインハルトは兄に抱きついた。
「おッ！？」
突然の事に驚くも、バランスは崩さず、抱きついて来た張本人を見る。
「にい、さん……」

そこには、瞳を潤ませ、絶対に離さない様にしっかりとヒロに抱きついている妹の姿が……。

「どうしたんだ？」

その姿に疑問を感じ、訊いてみる。

「……だって……おきたらにいさんがいなかったから……」

その言葉を聞くも、やはりよく分からない。

「……にいさんが、わたしをおいてどこかにいったんじゃないか、っておもって……それで……」

聞く人が違ければ、ただの子どもの被害妄想だと思うだろう。

しかし、アインハルトは両親とは数える程しか会った事がない。

それ故、『家族』と言われたら真っ先に思い浮かぶのはヒロだった。

両親はどちらかと言うと親戚の様な感じだ。

そんな誰よりも大好きな兄が、あの二人の様に自分の事を放って何処かに行ったら……そう思うだけでアインハルトは泣き出したくなった。

その時、彼女の頭に暖かい『何か』が置かれた。

「大丈夫だ」

それは“手”だった。

大好きな兄が宥める様に、優しく、静かに、ゆっくりと頭を撫でる。

「お前を一人にはしない」

それは、“あの日”誓った約束。

滅多に帰って来ない両親の代わりに、自分はこの子の傍を離れないと、あの日一管理局からの勧誘を蹴った、あの時に誓った。

両親だけじゃあきたらず、素質があるという理由で、『自分』という兄すらもアインハルトから引き離そうとした奴ら、『平和』を唱

いながらストラトス家の平和を奪った奴ら、そんな奴らの元に行ったら本当に妹は一人になってしまう。
だから、ヒロは拒んだ。何十という勧誘を押し退け、アインハルトの傍にいる事を誓った。
―だから……。

「大丈夫だ」
そう言って寂しがり屋な妹の頭を撫でる。
言葉だけ、行為だけではなく、そこには本当に“心”が宿っていた。

「にいさん……」
それを感じ取ったアインハルトは、安心してヒロから離れた。

「ご、ごめんなさい……にいさん」
情けない所を見せてしまった。子どもながらも、そう思って謝った。
「いや、元はと言えば、俺がお前を置いて料理を始めたのが原因だし……」
そうは言っても、当番制で今日はヒロの担当な上、彼が可愛い顔で寝ている妹を起こす事が出来るのかは怪しい所だが……。

その後、二分位はお互いに謝っていたが、作り上げた料理の事を思い出したアインハルトのおかげでひとまずは終わりを告げた。

八話　『しつこいと嫌われる』（後書き）

ヒロが勧誘された理由、当時のヒロの魔導師ランクは推定Ｃ。更には、局内で有名なＡＡＡランクの魔導師を母に持つ為、執拗に勧誘されてました……。

一応、レアスキルも持っています。

九話　『意外とスパルタ？』（前書き）

いつも通り、妄想と勢いで更新！

若干、無駄に多くなったかも……ま、気にしないで行こう（オイ

九話　『意外とスパルタ？』

クラナガン、共用魔法練習場にて。

朝食を食べ終わった後、洗濯や掃除といった一通りの家事を終えた二人は、現在そこに来ていた。

両者とも動きやすい服装になり、睨み合っていた。

いつものほのぼのとした雰囲気はなく、凛とした空気が張り詰めていた。

「いきます」

構えたと同時に、同年代の子どもではありえないスピードでアインハルトは殴り掛かる。

しかし次の瞬間、ヒロは力を受け流し、アインハルトを後方へと投げ飛ばす。

「ちょっと直線的過ぎるな」

「むぅ～……」

そう言うと、無事に着地したアインハルトは頬を膨らませた。

「つぎ、いきます」

言うや否や、先程を上回る速度でヒロに迫り、その勢いを乗せた蹴りを放つ。

「……流すは“力”」

「ッ！？」

だが、ヒロがある『言葉』を唱えると同時に、アインハルトの蹴りは軽く流された。そして、お返しとばかりに回避した力の反動を使

った掌底を与える。
無論、怪我をさせない様に頭部ではなく、腹部を狙って。
「う……ッ！？」
それでも結構な衝撃が伝わり、たじろぐものの、近くにいるのは危険と判断し、距離を置く。
「固めるは“魔”、放つは“弾丸”」
だが、新たな『言葉』を唱えると、ヒロの周りに数発の魔力弾が現れた。そして、それらはヒロの言葉通り『弾丸』の様な速さでアインハルトに襲いかかる。
「せんしょうは！！」
しかし、アインハルトも負けてはいなかった。
その内の一つ、最初にアインハルトに当たるはずだった魔力弾を、彼女は『受け止め』、『投げ返した』。
「遮るは“盾”、拒むは“魔”」
だが、それを予期していたヒロがそう唱えると、彼の前にシールドが発生し、魔力弾を弾いた。
「むぅぅ～……」
何とか、残りの魔力弾を回避したアインハルトはその光景を見て、また頬を膨らます。
さっきの意趣返しのつもりでやったのに、あっさり対処されてしまったからだ。
「むくれている暇はないぞ」
そんなアインハルトの姿にヒロは指摘する。
「吹くは“風”、飛ばすは“人”」
唱えると同時に、アインハルトに強風が襲いかかる。

「う……ッ！！」
飛ばされない様に、魔力で強化した体で必死に耐える。
「固めるは“魔”、放つは“弾丸”」
しかし、非情にも更なる追い打ちがかかる。
ヒロは、再度複数の魔力弾を作ると、突風に耐えているアインハルト目掛けて放った。

「はッ！！」
対して、彼女は咄嗟にシールドを張ったが、それの判断は間違いだった。
「きゃ！？」
ただでさえ、かなりの速度があった魔力弾が追い風を受け、更にスピードを上げたのだ。
結果、従来より速い速度でシールドに当たり、その衝撃でアインハルトは突風に飛ばされてしまった。
「うっ……！？」
その後、すぐに風は止み、アインハルトは背中から地面に落ちた。
幸い、受け身を取った事もあり、大きな怪我はしなかったが、落ちた際の衝撃は体に響いた様だ。

「大丈夫か？」
駆け寄って来たヒロは心配そうな顔をしながら、手を差し出す。
「す、すみません……にいさん」
その手を取り、立ち上がったアインハルトは申し訳なさそうに言った。
「いや、俺も模擬戦とはいえ、少し大人気なかった……ゴメン」
特に、最後の突風はまさにそれ。たかだか数秒しか吹いていなかったが、実戦でも足止めに使える程の威力はある。
それを子ども相手に使ったのだから、本当に大人気ない。

「いえ、だいじょうぶです。むしろ、てをぬいほうがしつれいですよ、にいさん」
微笑みながら、そう応えるアインハルト。
「それもそうだな」
それにヒロも微笑しながら頷く。

先の様子からも分かる通り、現在二人は公園で魔法についての特訓をしていた。威力の加減や非殺傷設定等を抜きにしても、割と実戦さながらで……。

彼らは二、三日に一度は此処で特訓をしている。もっとも『彼ら』……と言うよりは、『アインハルトの』と言うべきだが……。
ヒロ自身は、魔法や戦闘といった物は管理局云々がありそうで嫌なのだが……アインハルトは別の様だ。彼女は、古代ベルカの騎士として結構有名な女性を母に持つ為か、どうやら『こういう』のに興味があるらしく、三ヶ月程前からヒロに教わり始めた。
もっともヒロ自身、実は魔法に関する知識があまりない為、実戦形式で教える事になった。
ヒロが何故、魔法関連の知識がないのに魔法が使えるのかは、彼のレアスキルにある。

―彼のレアスキルは『言霊（ことだま）』。
もっとも、一言何か言えば発動、と言った物とかではなく、ある程度の法則が存在する物である。
絶対に言わないといけないのは『属性』と『威力』、そして『それらを表す（形状）、または例える物』、この三つが最低条件である。
例えば、さっきヒロが使った「固めるは“魔”、放つは“弾丸”」は、“魔”―つまり『魔力を固めて、弾丸の様に放つ』と言う意味

がある。この様にちゃんとした意味のある物でなくてはいけなく、単語一つ言った位では発動しない、少し癖のある能力である。
呪文と異なる点は、先に言った魔法関連の知識を不要とした所にある。
『言霊』は条件が成立すればいいだけの、文字並べの様な物であり、それらの知識は一切必要としない。
ただし、単純な魔法は先の様な短い言葉でいいが、威力が強い物程複雑で多くの言葉を必要とする。この所は呪文と似通っていると言えるかもしれない。

「……ながいです」
「どうした？　アイン」
「いえ、なぜかいわないといけないようなきがして……」
ヒロのレアスキル云々についての説明に無意識に突っ込んでしまった、アインハルト。そんな妹を心配そうに見るヒロ。
「だいじょうぶですよ、にいさん。しんぱいをおかけてして、すみません」
その兄に心配を掛けまいと、アインハルトは丁寧にそう言う。

「そうか……なら、ついでだし、休憩にするか？」
「はい♪」
それでも、やはり心配だったヒロは、丁度正午という事もあり、そんな提案をする。
その兄の気遣いに気がついたアインハルトは、嬉しそうに頷く。
そして、二人は一時の休憩に入った。

九話　『意外とスパルタ？』（後書き）

と言う訳でヒロのレアスキル発表！
詠唱が入るよ！　厨二っぽいのが入るよ！

自分の妄想なんてこんなもんだよ！

そして、誰か文才をください……ｏｒｚ

十話　『休憩という名のほのぼのタイム』（前書き）

今日も妄想と勢いで書いたぜ……。

後半は眠気と戦いながら書いたので、おかしな所があるかも……あったら後で直そう。

十話　『休憩という名のほのぼのタイム』

休憩という事で、現在アインハルトは木陰で休んでいた。

「きもちいい……」

本日は過ごし易い朗らかな天気で、木の枝から漏れる日差しが温かい。

目を閉じると、僅かに感じる風が頬を撫で、草花を鳴らす。

クラナガンはかなりの大都市だというのに、不思議と人の雑踏や車の排気音は聞こえなかった。

まるで『平和』その物を描いた様だ。

そんな『平和』の中に、突出割って入って来る者がいた。

「ほら」

しかしそれは、彼女にとって“邪魔者”ではなく、何よりも……誰よりも大好きな人だった。

「ありがとうございます、にいさん」

そう言って、彼が差し出した缶ジュースを受け取る。

休憩に入ると同時に、ヒロは水分補給の為、ジュースを買いに行っていたのだ。

受け取った缶を早速開けると、『プッシュ』という特有の音が聞こえた。

そして、表情には出さなかったが、喉が渇いていたアインハルトは迷いなく飲み始めた。

「んきゅ……んきゅ……」

「……相変わらず、飲む時はそれなんだな……」

美味しそうに飲む妹とは対照的に、普段では絶対に聞く事のない擬音で、喉を鳴らす妹に苦笑いする兄。
何故か昔から勢いよく飲み物を飲むと、こんな擬音を発するアインハルト。
ちなみに、幼児の時からずっと育ててきたヒロだから言える事だが……この擬音は生まれ付きである。

「……隣、いいか？」
「んきゅ……」
ヒロが訊くと、器用にも擬音で応え、隣の芝生をぽんぽんと叩く。
「よっと……」
それを確認したヒロは、叩いていた場所に腰を降ろした。
……もっとも、アインハルトがヒロに対して「Ｎｏ」と言う事はまずないので、訊くだけ無駄なのだが……。

腰を降ろすと同時に、缶を開け一口飲むと、先程のアインハルトと同じ様に目を閉じる。
雑踏や騒音、それらを全てカットし、ただ自然の音だけに耳を傾ける。
聞こえるのは、風が草木を揺らす音や小鳥がさえずる声、偶に虫の鳴き声等も……。そこには、人工的に作られた物は何一つなかった。

「ん……？」
音を聞き、穏やかな気持ちで涼んでいると、不意に右腕に重みを感じ、目を向ける。
「……すぅ……すぅ……」
そこには、規則正しい音を発てながら、ヒロに寄りかかって寝ているアインハルトの姿があった。
どうやら、先程の特訓で疲れたらしい。
「やれやれ……」

その姿に、ヒロはため息を漏らす物の、起こそうとはしなかった。
やはり、妹には甘いようだ。
ちなみに、そんな甘い兄が何故アインハルトにスパルタで教えていたのかというと……それは彼自身が母にこの様な形で鍛えられたからであり、魔法に関する理論等を余り知らないヒロが手っ取り早く教える方法だからでもある。
ついでに言うと、ヒロの特訓はまだ甘い方で、母親の特訓はこれの数倍は濃くて長かったらしい……ヒロ曰く、「子どもには絶対に見せられない内容」。

「……少し、時間を延ばすか……」
「ん……ん～……」
しかし、根本的な部分は変わっておらず、アインハルトの髪を撫でながらそんな事を考える。そして無意識にも、それに応える様に声を発したアインハルトを見て微笑する。

「それじゃあ、俺も少しのんびりするか」
言うや否や、アインハルトを起こさない様に、木にもたれ空を仰ぎ見る。

快晴で、雲一つない青い空が綺麗だった。

十話　『休憩という名のほのぼのタイム』（後書き）

スパルタな特訓はストラトス家の伝統みたいな物、母は祖母（故）から教わりました。
アインハルトのアレはまだマシな方……。

十一話　『元気っ子とツンデレ』（前書き）

タイトル、余りいいのが思い浮かばなかった……。

十一話　『元気っ子とツンデレ』

「静かだな……」
アインハルトが眠ってから一時間。
ゆっくりと飲んでいたジュースもなくなり、ただぼーっと空を仰ぎ見ていると……。
「ヒーーーロ兄〜〜〜〜♪」
なんとも元気な声が聞こえてきた。
視線を空から地上へ戻すと、意外な程早く声の主は見つけられた。
「ヒロ兄〜〜♪」
「ちょっ……バカ！　アンタ止めなさいよ！！　恥ずかしいでしょ！！」
……もっとも、こちらへ向けて手をぶんぶん振っている人物を見つけられない方が、逆に難しいだろうが……。

「ん……う、ん〜……」
「……」
とりあえず、アインハルトが起きそうなので、空となった缶を騒いでいる張本人に向けて投げる。
「あいた……ッ！？」
すると、それは見事狙った人物の頭に当たり、カコーンといういい音が辺りに響いた。

「それで、お前は一体何をしているんだ？」
アインハルトを起こさないよう、あまり大きな声は出さず、ヒロは目の前に座っている二人の少女―その内の一人に訊いた。
「えっと……今日はお休みだから、パートナーの人と一緒に出かけ

てるの」
それに応えたのは、青い短髪の少女―スバル・ナカジマだった。
「あ、紹介するね。この人が私のパートナーのティア」
強引に腕を引っ張りながら、『ほらほら』と嬉しそうに指差す。
「……ティアナ・ランスターです」
それに対し、頭を叩き無事スバルから逃れたオレンジ髪の少女―ティアナ・ランスターは、お世辞にも良いとは言えない顔で自己紹介をする。
「それで、この人がヒロ・ストラトスさん。初等科の時によく面倒を見てくれた四つ年上の先輩で、私は『ヒロ兄』って呼んでる」
「よろしくな」
説明されると、ティアナに向け片手を上げ挨拶をする。
「よ、よろしくお願いします……」
それに対しティアナも返すが、年上という事がある為か少し緊張した様だ。

「そう言えば、ヒロ兄は此処でなにしてるの？」
「ああ、それは……」
ふと思ったスバルの疑問にヒロが応えようとした、その時。
「ぅ……ん～～……」
ヒロに寄りかかっていたアインハルトが目を覚ました。
「ん、みゅ～……ぉはようございましゅぅ～……にぃしゃぁん……」
『……』
寝ぼけているのか、上手く呂律が回らないアインハルトは、しかし何とか起きようと必死に目を擦る。
「ああ、おはよう」
そんな妹に、ヒロはそう返すと優しく頭を撫でる。
「～～♪」
すると、まるで喉を鳴らす猫の様に嬉しそうな表情を浮かべる。
そして、段々と目がとろけていき……。

「はっ！？　いけない！！　きもちよすぎて、またねむるところでした……」
しかし、ギリギリの所で踏み止まった。
その様子に、スバルは微笑ましく、ティアナは少し複雑な表情で見ていた。

「あ……スバルさん。おひさしぶりです」
「久しぶり～♪」
バッチリと目が覚めたアインハルトは挨拶をし、スバルも返す。
その後、ティアナの方を向き、そっちにも挨拶をする。
「えっと……はじめまして、アインハルト・ストラトスです！」
「ティ……ティアナ・ランスターよ……」
元気に、勢いよく言ったアインハルトにティアナは少しばかり驚いた。
「はい！　よろしくお願いしますね、ティアナさん♪」
だが、そんな彼女の心境を知らないアインハルトは、更に元気よく嬉しそうに微笑みながら言うのだった。

十一話　『元気っ子とツンデレ』（後書き）

最近不調……上手く書けなかったかも……。

今回は台詞が多かったかも……。

十二話　『真似て良い物と悪い物』（前書き）

ペースダウンしている最近……。

十二話　『真似て良い物と悪い物』

「ねぇねぇ、ヒロ兄」
「ん？」
アインハルトとティアナのやり取りを眺めていると、不意にスバルが尋ねてきた。
「ヒロ兄達って、ごはん食べた？」
スバルの言葉を聞き、公園に立っていた時計に目を向ける。
時刻は既に十二時を回っていた。
その事に気付くと同時に『きゅ～』という可愛らしい音が聞こえた。
「ぁぅ……」
音のした方に目を向けると、そこには恥ずかしそうに腹を抑えるアインハルトの姿があった。

「くく……ッ」
「わ、わらわないでください！！」
余りに初々しい姿に笑ってしまったヒロに対し、アインハルトは顔を真っ赤にして言う。
「くくッ……いや、悪い……」
そう言って笑いを堪えようとするヒロだが、上手く出来ない。
「……もぅ……」
そんなヒロに対し、アインハルトはそっぽを向く。
「ま……まあ、そういう事だ、スバル」
今のアインハルトの反応で、大体は分かっただろう。
「じゃあ、一緒にごはん食べよ♪」
そして、理解したスバルは楽しそうにそう提案するのだった。

クラナガン市街
とある飲食店の、四人組が座っている一卓にて、異様な光景が広がっていた。
それは大量の皿。一山辺り２０枚程の、皿の山がなんと三つも聳え立っていた。
そして、今新たに一枚、山に追加された。

「……ホント、よく入るな」
その山を作り上げているスバルに対し、ヒロは半ば呆れながら言う。
「ですよね、あの体の一体何処にあれだけの量が入るんですかね？」
それに同意する様に隣に座っていたティアナが疑問を口に出す。
まだ１２歳という事もあるが、同年代の子どもと比べスバルは少し小柄だ。
それなのに、そんな体の何処にあれほどの食べ物が入るのか、本当に不思議でならない。
「スバルさん、すごいです……」
一方、小さい事もあり窓側でヒロの隣に座っていたアインハルトは……。
何故か、そんなスバルに憧れに似た眼差しを向けていた。

「……頼むから真似しないでくれよ、アイン」
妹が、一体どうして目をキラキラさせているのかは全く分からないが、とりあえずアイツの真似だけはしないで欲しい、と切に願ったヒロだった。

十二話　『真似て良い物と悪い物』（後書き）

最近のペースが遅い、なんとか前みたいに戻したいぜよ……。

十三話　『夏だから、なんとなく』（前書き）

最近、暑いぜよ……。
夏バテとかならないよう皆気をつけてね。

十三話　『夏だから、なんとなく』

楽しく食事を続けていると、不意にスバルがある話題を持ち出した。
「そういえば……ねぇ、ヒロ兄」
「ん？」
「ヒロ兄は、あの噂知ってる？」
「噂？」
いきなりの事で意味が分からず、小首を傾げるヒロ。
「うん……『呪われたデバイス』の話」

「呪われた？」
「デバイス、ですか？」
ヒロとアインハルトは顔を見合わすが、やはり分からず頭に疑問符が浮かんだ。
すると、ヒロの隣に座っていたティアナも話始めた。
「今、訓練生の間でちょっとした噂になってるんです……『呪われたデバイス』―通称“カースドデバイス”と呼ばれるロストロギアなんですけど……」
「カースド、デバイス……」
顎に手を当て思案するヒロを他所に、ティアナは説明を続ける。

「本来、デバイスは魔法の補助等の為に使いますよね？　でも、そのカースドデバイスはデバイスその物に強大な力が秘められている、って言われているんです」
その為、ロストロギアの中でも危険度はかなり高い。
「はい。それって、どれくらいつよいんですか？」
手を勢いよく挙げ、質問するアインハルト。

確かに、『強大な力』と言われても、ロストロギアを知らない彼女ではどれ程の威力なのかは分からない。

「私達も噂で聞いた程度だからよく分からないの……ただ、どの噂でもSランクは超えるって言われているわ」

「えすらんく？」

そう言われても、まだ子どもである彼女には上手く伝わらなかった様だ、仕方なくヒロがアインハルトにも分かりやすい様に説明する。

「とりあえず、母よりも強いと思えばいい」

ちなみに、母の魔導師ランクはＡＡＡである。

「す……すごいです」

アインハルトが知る中で、母は間違いなく最強の部類に位置している。本日あれほど自分を軽くあしらったあの兄ですら、母には敵わない。

そんな母よりも強いと言われたら、そう応えるしかなかった。

「でも、『呪われたデバイス』って呼ばれるだけあって……起動させたら最後、取り憑いて死ぬまで暴れ回るって噂もあるよ～」

「定番だな」

声を低くし怖い感じで言ったスバルを軽く流し、ヒロは頷く。

こういう話ではよくあるパターンだし、甘い言葉には裏がある。そう簡単に強くはなれないのだろう。

そう思い、聞き流したのだが……。

「うぅぅ～～……」

約一名、聞き流す事が出来なかった者がいた。

何か嫌な想像でもしたのか、目を潤ませ必死にヒロに抱きついている。

「す、すばるさんのばかぁ～……」

そして、そんな表情を浮かべながら睨みつける。……もっとも、涙目で睨まれた所で怖いはずもなく、強いて言うなら庇護欲をそそる位だった……。

そんなアインハルトの姿を見たティアナは……。

「お、お持ちかえr……」

「するな」

「痛ッ！？」

アインハルトを抱え、そのまま席を立とうとしたが、その瞬間ヒロの平手が勢いよく頭を叩く。

「はッ！？　私は一体何を？」

正気に戻ったティアナを無視し、アインハルトを回収する。

「にいさん！　にじゅうのいみでこわかったです！！　にぃさ～ん……」

「分かった、分かったから！　泣くな、な？」

大人しく回収されると、再び泣きながら兄に抱きつく。

そんなアインハルトの頭や背中を撫で、時には彼女のリュックに入ってる６０個のチョコ等も使い、必死に宥める。

「……アンタの所為よ」

「え！？　どう見てもティアが悪いんじゃん！！」

そして、ヒロが宥めている間、二人は泣かせてしまった責任転嫁をしていた。

だが実際問題、責任転嫁する意味は余りない……二人“とも”悪いのだから。

十三話　『夏だから、なんとなく』（後書き）

カースドデバイスについての細かい詳細は後ほど……とりあえず、ロストロギアには認定されています。デバイスだけど……。

まあ、暫くはアインハルトとの絡みが多いだろうけど……偶に間話を投稿するかも……。

十四話　『泣いた子どもを宥めるのは、意外と大変』（前書き）

いいタイトルが思い浮かばない……。

最近、本当に勢いが落ちました……。

十四話　『泣いた子どもを宥めるのは、意外と大変』

「ひっく……うぅ……」
夕暮れ、未だに泣き止まないアインハルトの瞳から滴る雫を、ヒロがハンカチで拭う。
「ほら、もう泣くなって……」
あの後、泣かせてしまった二人は謝罪の意を込め、ヒロ達のを含めた会計を全て払い、アインハルトに謝った後帰って行った。

それから暫く経ち、日も暮れて帰宅する時刻なのだが、アインハルトは一向に泣き止まない。
「……仕方ない」
このままでは夜になってしまうと思ったヒロは、すぐに行動を移す。
アインハルトを引き寄せると、そのまま水平に倒し抱き上げる。

「ふぇ！？」
いきなりの事に、泣いていたはずのアインハルトも驚く。
ヒロがアインハルトに行なったのは、俗に言う『お姫様だっこ』というものである。

「お、やっぱ軽いな」
だが、当の本人はそれに気付いていないのか、それとも気にしていないのか、見当違いな事を言う。
「～～～……！？！？！！」
対して、抱き抱えられている少女は、慣れないその態勢に顔を真っ赤に染めている。
だが、悪い気などする訳もなく、抵抗は全くしない。
その姿を見ると、ヒロはそのまま歩き始めた。

日が沈み始め、空は青から藍へと色を変える。
この時間にしては珍しく、一度として人と会わない。更には車すら見掛けなかった。
その所為か、音が僅かしかなく、まるで世界に二人だけしかいないような……そんな錯覚すら覚えた。
普段の少女にしてみれば、それはかなり嬉しい事だが……今は不安で胸が一杯だった。
「それで？」
「え……？」
そんな中、まるでアインハルトの心中が分かっているかの様なタイミングでヒロが訊いてきた。

「何がそんなに怖いんだ？」

「ッ！？」
その一言にアインハルトは驚いた。
本当に見透かしている様だ……。
そう……今現在、アインハルトは怖がっていた。
それは、スバルが言った『呪われたデバイス』の事ではない。確かに、彼女にはアレも怖かったが、アレは只の皮切りに過ぎない……本当に彼女が恐れていたもの、それは……。

「……ゆめを……」
「ん？」
ヒロの服を強く掴み、少女は小さい口を開く。

「ゆめを、みるんです……」
そして、アインハルトはゆっくりと話し始めた。

十四話　『泣いた子どもを宥めるのは、意外と大変』（後書き）

最近、色々なネタが思い浮かび、なかなか筆が進まない……。

更新スピード、落ちるかも……。

１０万ＰＶ突破記念（前書き）

と、言う訳で記念ＳＳ

毎度同じく、１００％の妄想と２０％の勢いでお送り致します。

１０万ＰＶ突破記念

８月のある日、クラナガンは歴史史上最高の猛暑に見舞われていた。
最高気温４０度。

『夏という季節なら仕方ない』という考えを飛ばす程、あり得ない気温である。

「……どうなってんだ～……」
そんな暑い日の中、ヒロは居間のソファーに倒れていた。ちなみにクーラーは掛かっていない。どういう訳か、今クラナガン全土で停電が起きているらしい。
おそらく、非常用の電源がある管理局以外は全て機能停止しているはずだ。

「奪うは“熱”、冷やすは“気温”！！」
……もっとも、『言霊』を使えるヒロには余り関係のない事だが……。
「はぁ～……」
家全体の温度が下がり、気持ち良い位になる。

「ただいま～……にぃさ～ん……」
すると、タイミングが良いのか悪いのか、外に出ていたアインハルトが帰って来た。
「お……お邪魔しま～す……」
「助けて～……ヒロにぃ～……」
……余計なものを連れて……。

「あ～……極楽～……」
テーブルにたれ状態と化したスバルが俯している。
「はい～……いきかえります～……」
ソファーに座っているヒロに寄りかかって、リラックスしているアインハルトが同意する。
「ねぇねぇ、アイン。ヒロ兄ちょうだい」
暑い時も寒い時も『言霊』というレアスキルで何とかしてしまう、ヒロ。
確かに、そんな能力を持っている者なら、一家に一人は欲しい所。

「ぜっっっっっったいに、ダメです」
しかし、お兄ちゃんっ子のアインハルトは、断じてそれを許さなかった。
ヒロに抱き付き、『渡さない』とアピールをする。
「うん、そうだよね～」
結果が分かっていた為、スバルは軽く流し、またたれる。

「お前ら……追い出してもいいんだぞ？」
「すみません！　ウチのバカが本当に失礼な事して！！」
今のやり取りで軽く怒りを覚えるヒロに、必死で謝るティアナ。当の相方は未だにたれている……こんなマイペースな相方を持ってしまったが故に、苦労するティアナだった。

それから暫く、ようやく熱（主に頭の）が下がり、各々思い思いの行動をし始また。

「う～」

ゴロゴロ

ヒロは新聞や、被害を受けていない端末を使い、今クラナガンで何が起きているのかを調べ。

「あぁ～～」

ゴロゴロゴロ

アインハルトは、そんな兄の手伝いをしようと、父の書庫から色々な類いの本を持ってくる。

「ふぅぅ～～～」

ゴロゴロゴロゴロ

ティアナはお邪魔させて貰ってるお返し、と言って昼食を作っている。

「うぅぅぅ～～～～」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴ……

「鬱っっっ陶しいわーーーーッッッッ！！！！！！！」

持っていた新聞を思いっきりテーブルに叩きつけ、ヒロが怒鳴る。

「何なんだよ、もう！！　さっきからゴロゴロ転がりながら『う～』とか『あ～』とか！！　少しはお前も何かやれよッ！！！！」

先程から枕を抱え、右往左往と部屋の中を転がっているスバルを指差す。

「だって、暇なんだもん……」
「なら、外行けッ！！」
「暑いじゃん……」
「この駄々っ子がぁッ！！」
「落ち着いて、ヒロさん！？」
「あばれちゃダメです、にいさん！！」

スバルのあまりの無気力さに怒りが頂点に達したヒロを、ティアナとアインハルトは何とか抑える。

それから数十分、何とか怒りが収まったヒロは、他の三人と共に昼食をとっていた。
ちなみに、本日は猛暑という事もあり素麺である。無論スバルがいる為、テラ特盛だ。

「つ……疲れたわ……」
高さ2m強の素麺の山を、たった一人で作ったティアナの顔からは疲労の色が見えた。
「お疲れさま」
そんなティアナに労いの言葉とともに頭をぽんぽんと軽く叩く。
「ぁ……」
それを受けたティアナの顔は、しかし満更ではなかった。
「い、いえ……お邪魔させて貰ってるんですから、当然です……」
そっぽを向きそう言うが、手から逃れようとはせず、寧ろ体はヒロへと傾いていく。

「むぅ～……」
そんなティアナに対抗する様に、傍にいたアインハルトはヒロに頭を向ける。
「はいはい……アインも、よく手伝ってくれたな」

口を尖らせている妹の頭を、空いた手でティアナ同様、ぽんぽんと軽く叩く。
「～～♪」
すると、先程まで不機嫌だった顔が満面の笑みに変わる。

「うぅ……二人共ズルイよ～……ヒロ兄、私も～」
「いや、お前はゴロゴロしてただけだろ」
「うぐ……」
混ざろうとしたスバルをばっさりと切り捨てる。まったく持ってその通りである。
まあ、そんなスバルの事はさて置いて、三人は昼食を始めるのだった。
それを見たスバルは、また『ズルイ』と言って、まるでブラック・ホールの様に素麺を吸い始めた。そして、数分もすると全部なくなってしまった。

結局、この日は日が暮れるまでスバルとティアナは居座っていた。

翌日。
本日の最高気温、４５度。
昨日よりも更に暑くなったのにも関わらず、未だに電気は回復しておらず、管理局に苦情を出す人が出始めた。

というのも、何処から発生したのかは不明だが、『この暑さは管理局が保管していたロストロギアを局員が誤って起動させてしまったのが原因だ』という噂が街のあちこちに流れているのだ。
結果、暑さから来る住民の怒りやストレスは全て管理局へと向けられ、今では軽くデモが起きる程だ。

「ふぅ……」
「すずしいですね～……にいさん」
もっとも、彼らには縁もゆかりもない話しなのだが……。
昨日に引き続き『言霊』で家の温度を下げたヒロは、アインハルトと共にソファーで寛(くつろ)いでいた。
このまま、何事もなくだらだらと過ごしたいと思っていたヒロだったが……。

「ヒっっっロ兄ーー！！　海行こう！！」

しかし、現実は無情だった……。
これまた、昨日に引き続きスバルとティアナがやって来た。しかも、今日はギンガというおまけ付きである。
「ねぇねぇ、ヒロ兄！！　海行こ、海♪」
入って来るなり、凄い勢いではしゃぎ回るスバル。その手には既に海水浴のセットが握られていた。

「……」
その姿を見たヒロは言葉を失った。確信したからだ……ヤツは、やる気だ。
本気で今から海に行くつもりだ……。
そう思ったヒロは、すぐにティアナとギンガに視線を向ける。すると、二人は黙って首を横に振る。
つまり、二人でも止められなかった、と……。
ティアナはともかく、ギンガでも止められなかったとなれば、もはや積みは決定。なにがなんでもヤツは行くだろう。
「わあ～……海ですか～……楽しそうですね、にいさん♪」
更に、追い討ちが掛かる。

愛しい妹のキラキラとした純粋な視線が痛い……！！
断った場合の落胆っぷりが目に浮かぶ……妹に甘いヒロにとって、
これはかなり辛い。

「……仕方ない、か……」
あっけなくヒロは折れた。
そして、これから五人は海水浴に向かうのだが……それはまた後日。

１０万ＰＶ突破記念（後書き）

海水浴編、気になる人がいるなら感想板まで（オイ
まあ、いないとは思うけど……万が一にもいるようなら、２０万突破の時はそれかな？

書き始めたのが暑い時だったから、『猛暑』をネタにしていた……
……はず……。何故か、ティアナがお母さんポジションに……

父・ヒロ
母・ティアナ
出来の悪い姉・スバル
出来の良い妹・アイン

うわぁ……何か、リアルで想像着くわ……もし、海水浴編を書く場合、お父さん苦労するかも……。

まあ、そんなのは置いといて……２０万にも行けるよう、これからも『覇王の兄の憂鬱（仮）』をよろしくお願いします。

十五話　『怖さと優しさと……』（前書き）

毎度同じく勢いで書いたのだぜ。
変な所があったら報告お願いします

十五話　『怖さと優しさと……』

事の発端は一週間前。
夜、いつも通り一人でベッドに潜り、愛用のクマのぬいぐるみと一緒に寝た日の事だ。
その日、アインハルトは悪夢を見た。

遥か彼方、地平線まで何もない荒野で、数え切れない程の屍が大地を埋めている中、『彼』は居た……。
アインハルトと同じ碧銀の髪に、青と紺の虹彩異色の瞳。
その『彼』の周りには幾十、幾百、幾千もの屍があった。
いずれもが頭や腕、果ては腹といったものまで吹き飛ばされ、五体不満足どころか『人』とは言えない状態のものが多かった。
そして、『彼』の体は彼らの血で紅く染まっていた。

―腕も

―脚も

―頭も

髪の先端から爪先に至るまでの全てが、血で染められている。
だが、そんな気が狂いそうな状態でも、『彼』は倒れなかった。
そんな『彼』の前に、ある“二人”が現れた。
一人は、良く覚えている。

綺麗な金色の髪をした、赤と緑の―『彼』や自分と同じ虹彩異色の瞳を持つ、少し幼い感じがする、綺麗な女性だ。

もう一人の方は、余り覚えていなかった。
……正確には、頭が思い出すのを拒否していたように思えた。
そんな中、僅かに覚えているのは、大好きな兄と同じ黒い髪の男性という事だけだ。

そして、その二人は『彼』を置いて、何処か遠い所に行ってしまう。
『彼』は、必死に追いかけるが……結局追いつけず一人取り残されてしまう。

そこで、夢は終わった。
しかし、起きた後何故かどうしようもない後悔だけが胸に残っていた。

次の日も、アインハルトは夢を見た。

今度は何処かの城の中庭だった。
そこで『彼』は、あの金髪の女性と戦っていた。もっとも、『生死を賭けた』という物ではなく、模擬戦の様な物なのだろう。
だが、二人とも実戦さながらに戦っていた。

『彼』は負けじと全力を出すが……。
しかし、小柄な彼女は強かった。体格差を逆に利用し、あっさりと『彼』から一本取ってしまった。
そんな二人の様子を、黒髪の男性は木に腰掛けながら見ていた。
表情は見えなかったが、まるで見守っているかの様だ……。
この光景は一見、平和に思えた。

だが、次の瞬間には視界は黒く染まり、また『彼』は一人になってしまう。

そして、またそこで夢は覚める。
今度は、どうしようもない孤独感に襲われた。

次の日も……。
そのまた次の日も、更にまた次の日も、アインハルトは毎日『あの夢』を見続けた。
いくら幸せな状況であっても、最後は孤独と絶望しか味わわない、まさに『悪夢』。
そして、そんな中一番耐えられなかったのは、黒髪の男性が兄と被ってしまう事だ。
髪だけでなく、何処か雰囲気まで似ている気がする……そんな彼が消える様は、まるでヒロがアインハルトの元から去る事を予見しているかのようだった。
無論、“あの”兄がそんな事をする訳がない……だが、それでも１００％とは言えない。
そして、表には出さなかったもののアインハルトは恐れていた。

――大好きな兄が、自分の前からいなくなる事を……。

「……」
全てを話し終えると、アインハルトはヒロに抱き着く。
だが、その腕はいつにもなく弱々しかった。
そして、小さな……本当に小さな声で泣いてるのが聴こえた。

「に……さん……」

泣くのを我慢している所為か、上手く話せない。だが、幼い少女は言いたかった。

「にぃ、さん……は、いなく……なりません……よね？」

あの『悪夢』が頭を駆け巡る。
黒髪の青年が去る時の光景が目に浮かぶ。
考えてはいけないのに、青年の姿に兄を被せてしまう。

「……わたし、を……おいて……いきません、よね？」

『夢』で味わったあの悲しみ。
『夢』にしてはリアル過ぎる感情。
あんな物は味わいたくない。それが愛しい兄なら尚の事。

「……おいて……いかないで……おにいちゃん……」

まるで、すがるかのように泣きながらヒロに抱き着く。
体の力は全て抜け、その身を委ねる。

「……大丈夫だ……」
今にも壊れてしまいそうなアインハルト。その手に、そっと自分の手を添える。
「俺が、お前を置いていく訳ないだろ？」
器用にも後ろを振り向くと、優しく微笑んで言う。

「……お前は俺にとって大切な“家族”なんだからな」

「……にいさん……！！　大好きです♪」
その言葉で、悲しみよりも嬉しさが勝ったアインハルトは、歳相応

の可愛らしい笑顔を浮かべるのだった。

十五話　『怖さと優しさと……』（後書き）

行き当たりばったりの勢いで書いた結果がコレさ。
シリアスはあまり得意じゃない……。

間話2（前書き）

シリアス方面
本編とは一応関係あります。

間話2

とある晴れたある日の昼下がり。

少女はいつもの様に、上司である青年――リーオの仕事の補佐をしていた時だった。

自分の他にも、同じ境遇の彼の部下が二人いるが、彼女達にはこういう細かい作業は無理だろう。むしろ邪魔しそうだ。

そんな事を思いながらも後一息で仕事が終わるという……まさにその時、執務室に来客が訪れた。

顔を隠す様に黒いバイザーを付けた男――クロウが断りもなく入ってくる。そして、ソファーに腰を降ろす。

「やぁ、どうだったかな？」

その行為を咎める事なくリーオはクロウに訊く。

「ダメだな。似てはいるが良く出来た偽物だ」

それに対しクロウは首を横に振る。

先日、リーオから貰った情報を元に探ってみたが、結果はご覧の有り様。空振りではなかったにしても当たりという訳でもない。

「どんな感じだったんだい？」

「こんな感じだ」

興味深そうに訊いてくるリーオに向け、メモリーチップを投げ渡

す。
それを受け取ると丁度仕事を終わらせ、スタンバイの状態にしていたパソコンにデータをロードさせた。
そして、一分もしない内にディスプレイに映像が映し出された。気になるのか少女も横目で見ている。

そこに映っていたのは、荒れ果てた荒野で対峙する二人の人物。黒く禍々しい形状をした槍を持った男と、今ソファーで横になっているクロウだった。
画面の中のクロウはいつもと同じ格好で男と戦っていた。デバイスも武器も何も装備していない腕を振るう。ただそれだけで強力な斬撃が放たれ地面を抉り、巨大な爪痕を残す。

「いつ見てもえげつないねぇ」

彼の持っているモノの特性上、それは理解しているのだが、それでもつい言ってしまいたくなる凶悪性だ。

“防御”が一切効かないのが分かるのか、槍の男は回避する。
そして、目で追えるのが難しい程の高速の突きを何度も繰り出し反撃するが、結果はかわされ続け、両者共に決定打がないまま時間が過ぎた。
両者が距離を取り、その事に苛立ちを覚えたクロウが次で終わらせようと右腕を振りかぶった時、それは起きた。

突如、槍を持った男が苦しみだした。
戦闘の最中だというのにも関わらず膝をつき、無闇矢鱈に槍を振り回している。
端から見ればただ狂っただけにしか見えないのだろうが、男は必死だ。

――だが、男の抵抗は虚しく終わった。

槍が、まるで意思を持つ様に男の腕に侵食し始めたのだ。

柄からどんどんと男の腕に吸い込まれるその様は、まさに『同化』している様だ。

槍と腕が完全に一体化すると、男はまるで獣の様な咆哮を上げ、もがき苦しみ、どんどん身体を変化させていく。

不気味に脈打ち、肌を黒へと変色させ、皮膚はまるで焼け爛れた様に変化した。そして、数秒もしない内に男は辛うじてヒトの形を保った“何か”へと変貌してしまった。

その姿に少女とモニターの中のクロウは驚き、リーオは興味深そうに目を細めた。

そして、次の瞬間には男はまるで獣の様な素早い動きでクロウへと襲いかかってきた。

しかし、文字通りなんとか紙一重で避けるが、その際に掠めたのだろう、黒い髪がひらひらと宙を舞う。

それを見たクロウは警戒を強め、攻撃する為構えを取る。

「――ッ！！」

刹那の瞬間。クロウは右腕を大きく振り降ろし、男に向け絶対的な攻撃力を持つ五つの斬撃を放った。

それは迷う事なく男に迫っていくが、男は臆する事なく斬撃に向かってくる。

一見自殺行為に思えるが、次の瞬間男は信じられない事をした。

斬撃と斬撃の間に僅かに存在する隙間、そこをすり抜けて来たの

だ。
バリアジャケットがある為、聞いた限りではそれ程危ない様には思えないかもしれない、しかしクロウの斬撃の前ではあらゆる防御が効かないのだ、それはバリアジャケットですら例外ではない。
先の戦闘を見る限り、男はそれに気付いていたはず、なのに向かってきた。まさに正気の沙汰ではない。
……もっとも、男は既に正気ではないのだろうが……。

「チッ！！」

予想外の動きで接近し切り掛かるが、クロウは避ける事なく左腕を薙いで迎撃する。だが、振り切る事が出来なかった為か斬撃は生じず、素手のままで凶刃を迎える事となった。

しかし次に聞こえたのは、肉が切られる様な鈍い音ではなく、金属同士がぶつかり合う甲高い音だった。

見ると、クロウの左手には黒く鋭利な爪が特徴的な籠手が装備されていた。いつの間に着けたのか分からないが、それが刃を受け止めクロウを守っている。

「……ッ！？」

「クソがぁ！！」

男が驚愕し一瞬怯む。その隙を突き、クロウは力任せに腕を振るい、刃を弾き距離を取る。

「やってくれたな……」

籠手を纏った腕で構えながら、男を睨みつける。
まさか『顕現化』させられるまで追い込まれるとは思わなかった。
クロウは相手を侮っていた自分に嫌気が差した。
高をくくらず、冷静に対応していれば既に倒す事は出来たはず。

「ッ……」

苛立たし気に舌を鳴らし、男に向き直る。

「いいだろう、此処までさせたんだ。あとは存分に……後悔しろ」

声質が敬意から怒りへと変わる。
怒気と殺気が混じり、重苦しい空気を感じた男は、本能が赴(おもむ)くままにクロウから逃げる。

「残念」

そんな男の行動に慌てず騒がず、クロウはその禍々しい籠手を、天に翳す様にして構える。

そして……映像はそこで途切れた。

それから先は砂嵐だけだった。男がどうなったのか、クロウが何をしたのかは見られない。
しかし、リーオも少女も結末は分かっていた。
クロウが今此処にいる、それこそが答えだった。

「楽しめたかい？」

未だにソファーで寝転がっているクロウに、リーオは笑顔で問いかける。

「フン……さぁな」

その質問に対し、当のクロウは鼻を鳴らし背を向け、そのまま眠ってしまった。

「やれやれ」

そんなクロウの態度にリーオは「仕方がない」と肩を竦めるが、次の瞬間には彼の興味は別のモノに向かっていた。

「“紛い物”、か……はは、面白くなってきたね」

自分達が探している『偽物』が出てくるとは……。

先の映像を見直しながらリーオは胸踊らせる。

「……はぁ……」

悪い癖が始まった上司に少女はため息を漏らす。

「あの子達は今どうしているのでしょうか？」

現実逃避がてら、少女は今この場にいない同僚二人の事を思い耽っていた。

間話2（後書き）

関係なさそうである話。
少女の名前はまだ伏せておきます。

十六話　『相談』（前書き）

勢いがなくなり妄想だけになりました……筆が重い……いや、携帯執筆なんで“筆”は関係ないですけど……。

十六話　『相談』

――なんで？

去り行く背中を見て少女は思う。

『一緒にいる』と、そう言ってくれた愛しき人が自分の元から去って行く。

嫌だ！！

そう叫んでも、少女の声は届いていないのか、少年は行く。

跡を追おうと走り出そうとするが、その瞬間大きな手が少女の腕を掴む。

驚いて振り返ると、そこには……長身で筋肉質なおじさんが……店長がいた。彼は首を左右に振り、少女を止める。

そして、少女は去って行く愛しい人を涙目で、しかし笑顔で見送った。

「……あのさ」

「ぐす……なんですか？　にいさん……」

愛しい人―ヒロの言葉に少女、アインハルトは涙を拭いながら応える。

そんな妹に対して、申し訳なさそうにヒロは言う。

「俺、知り合いに会いに行くだけなんだけど……」

しかも、泊まりとかではなく日帰り。普通に夕方には帰って来る予定である。
「うぅぅ……わかってます……わたしを『おいて』いくんですよね？」
「……うん。内容は当たっているはずなのに、誤解を受けそうな気がするのはなんでだろうね」
個人的な用の為、アインハルトを置いていく事になったのだが、どうやらかなり不満な様だ。
「……分かった。何か土産買ってくるから機嫌直してくれ……」
それを直す為に言ったこの言葉がマズかった。

「じゃあ、ラプールのいちごのショートケートを二つおねがいします」

「……それ、一つで軽く千越えするやつだよな……？」
ちなみに、ラプールとはセレブ御用達なお菓子会社の一つである。
「はい。おねがいしますね、にいさん♪」
「……」
そうして、今度こそ笑顔で送り出され、軽率な発言に後悔したヒロだった。

数十分後。
ヒロはクラナガンのとある公園に来ていた。黒いTシャツに青いジーンズ、白のパーカーというかなりラフな格好だ。
ベンチに座りながら先程買った缶ジュースを飲む、そして公園に備えられている時計に目を向ける。
「……遅い」
約束した時間を一時間もオーバーしているのに、待ち人は未だ来ず。
いい加減イライラし始めた時……。

「ご、ゴメン！！　ヒロ！！」
メガネを掛け、髪を一つに結わえた人物が謝りながらヒロに向かって走ってきた。
その姿を見たヒロは「ようやくか」とため息を吐き、腰を上げる。

「遅い」
「うっ……」
そして、ようやくやって来た人物―ユーノ・スクライアに向け、開口一番でそう言う。
「ご、ゴメン！！　出る前にいきなり仕事の事で連絡が……」
「だったら、こっちにも連絡をしろよ」
言い訳―遅れた事を説明しようとするが、ヒロは途中で切り捨てる。
実際、遅れるのはいつもの事なので実は余り気にしてない。だが、連絡をしないのは別だ。
もし仮に連絡をしていた場合、ヒロはそれまで時間を潰す事が出来た。今回のように只ボーッとしてるだけにはならなかったはずだ……。
「ほんッッッとうに、ゴメン！！」
ひたすら謝り続けるユーノ。その姿を見たヒロはため息を一つ。
「……今度からはちゃんと注意しろよ？」
司書長という位置にいる為、それなりに忙しい事は知っている。わざとではないのだから、今回は許してやるか……。
そう思い放ったヒロの言葉にユーノは胸を撫で下ろす。

「但し、飯代はお前持ちな」

「やっぱり根にもってるーー！！」
それはそれ、これはこれ。
遅れてきた罰として、本日の昼食の代金を払うはめになったユーノだった。

「え……夢？」
適当なファミレスに入り、食事を始めた頃。不意に出したヒロの言葉にユーノは思わず聞き返してしまった。
「そ、夢。最近、アインがうなされている様だから……な」
パスタをフォークで丸めながら言い終えると、そのまま口へと運ぶ。ほどよくミートソースが麺に絡んで、美味しかった。
本人曰く、「近頃はあまり見なくなった」と言っているが、それでも兄としては心配だった。
ちなみに、その肝心なアインハルトの面倒は、何故か好かれている店長に頼んできた。

「お前なら、何か知ってるんじゃないかと思ってな……」
伊達に十五歳で司書長になっただけの事はあり、相当な知識をユーノは持っていた。
「ゴメン……力になってあげたいのは山々なんだけど……それは専門外だから……」
だが、流石に専門外のことだとどうする事も出来なかった。
ユーノは遺跡調査などを生業とするスクライア一族の出だ。
スクライアは考古学や歴史にはかなり強いが、医学に関してはかじった程度しか持ち合わせていなく、それはユーノも例外ではなかった。
「……そうか」
仕方がない。
そう思って、素直に諦めたヒロは次に気にしている事を口にする。
「ところで、“アレ”はお前の追っかけか何かか？」

「え……？」
ヒロがフォークを向けた先―ガラス越しに見える向かい側の洋服店の前、そこにフードを被った男性が立っていた。
風でフードがたなびき、隠れていた顔が露になる。
「――ッ！！」
その姿を視界に捉えた瞬間、ユーノは背筋が凍ったような感覚に襲われた。

軽く二mは越える長身。
自然とは思えない、異様なまでに黒い肌。
顔面全てに綴られた様々な文字の羅列。
そして、まるで獲物を捉えた肉食獣の様な鋭い眼光。

「なに……アレ……？」
道行く人々は何故か気にしていない様だが、その異常とも言える姿にユーノは恐怖を覚えた。
「ちなみに、公園の時からずっと付けられていたぞ」
「え……？」
だが、そんなユーノの気を知ってか知らずか、ヒロはまるで追い討ちをかけるかの様に言う。
その言葉に、ユーノは絶句した。
何なのか分からないが、恐らく危険な部類の人間である事は間違いないだろう。そんな者に今まで付けられていた、という事が堪らなく怖かった。

「で……」
そんなユーノの心情は無視し、パスタを食べ終え、口周りをナプキンで拭いた後、ヒロは再び訊く。
“アレ”はお前の知り合いか？」

「知らないよ！！」
ヒロの質問に、つい怒鳴り声で返してしまった。
心に余裕がない状態で、ヒロのふざけたような質問が頭にき、当たってしまった。
その事に気付き、すぐにヒロに向け顔を上げる。

「そうか」
だが、当の本人は気にした様子もなく、再び件の男に目を向ける。
そんなヒロの姿を見て、少しは安心したものの、やはり先程のは自分が悪いと判断し、謝ろうとする。
「あの、ヒロ……」
「ユーノ」
だが、その瞬間二人の声が被り、次の言葉が言えなかった。

「結界を張れ、今すぐに」

「え……ッ！？」
しかし、落胆する暇はなかった。
先程とは打って変わって真剣な表情になったヒロがユーノへと矢継ぎ早に言う。
突然の事に、最初は呆けた声を上げるものの、すぐに事態を把握したユーノは、ヒロの言葉通り結界を―それも特に頑丈な物を張る。
そして、結界の展開が完了すると同時に、巨大な砲撃魔法が店を貫いた。

結界によって移り変わった世界で爆発が起きる。
それは、黒いフードの男が放った砲撃魔法による物だった。ヒロとユーノがいたファミレスは破壊され炎上している。
唯一良かった事は、本当にギリギリのタイミングでユーノが発動し

た結界が幸いし、一般人に被害が出なかった事だろう。
「大丈夫か？　ユーノ」
「な……何とか、ね……？」
いつの間にか、店の外に出ていたヒロは脇に抱えているユーノに向けて問う。すると、ユーノは苦笑いを浮かべて応えた。
どうやら、本当に回避が間に合わないと思っていたらしく、助かった事が意外だったようだ。
その様子をフードの男は黙って睨みつける。

「……ッ！？」
「さて……」
威圧感のある視線に圧倒されるユーノを他所に、ヒロは物ともせずに親指で男を指差し、再びユーノに問う。
「何か心当たりは？」
無論、現状襲われた事に対して、だ。
「彼に見覚えはない、かな……。だから、少なくとも彼自身に何かした訳ではないと思う……自信はないけど……」
「そうか……」
ユーノの応えを聞くと、今度は男に向け訊く。
「と、いう事らしいんだが、どうなんだ？」
「……」
その問いに関する応えは無言。ただ静かに、悠然と佇んでいる。
「だんまりか？」
挑発的な笑みを浮かべてそう言うと、男は反応した。
――右腕を突き出し、魔法陣を展開させると、先程店を撃ち抜いたのと同威力の砲撃魔法を撃ち出した。
「――ッ！！」

それに即座に反応したヒロは、ユーノを抱えたまま右に跳ぶ。その回避と同時に黒い砲撃がすぐ傍を通り抜け、別の店を貫き倒壊させた。

「……とんでもない威力だな」

「……そうだね」

余りの威力に少し唖然としてしまった二人。知り合いにも砲撃が得意な魔導師はいるし、『彼女』に比べれば多少見劣りはするだろうが……しかし、それは『彼女』自身が異常なだけであり、男の放ったそれは十分過ぎる威力を持っていた。

そんな事を考えていると再び砲撃が放たれた。

今度は先程までのとは違い威力を控えた分、速度を上げた様だ。結果、倍近いスピードで迫ってくる。

だが、ヒロも負けておらず、強化魔法で身体能力を上げると一瞬で二m程横に跳ぶ。

「――固めるは“魔”、放つは“弾丸”」

その後『言霊』を使い、数発の魔力弾を形成、弾丸の如く撃ち出す。

「……」

しかし、男は構えずにただ佇む。結果、魔力弾は対象を見失う事なく一直線に飛んでいき、男に当たる……はずだった。

当たる直前にシールドが展開させ、魔力弾はあっけなく弾かれる。

そして、男は再び砲撃を放とうとして標的を視界に捉えた。

「……？」

だが、男はそこで違和感に気付く。視線を戻した先にはユーノしかいなかったからだ。

そうなると、自然とヒロの姿を探そうとして男は視線を変える。そして、それはすぐに見つかった……。

――自らの真っ正面に、既に技を出せる態勢で……。

「加減はしないぞ」
二m越えという長身が仇となった。
技を出す為、低い態勢で溜めていた事もあり気付けなかった。気配が全く感じなかった。
そんな事を思いながらも男は理解した……。

「断空拳」

――己の敗北を。

十六話　『相談』（後書き）

書く時間が減りました……ま、それは置いといて……。

ようやく更新できました。十月、全く更新出来ずにすいません……。
本来十六話はアインハルトは出ない予定だったんですが、さんざん待たせた上にアインハルトも出なかったら……なんか申し訳気がして、投稿直前に書き加えてみました。
……いやまあ、待ってくれてる人がいるかはわかりませんが……。

十七話　『油断大敵』（前書き）

※注意事項

今回、アインハルトはアの字も出てきません。戦闘パートのみです。

一部、例の如く、勢いと妄想で書いた部分があります。実際はどうなのか、わかりません。

以上、注意してください。

十七話　『油断大敵』

ユーノ・スクライアとヒロ・ストラトスの関係は思いの外長い。
かれこれ十年近い関係であり、おそらく世間一般では『幼なじみ』という物になるだろう。故に、彼らは互いの事をよく理解している。だがしかし、理解しててもユーノは彼に驚かされる事がある。

「――断空拳」
無慈悲に突き出された一撃が、二mを越える巨体を襲う。
だが、奥義と言っても過言ではない物を喰らって尚、男は吹き飛ばない。

――否、吹き飛べない。

『吹き飛ぶ』という現象は体が受けた衝撃が突き抜けた際に生じる物である。それにより生き物は皆、大きな衝撃を受けても意外と軽傷で済んでしまう場合がある。
本来なら、その傾向が出て吹き飛ぶのだが、ヒロが放った『断空拳』は、通常の物とは違う。突き抜けるはずの衝撃を、逃がす事なく全て肉体に与えるのだ。それにより身体に掛かる負担―ダメージ―は倍になる。

「……」
結果、男は意識を失い、前のめりに崩れ落ちた。大柄なだけあり、倒れた瞬間『ズシン』という音が辺りに響く。
「マズイ……」
倒れた男を見ながら、ヒロは右手で頭を抱える。

「やり過ぎた……誰の差し金か聞き損ねた……」
つい勢いで再起不能へとおいやってしまい、結局一番肝心な事を聞けなかった。

「……相変わらず、凄いね……」
後悔の念に捕らわれていると、頭を擦りながらユーノが近づいて来た。
実は先程男に接近する際、邪魔だったので投げ飛ばされてしまい、その時に思いっきり頭から落ちたので、軽くたんこぶが出来ていたのだ。
苦情を言ってもいいのだが、状況が状況なだけに『仕方がない』と、その場で言うのは諦めていた。

「ん？　ああ、ユーノか……無事か？」
「うん……頭以外は、ね」
まるで忘れていたかの様な言い方のヒロに向け、ユーノは皮肉を込めて言う。
しかし……。
「何処か打ったのか？」
当の本人は本当に分からないらしく、心配そうに見る。
「い、いや……大丈夫だから……」
余りに真剣に見てくるものだから、つい顔を背けてしまった。恐らく、無意識下でやってしまったのだろう……本当に覚えがないようだ。

「それにしても……」
話を変える為……という訳ではないが、咳払いをした後ユーノが切り出す。
「結局、彼は何だったんだろう……」
倒れた男に視線を向ける。

二mを越える巨体に、異様なまでに黒い肌、顔面に綴られたよく分からない文字。
一目見ればそうそう忘れそうにない特徴の男は、しかし何故襲ってきたのか？
とりあえず、ユーノ自身に身に覚えはない。と、なると……。
「ん？　なんだ？」
「いや、何でもないよ」
ヒロの可能性もあるが、あの様子では彼も覚えはないのだろう。だとすると……。
そこまで考えると、不意に過去の光景がユーノの頭を過る。

――――白い部屋に、拘束具で自由を奪われた黒髪の少年。その隣で狂った笑みを浮かべる一人の男の事を……。

「まさか、ね……」
考え過ぎ、そう思い今浮かんだ映像を頭を振って消しさる。
だが、その瞬間。不意に体に衝撃が走り、ユーノは突き飛ばされた。
「え……？」
疑問の声が上がる。突き飛ばした相手は何を隠そう、ヒロなのだから……しかし次の瞬間、何でヒロがそんな行動を起こしたのかよく分かった。
ユーノを突き飛ばしたのとほぼ同時に、視界の端から突如現れた巨大な何かが、異常な力でヒロを吹き飛ばした。結果、ヒロはビルの壁へと叩きつけられた。

「痛ッ……！？」
次の攻撃が来る前に、なんとか立て直そうと激痛が走る体を起こす。
咄嗟に右腕でガードしたので、どうにかダメージを減らす事が出来たが、その際右腕は完全にいかれてしまったようだ。腕そのものが本来ならありえない方向に曲がっている、恐らくもう使い物にはな

らないだろう。
瞬時にそれを理解したヒロは、右腕の事は諦め、すぐに自分を吹き飛ばした相手を見る。

そこにいたのは再起不能へと追いやったはずの男だった。
ただし、倍以上に大きくなった姿で、だ。
「見ない間に大きくなったなぁ……」
冗談混じりにそんな事を呟いてみるが、内心かなり驚いている。
元々巨体なのに、更にその倍……五mにいくかいかない程に大きいのだから……。
見上げなければ顔を見る事が出来ない。それ程までに巨大な存在が、また新たな一撃を叩き込む為、右腕を振り上げる。
それを確認すると、ヒロは回避行動を取ろうとする。

「チッ……！！」
だが、先程のダメージが響き、体が思うように動かせない。
そんなヒロの状態など気にするはずもなく、無慈悲に拳が振り下ろされた。
未だに体を動かせないヒロは来るであろう衝撃に備え、シールドを作ろうとする。

「――フリーズ・バインド」

しかし、その前に誰かが唱えたトリガーとともに、幾重もの鎖が巨体化した男を束縛する。
「まったく……僕の事、忘れてもらっちゃ困るなぁ……」
混乱する男を他所に、バインドを展開した張本人―ユーノ・スクライアが呆れ顔で呟いた。
男はなんとか首だけを動かし、ユーノを視界に捉える。そして、排除しようとバインドを破る為、肉体を強化し、力を入れる。

「――ッ！？」
その瞬間、拘束された部分が異常に熱くなり、男は驚く。
「ダメだよ、変な事しちゃあ……」
男の様子に気付いたユーノは笑顔で忠告する。
「――壊れちゃうよ」
だが、次の瞬間には纏う空気が変わり、トーンの落ちた声が発せられる。
普段の温厚なユーノを知る人物が見たら、きっと別人だと錯覚してしまうだろう……それほどの変わり様だった。
そんな姿のユーノを見たヒロは思った。
「……キレてるな、完全に」
理由は分からないが、長い付き合いで解る。アレは完全にキレている。
その証拠に、現在使っているバインド。あれは、かなり危険な物だ……。

ヒロが状況把握している間に変化が起こる。
縛っていた鎖から冷気が発生し、瞬く間に男の体は氷に覆われていく。
「……僕はね、攻撃魔法が不得手な結界魔導師なんだ……でもね、だからって攻撃手段がない訳じゃないんだよ」
巨体なだけに氷の侵食は少し遅いが、それでもバインドで体の自由を奪われた上なので為す術がない。
「こうやって、バインドに凍結魔法を付加させれば……」
心の奥底から溢れるのは恐怖。ゆっくりと、しかし確実に迫ってく

る氷。

「……ほら、ね」

ユーノが笑みを浮かべ、言い終わると同時に男は完全に氷に覆われた。

――結界内の街に巨大な氷像が一つ。

それは先程まで、動き、呼吸をしていた立派な生き物―人間である。しかし、彼はユーノの手によってただの氷像と化してしまった。

「さて、と……」

そう呟くと同時に、ユーノは手を前に翳し、新たに魔法陣を展開する。それは、確実に男を標的にしていた。

「じゃあね」

そして、ユーノは微笑みながらそう言うと、魔法を発動。

「ど阿呆」

「痛ッ！？」

……する事はなかった。

発動する前に、回復したヒロがユーノの頭にげんこつを食らわせたのだ。結果、魔法は発動せず、氷像も無事だった。

「何するのさ！　ヒロ！！」

だが、いきなり殴られた身としては、納得なんて出来るはずもなく、涙目で睨み付ける。

「お前な……あれほど俺には『殺すな』と言っておきながら、お前自身がやってどうするんだよ」

「う……」

思い出すのは、昔。
ユーノと初めて会った時の事。
まだ何も“知らず”、ただ教えられた事だけしか出来なかった頃。
そんなヒロに、ユーノは口が酸っぱくなるまで言っていた。

「……ゴメン。頭に血が上ってた……」
いくら友人が殺されかけたからといって、こんな事していい訳がない。
熱が冷め、冷静になったユーノは素直に謝る。
そんなユーノの姿を見ると、ヒロはやれやれとため息を吐いた。

「たく……で、改めて“コレ”どうする？」
氷像と化した男を動かせる左手で指差す。
「どうって……どうしよう……」
つい、感情と勢いに任せてやってしまったが、死んではいないはず。
だからと言って、このまま放置なんて出来る訳もなく、思考を巡らせる。
「……そうだねぇ……」
あと少し。あと少しで何かが浮かぶ、そう思って必死に頭を使う。
そして、閃いた。

「時空管理局です、結界の解除と事情聴取の為、同行をお願いします」

その瞬間、金髪のツインテールの黒い魔導師が、結界の中に入り込んできた。

「あ、フェイト……」
「え！？　ユーノ？　なんで……？」

「……いや、誰だよ……」
知り合いの二人はお互いに驚いているが、フェイトと全く面識のないヒロは置いてきぼりを喰らっていた。
「あ……丁度いいや」
「え……？」
ぽん、と手を叩くとユーノはフェイトに後の事を任せようと考えた。
だが……その前に、彼女の視線が“ある物”を捉える。

「だ、大丈夫ですか！？」

それを見たフェイトは一目散にヒロの元へと駆け寄った。
「……は？」
何故、知り合いでもないこちらに来るのか分からないヒロだったが、次のフェイトの行動で全て理解した。
「酷い……こんなになるまで……」
曲がった右腕を見ながら、フェイトが心配そうに見つめる。
当人ですら忘れていたそれに、フェイトはあたふたしながらも次の行動に移す。
「え、えと……私はこの人を病院に連れていくから、あとの事はユーノ、お願い」
「え……？」
言うや否や、フェイトは加速魔法を使い、ユーノが反応したする時には既にその場に二人の姿はなかった。
「いっちゃった……」
一人取り残されたユーノの声が、虚しく結界内に響く。
確かに、傍目から見てもヒロの怪我は重症だ。何せ、腕がありえない方向に曲がっているのだから……最低でも複雑骨折はしているだろうし、最悪二度と腕が使えなくなるかもしれない。
故に、フェイトの取った行動は本来なら正しいかもしれない……だが、それは『普通』の概念が通じる人に限られている。

「……ヒロなら大丈夫だと思うけどなぁ……」

ユーノの乾いた笑いが、辺り一帯に虚しく響いた。

十七話　『油断大敵』（後書き）

なんか変に強くなったヤツがいるかもしれないけど、気にしないでください。
書いていたら、何故かああなってしまった……ｏｒｚ

……いっそのこと、ユーノはこのままキャラ変えようかな？　激変はさせないけどね……たぶん。

力を得る代わりにユーノは原作のキャラ性を失いました（オイ

十八話　『悪印象』（前書き）

……スランプです、激しくスランプです……。

十八話　『悪印象』

クラナガンのとある大型病院。
その医務室の前に備えつけられている長い椅子に、フェイトは落ち着きなく座っていた。ちらちらと何度も医務室を見る。
端から見ても挙動不審な行動は、しかし終わりを迎えた。

「あ……」
医務室の扉が開き、一人の医師が出てくる。フェイトはすぐにその医師の元へと駆け寄る。
「あの、彼は……」
掴み掛かりそうになる衝動を抑えながら、冷静になろうと精神を自制した後、医師に向かって問い掛けた。
「……正直、私では対処出来ません……」
しかし、そんなフェイトに医師は首を横に振る。
「そんな……」
その言葉にがっくりと項垂れる。
不意に頭を過るのは、五年前の親友の姿。二度と歩けないかもしれない、と言われる程の重症を負った姿を思い出した。
「な、なんとか出来ないんですか？」
「先程も言いましたが、私ではどうする事も出来ません」
もう一度、駄目元で言ってみるが結果は変わらず、更に落ち込む。
「おい、なに勝手にシリアスになってるんだ？」
そこに、医務室から出て来たヒロが呆れた顔でフェイトに向けて言う。
「ッ……！？」
だが、ヒロの姿を見たフェイトは息を飲んだ。何故なら、今のヒ

ロにはなかったからだ……右腕が。
そう、腕その物が切断した様になくなっていたのだ。
「ん？　あぁ……コレな」
その驚いている顔を見て、ヒロは自らの“右腕があった所”に目を向ける。
「ほれ」
その後、左手に持っていた“ある物”をフェイトに向けて投げる。
「え……ッ！？」
受け取ったそれを見て、フェイトは再び息を飲む。
それは……腕だった。
しかも、もう使えない感じに壊れた右腕―おそらくはヒロのだろう。それを見ると、彼女の視線は自然と医師に向けられた。

「だから、早とちりするなって」
だが、そこに再びヒロが言葉を入れる。
「その腕、よく見てみろ」
「……え？」
最初は言ってる意味が分からなかったが、恐る恐る、ゆっくりと右腕を調べるとある事に気付いた。
「あれ？　……機械？」
「正解」
首を傾げながらも訊くフェイトに、ヒロは頷く。
件の腕……実は、よく見ると血は一滴も流れておらず、皮膚の下には金属製の素材や細かいコードがびっしりと詰まっていた。

「……え～と、それじゃあ……」
ゆっくりと医師の方を向く。
「ですから言ったでしょう、『私では対処出来ない』と、流石に義手を直せる程工学に詳しくありませんからね……」
困った様な表情を浮かべながら医師が言う。

「ご、ごめんなさいッッ！！」
次の瞬間、フェイトの大きな声が病院に響き渡った。

「……お前に常識という物はないのか？」
「うぅぅ……ごめんなさい……」
病院のとある一室にて、耳鳴りがする頭を振るいながらヒロはフェイトを睨み付ける、するとフェイトは縮こまりながら謝った。
先程の大声で多数の患者から苦情が殺到。結果、その原因であるフェイトと巻き込まれたヒロは防音対策がされた、ある一室に居る様に言われてしまった。
本来なら追い出されそうな物ではあるが、何故まだ留まっているのか、その理由はヒロにあるのだが……。

……。
お互いに一切言葉を発せずにいる為、沈黙が場を支配していた。唯一聞こえるのは壁に掛けてある時計の秒針の音くらいだ。
「う……」
そんな中、余りの静けさにフェイトは困っていた。何か言って場を和ませればいいのだが……何を言えばいいのか分からなかった。右腕に関しては気になるが……。
今日のフェイトはやる事なす事全て裏目に出てしまっている。おかげでヒロには悪印象しか持たれていなかった。それなのに腕について触れ、やぶ蛇だった場合、更に印象が悪くなってしまうかもしれない。
「はぁ……」
そう思うと自然とため息が出た。
――今日はついていない……。

「……あれ？」
その時、フェイトの耳に秒針以外の音が聞こえた。
最初は気のせいかとも思ったが、それは何度も耳に届き、そしてだんだんと近づいて来た。
そして、丁度フェイト達がいる部屋の所まで来ると、勢いよく扉が開いた。
「むぅぅぅぅぅぅすっっっこよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！

「え……」
しかし、そんな心配は杞憂に終わった。
すぐ後ろから聞こえた声に驚きながらも振り向くと、そこにはつい先程まで壁に埋まっていた父が、まるで何事もなかったかの様に立っていた。
「チッ……ホント、頑丈だな」
その姿を見たヒロは舌打ちをする。そんな様子を見たフェイトは“コレ”が二人なりのコミュニケーションなのだと、必死に自分に言い聞かせるのだった。

「で、肝心の物は持ってきたんだろうな」
「はっはっは、相変わらず心配性だな、息子よ。そう急かんでもちゃんと此処にあるぞ」
そう言って男性は、何処からともなくアタッシュケースを取り出す。
「ちゃんと注文通りの出来だよ」
「……ッ！？」
自信満々にケースを開く男性。そして、その中身を見たフェイトは息を呑んだ。

――その中に入っていたのは、一本の腕だった。

……いや、正確にはそれは『腕』ではなく、限りなく『腕』に近い『義手』だ。その、余りに本物に近い姿にフェイトは驚愕した。
「……まずまず、だな」
そんな彼女の事は軽く無視して、ヒロはその義手を取り付けた。
手を軽く握ったり、振ったり、空打ちもしたりする。結果、『まずまず』と判断した。
「そうか、期待に添えたようでなによりだ」

しかし、持ってきた当の本人は満足したらしく、意気揚々と部屋から出ていった。その行動にフェイトは首を傾げるが、常に父に対して辛口のヒロが『まずまず』と言った、それはヒロなりの高い評価の仕方だと父は知っていた。

「え……？　帰っちゃうよ……」

そんな事とは知らず、色々と置いてきぼりを喰らっていたフェイトは立ち去る男性を見ると、ヒロに訊く。

「ああ、元々コレを持ってくるのだけが目的だからな。用が済んだんだから、帰るのが当然だろう」

本来なら部下に頼めば事足りることなのだが、わざわざ本人が来たのはなかなか会えない家族に対しての謝罪の姿勢なのか……。

「……いいの？」

「家族の問題に首を突っ込むのは、野暮だと思うが……ま、俺も人の事は言えないけどな……」

「え……？」

問い掛けるフェイトにヒロは静かに、そう呟く。その言葉の意味が分からず疑問の声を上げたフェイトを無視して、ヒロは部屋を出て行った。

十八話　『悪印象』（後書き）

書き終えるのに凄く時間が掛かりました……だってスランプが（ry

以前のペースが欲しい……です……。

十九話　『置いてきぼり』（前書き）

原作キャラが更に一人出てきます。

十九話　『置いてきぼり』

「ねぇ、待ってよ！」
自らの前を歩くヒロに対し、フェイトは呼びかける。
「何で貴方が襲われたのか、まだ聴いてないんだけど……」
「うざ……」
先程から一々話を聞きたがるフェイトにヒロは更に嫌悪感を抱く。
「ユーノから訊けばいいだろう」
「それはそうだけど……一応、『決まり』みたいな物だし……」
「……面倒くせぇな、オイ」
まだ諦めていないフェイトにヒロはため息を吐く。
（さて、どうやって逃げるか……）
別に、管理局に関わって困る事はない。どちらかというと、『フェイト・T・ハラオウンという人間が気に入らない』と言った個人的な理由で避けているだけだ。正確に言えば、『気に入らない』のではなく『苦手』な分類に入るのだが……。
会ったばかりだが、裏表なく純粋で優しい、本当に『良く出来た人間』だと思う。故に、ヒロはフェイトが苦手だ……性格もだが、なにより容姿が気になる。金色の髪と赤い瞳……それが否応なしに“彼女”の事を思い出させる。

「……チッ」
無意識の内に舌打ちを鳴らす。それはフェイトでも“彼女”にでもなく、自分へと向けた物だ。
「どうしたの？」
そんなヒロの様子に気付いたフェイトは、心配そうに顔を覗かせるが、ヒロ本人は逃げる様に顔を背ける。その姿に不安を覚え、声を掛けようとした時……。

「に・い・さ〜〜〜〜〜ん！！！！」
幼い少女の元気な呼び声が耳に届く。
振り向くフェイトと入れ替わる様に、件の少女―アインハルトが、一直線にヒロへと向かって飛び付いて来た。
……魔法で強化された体で……。

「ぐは……！？」
結果、見事なタックルを喰らったヒロは数mも後ろに吹き飛ばされてしまった。
「にいさんにいさん！　なぜにいさんがここにいるんですか？　ユーノさんにあいにいっていたんじゃないんですか？」
しかし、そんな事は関係なく、予想以上に早く再開出来たことに歓喜したアインハルトは、矢継ぎ早にヒロへと問いかける。
「……ゴホ……ま……待て、アイン……ちょっ、息が……」
対してなんとか応えようとするヒロだったが、鳩尾に入ったタックルの所為で上手く呼吸ができない状態だった。
「？　……にいさん？　て、きゃぁッ！？」
小首を傾げるアインハルトだが、その瞬間後ろから誰かに掴まれ、ヒロから離される。
「もぅ……ようやく、見つけたよ……」
そう言ってアインハルトを抱き上げたのは、サイドポニーが特徴的な少女だった。
「え……なのは？」
「にゃはは……久しぶり、フェイトちゃん」
その少女――高町なのはの姿を見たフェイトは驚いた。何せ、自分の仕事仲間兼親友が予想打にしていない所で会ったのだから……。
そんな反応のフェイトになのはは苦笑して応えた。
「はなしてください、なのはさん！　まだわたしは『にいさんぶん』

をちゃーじしきれていません～！」
「えい♪」
「きゃん！？」
腕の中でじたばたと暴れるアインハルトに、なのははアクセルシューターを一発放ち、気を失わせた。
「な、なのは……？」
「……笑顔で放ちやがったぞ、こいつ……」
そんななのはの行動にフェイトは戸惑い、ヒロは呆れる。ヒロの場合、普通なら怒りそうな物だが、何分付き合いが長い為なのはの性格はある程度把握しており、既に諦めていた。
「あ……そうだ……フェイトちゃん」
「……え？　な、なになのは？」
「私、ヒロ君に用事があるから、この子の事お願い」
「へ……？」
だが、そんな二人の事はお構い無しになのはは半ば強引に、フェイトにアインハルトを預けた。
「と言う訳で、少し付き合ってね、ヒロ君♪」
「オイ！？」
その後、返事も待たずになのははヒロを強制的に連れて行った。

「……え～と……私はどうしたらいいんだろう……？」
残されたフェイトは唖然としながらも、そう呟いていた。
「う……う～ん……」
そして、それに応える様にアインハルトが寝言を言う。
「……にぃさん……うわきは……だめです……」
「……なのは……こんな時、一体どんな反応したらいいの……
……？」

ヒロを連れ去った、今この場にいない友人に向け、フェイトは呟いた。無論、その声がなのはに届く事はなかったが……。

十九話　『置いてきぼり』（後書き）

一応、アインハルト登場
兄さん大好きアインハルトは今日も（少し）暴走しました。

二十話　『リスク』（前書き）

ちょっと書き方を変えてみました。以前とどっちの方がいいか、教えて下さると助かります。

二十話　『リスク』

「大丈夫？」

病院の中庭。それで足を止めたなのはは、引っ張ってきたヒロに向け心配そうに問いかける。

「だったら引っ張るなよ……」

今更な問いにヒロは呆れ返す。

「ううん、そうじゃなくて……」

だが、当の本人は『違う』と否定し、視線を右腕へと向けた。

「ん？　あぁ、『コレ』ね。コレについてはお前も知っているだろう、元々無いんだから大丈夫だ」

そう言って義手である右手をひらひらと振る。

「でも、ヒロ君がそれを失った本当の原因って……」

「はぁ……だから、元々だって言っただろ。これ以上バカな事言うようなら、俺は帰るぞ」

だが、不服そうに尚も食い下がるなのはにヒロは苛立ち始め、ついに態度に表れた。

「あ……ごめんなさい……」

地雷を踏んだ事が分かったなのははすぐに謝り、今にも帰りそうだったヒロをなんとか宥めた。

「はぁ……で、一体何の用だ？」

「あ、そうだった。ヒロ君に聞きたい事があるの」

「ん？」

ぐだぐだ話すとまた脱線してしまうと思ったヒロがなのはに訊くと、逆に問い返された。

「……今、管理局で『呪われたデバイス』の噂が流れているんだけど、ヒロ君これって……“呪宝”の事だよね」

「……」

なのはの口から“呪宝”という単語が出るとヒロは口を紡ぐ。

「ヒロ君」

しかし、なのはは真剣な表情で見つめてくる。

「たく……お前、ホント勘良いよな」

なのはの勘の良さに呆れながらも下手に誤魔化す事はできないと判断し、素直に話す事にした。

「それじゃあ……」

「ああ。お前の読み通り、それは確実に“呪宝”の事だろうよ」

今度はヒロの口から放たれた“呪宝”という単語。それを聞いたなのはは気を引き締めた。

「ヒロ君。これ、どう思う？」

自分達が知る“呪宝”という存在。そして、それを少し歪めた形で流され始めた噂。

何も知らない赤の他人からしたら『よくある噂』で済むが、事情を知っている者から見たらこれは……。

「十中八九罠だな。こんなタイミングで探りを入れたら即アウト。所持者か、その関係者として捕まえられ尋問か、はたまた拷問をさせられ“呪宝”の在処を吐かせるだろうな」

「……やっぱり、そうだよね……」

言い過ぎな気もするが、しかし完全に否定する事は出来なかった。“呪宝”とは、それ程までに人を魅了する力がある。

「ああ、だから絶対に動くなよ」

故に、ヒロは……ヒロ“達”は動かない。

アレは下手なロストロギアより質が悪いが、更にそれよりも使い手を選ぶ物だ。仮に見つけても、奪ったとしてもアレに使い手として選ばれなければ基本的に害はない。なら罠と分かっている物に食い付くよりは、今まで通りに調べた方が安全だ。

「うん、分かったよ」
了承の意を込めなのはは頷く。
「用はそれだけか？」
「あ、待って……えっと……はい、今回の調査データ」
戻ろうとしたヒロを再度引き止めると、なのはは一つのデータチップを渡した。
「お前、よく軽々と持ってきたなぁ……」
なのはの行動力か、はたまた認識の違いかは分からないが、ヒロは呆れながらもデータチップをポケットに入れた。
それは、本来一般の局員では閲覧する事が出来ない犯罪者や事件について纏めた情報ファイルだった。なのははそれなりの階級にいる為、万が一それらに出くわした場合も考慮され、閲覧が許されている。
そして、今なのはが渡したデータチップの中にはそのデータのコピーが入っていたのだ。無論、ばれれば退職どころか情報漏洩の罪で捕まるだろう。
しかし、なのははそれ程のリスクを犯してでもやらなくてはいけない理由がある。
（……ヒロ君）
知らず知らずの内に力を込め、握り拳を作っていた。爪が食い込

み程の力だが、本人は気にしていない。

「ん？　どうかしたか？」

「ううん、なんでもないよ」

「……そうか」

無理して作った笑顔に気づくも敢えてヒロは触れず、そのまま病院の中へと戻って行く。

「……」

その後ろ姿を見て、なのはは決意を胸に、言葉に表す。

「……大丈夫、ヒロ君は私が守るから……絶対に」

小さく、だがはっきりとした意思を持って、なのはは誰にでもなく自分自身へと言い聞かせ――誓った。

二十話　『リスク』（後書き）

と言う訳で今回はシリアスでした。更新が遅れた理由が主にコレ。
二回くらい書き直したのにこの有り様……ｏｒｚ

あと、前書きでも書いた通り、少し書き方を変えてみました。今まで通りのとどっちが見やすいか、教えて頂けると助かります。

二十一話　『コンプレックス？』（前書き）

サブタイは主に前半のみ、後半はまだシリアス。

二十一話　『コンプレックス？』

「……かみさまなんて、だいっきらいです……」

フェイト達の元に戻ったヒロ達が最初に見たものは、何故かそんな台詞を言いながら廊下の隅の方でうじうじと拗ねているアインハルトの姿だった。

そんなアインハルトにどう対応すればいいのか解らず、フェイトはオロオロしている。

「……何だ、これ？」

「ぁ……にいさぁ～～ん！！」

兄の存在に気付くとアインハルトは一目散に駆け出し、ヒロに抱き着いた。なんだか状況がよく分からないが、とりあえずアインハルトを宥める事にした。

「うぅ～……にいさん……かみさまは、かみさまはイジワルです……」

「は？」

要領を得ない言動にヒロは首を傾げ、なのはへと視線を向ける。

「う～ん……私もちょっと分からないかなぁ……」

頬を掻きながら「ごめんね～」と謝るなのは。

同性という事もあり、なのははは偶にヒロが気付かない事に気付いたりする為、少し期待していたのだが……頼みの綱がこれでは如何に兄とてこの状況を理解するのはかなり苦しい。

「あー……どうしたんだ？　アイン」

結局、素直に『訊く』という選択を取る事にした。

「うぅ～……フェイトさんが……フェイトさんがぁ～……フェイトさんのおっぱいがおおきいんです！！」

『……へ？』

「ひゃぁあああッ！？」

アインハルトの余りに突発的な発言にヒロとなのはは呆然とし、対してフェイトは顔を真っ赤に染めなんとかアインハルトを止めようと試みる。

「あれははんそくです、ちぃとです、なんであんなにおおきいんですか！？　わたしなんて……おかあさんがぜつぼうてきだからしょうらいふあんなのに……それなのに……っ……フェイトさんのばか～～～！！」

「お願いだからそれ以上言わないでーーー！！」

しかしそれは失敗し、更に恥ずかしい思いをするはめになった。

泣きながら走り去るアインハルトを、羞恥心で真っ赤に染まった顔で追いかけるフェイト。端から見ると微笑ましいが本人達は至って本気である。

「あ～……うん。確かにフェイトちゃん、スタイルいいからねぇ……」

アインハルトの言葉に一人納得するなのは。同じ女性から見ても、あれは羨ましい。

「つか、アインはまだ五歳なんだから当たり前だと思うんだが……」

逆に五歳でそんな体型になったら正直不安でしかない。

「ヒロ君、乙女心は複雑なんだよ」

「……知るかよ……」

ヒロの独り言に、なのはは何故か得意気に胸を張りそう言うが、ヒロには分からなかったようだ。

結局、ヒロが止めに入るまで二人の追いかけっこは続いていた。

――同病院内。

とある診察室前の椅子に一人の青年が座っていた。

銀色の髪に、紫と銀の虹彩異色がやけに目を引くが、当の本人は涼しい顔で本を読んでいる。

読んでいる内容はミステリー物だ。だが普通の推理小説ではなく、どちらかというとホラーに近い内容。

「……」

つい感情移入する程に読み耽ってしまったらしく、連れの診察が終わった事にすら気付いていない様だ。

「診察、終わりました。マスター」

診察室から出てきた彼女は、無表情のまま青年に診察が終わった事を告げる。

「……？　ああ、早かったね」

マスターと呼ばれた青年はようやく本から顔を上げ、連れの彼女へと視線を向ける。

そこにいたのは、まだ小さな少女だった。

歳はおよそ九か十才程。まるで人形の様に変化しない表情でただこちらを見ていた。

「元より外傷はありません。仮にあったとしても私達は自己修復が可能なので大した問題ではありません」

無機質、と言うよりはあまり感情が籠っていない声で、少女は淡々と述べる。

そんな彼女に青年は「うん、だろうね」と陽気に返す。

「では、何故？」

この様な場所に連れて来たのか。そんな疑問が少女の中に生まれた。

「だってほら、彼が心配してたからね。だから、ちゃんとした検査

をしに来たんだよ」
笑みを浮かべながらそう語る青年を後目に、少女はついこの間の出来事を思い出す。

――それは、つい昨日の事。

いつもの様に少女が仕事を終わらせると、いつもの来客が部屋に訪れた。

「なんだ、アイツはいないのか」

そう言うと、クロウは見るからに高級そうなソファーに寝転んだ。その様子を少女は横目で見る。

クロウ――少女の主であるリーオが秘密裏に契約した犯罪組織の実質リーダーである。しかし、彼が部下と会ってる所を見た事は、少女はなかった。
実力に関しては、管理局の上層部ですら簡単に手出し出来ない程。何度か戦闘記録を見た事はあるが、そのいずれもがデバイスや武器も着けない素手から斬撃を放つだけ。この間、ようやく武器の様な爪を装備した所までは見たが、それから先の映像はなく、結局何が起きたのかまでは分からなかった。

「あ〜〜ぁ……」

思考する少女の前で欠伸をする。
目から涙は出ているのだろうか？　バイザーの所為で確認出来ない。

彼はいつもバイザーを着けている。その為少女はおろか、リーオですらクロウの素顔を見た事はない。

（見られて困る“何か”があるのでしょうか？）

基本的に顔を隠す理由は二つ。

一つは単純に見られたくない為。
これは先天的、後天的な異常や傷等の顔をなにかしらのコンプレックスを持つ者がする場合が多い。

二つは正体を隠す為。
顔は、体や髪などよりもはっきりと人を区別出来るものだ。故に正体を隠したい場合、人は必然的に顔を隠してしまう。
特に犯罪者にとって、面が割れるという事はそれだけで命取りになる場合が多い。

（普通に考えたら正体を隠す為、でしょうか）

犯罪者である事を前提に考えた場合、やはりそういう結論に至ってしまうが、しかし少女は他にも何か理由がある様な気がした。

仕事の片付けをしながら幾つか予想していくが、いずれもが何か違う気がした。

「……少し、よろしいでしょうか」

「ん？」

『なんとなく』とはいえ気になってきたので、少女はクロウに問

い掛けた。

「何故顔を隠しているのですか？」

「……さぁな」

しかし、当のクロウは淡白にそう返すと、少女に背を向け寝直した。

その様子から、おそらく触れられたくない話題だと少女は理解する。

触れられたくないのでは仕方ない。少女は意外な程あっさりと引き下がった。

元々、興味本意で訊いてみただけで本人が話したくないのであれば、別に少女としてはそれでも構わなかったのだ。

「……さて」

クロウの返答を得、片付けも済ませると、少女は出入口の扉へと向け、歩き出した。

「ん？　何処へ行く？」

その姿を視認したクロウは少女に問いかけた。

「仕事も粗方済んだ事ので、魔導の修練にでも」

「そうか」

気になったのか、少女の行き先を訊く。そして返ってきたのが、

予想通り如何にも彼女らしい答えだったので、特に驚く事もなくクロウは再び横たわった。

「……」

そんなクロウを見て、少女は顎に手を当て、暫しの間思案する。

「すみません」

「ん？」

そして、考えが纏まったのか話しかけた。耳を傾けるもののクロウは興味なさ気に聞いている。

『どうせまた質問等だろう』と思っていると、少女の口から予想外の――ある意味ではもっとも“らしい”言葉が紡がれた。

「――手合わせをお願いしてもよろしいですか？」

――という事があってから翌日……つまり現在。

善戦するも試合は少女の負けてしまった。

少しばかり気を落とした少女に、勝者であるクロウは一応病院に行く事を勧めた。

相手は余り気にしていない様だったが、クロウの攻撃の性質上心配だったらしい。帰る際にはリーオにも同じ事を伝えていた。

「心配性だからねぇ、クロウは」

素直じゃない盟友の事を思い、笑みを浮かべるリーオ。

そんな天の邪鬼な盟友の心配事を解消するのも、関係を円滑にする為に必要な事である。
だから、リーオが少女を病院に連れてきたのは彼に言われたから、という訳だけではなかった。

「そうですか」

全てではないにしろ、リーオの考えをある程度読み取った少女は一人頷く。

「じゃ、用は済んだ事だし、帰ろうか？」

「はい」

少女が納得すると同時にリーオが切り出す。すると少女はすぐに返事をし、自分の主の後ろに追いて歩いた。

二十一話　『コンプレックス？』（後書き）

……長い。

自分で言うのもなんだけど、何故かシリアスに入ると中々書けない抜け出せない……どして？

二十二話　『忘れてたもの』（前書き）

あまり筆が進まない……。そんな中更新。
当分の目標は月二話更新。

二十二話　『忘れてたもの』

「にゃふぅ～……にいさ～ん♪」

不意に、背中で眠っていたアインハルトが頬擦りをしてくる。おそらく無意識で行なっているのだろうが、その姿は何処か猫を思わせるものだった。

「やれやれ」

そんな妹の姿を見たヒロは、口ではそう言いつつも顔は少し綻んでいた。

あの後、アインハルトとフェイトの鬼ごっこをヒロが止めてから数分もしない内にアインハルトは眠りについた。おそらく遊び疲れたのだろう。

なのはと話していたヒロの背中に抱き着くと、あっさりと眠ってしまった。

「幸せそうに眠ってるね」

「うん……」

そんなアインハルトの姿をなのはとフェイトは微笑ましく……そして、何処か羨ましく眺めていた。

二人共、幼少期には『親に甘える』という事が出来なかった為、その時くらいのアインハルトが躊躇いなくヒロに甘える姿が少し羨ましかったのだ。

「ところでなのは」

「なぁに？」

少し懐かしそうに耽っていると、ふと思い出した様にフェイトは質問する。

「なのはって、いつ彼と出会ったの？」

『彼』とは勿論、ヒロの事である。

今までアインハルトの遊び相手をしていた為、すっかりと聞きそびれていた。

別にプライベートに関して口を挟むつもりはないが、自分が知らない内に自分が知らない男友達が出来ていた事にフェイトは少なからずショックを受けていた。

二人の関係がどんなものかは知らないが、少なくとも他人ではないはず……。フェイトも年頃の娘なだけあり、そういう関係の事が気になっていた。

「う～ん……ヒロ君と初めて会ったのは五年前かな」

「ご、五年……」

五年前……つまり、１１歳の時に二人は知り合ったようだ。

それから今までの間、フェイトはヒロの存在を知らなかった。なのはが隠していたのか、フェイトが気付かなかったのか、はたまた単純に間が悪かっただけのか……。

「そう……なんだ……」

流石に、二人がどんな関係か訊く気にはなれなかったが、親友が少し遠くに感じたフェイトだった。

「なんだ？」

気付くと、自然と視線がヒロに向けられていた。

するとヒロは体ごと顔をフェイトに向ける。無論、背中で寝ているアインハルトを起こさない様に。

「う、ううん、なんでもないよ！？」

つい気になって、無意識の内に見ていた事に気付いたフェイトは慌てて首を振る。

「そうか……所で、いいのか？」

「え？　何が？」

そんなフェイトの姿が多少気になったものの、ヒロは別の話題を切り出した。だが訊かれた当の本人は小首を傾げるだけ。

この様子ではおそらく忘れているのだろう。

「現場。ユーノに任せっきりだろ？」

「……あ……」

ヒロの言葉にフェイトは固まった。

そうなのだ、フェイトはヒロが重傷を負っていると思い込んで、

現場検証よりも先にこちらを優先してしまったのだ。
つまり……。
「ど、どうしよう……怒られちゃうよ……」
誰に、とは敢えて訊かない、訊いてやらない。それが今ヒロとなのはが出来る、せめてもの優しさだった。
「うぅぅ……急いで戻らないと……じゃ、じゃあねなのは、ヒロ！！」
そして急いで戻ろうと向きを変え、走り出そうとした瞬間。
「きゃっ！？」
「おっと！！」
勢いよく人とぶつかった。
相手は成人男性だったらしく、ぶつかったはずのフェイトの方が逆に倒れてしまう。
その様子を見ていたヒロは「何をしているのか？」と思いながらため息を吐く。
「大丈夫、フェイトちゃん？」
「うぅぅ～……ありがとう、なのは」
なのはは落ち着いてフェイトの傍まで行くと、手を引っ張って起こす。その親友の姿を見て、改めて自分が情けないと思ってしまう。

「大丈夫だったかい？」

ネガティブな思考になっているフェイトに声が掛かる。顔を上げると、そこにはぶつかってしまった男性――銀髪とオッドアイが特徴的な青年がいた。

「あ……ごめんなさい！！　急いでいたものだから……」

「はは、別に気にしちゃいないよ」

頭を下げるフェイトに対して、彼は微笑みながらそう言った。

「でも……」

「おい、急いでるんじゃないのか？」

尚も渋り、律義に謝ろうとするフェイトに、後ろで見ていたヒロは忘れているであろう用件を思い出せる。

「あッ！？　ほ、本当にすみませんでした！！」

すると、案の定忘れていたらしく再び慌てだす。そして、最後にもう一度だけ青年に謝ると、フェイトは正に脱兎の如く駆けて行った。

「はは、面白い子だね」

その後ろ姿を眺めながら青年は楽しそうに言う。それが誰に向けて言ったのかは分からないが。

「……」

「ん？　なんだい？」

「……別に」

ふと、気がつくとヒロが青年を観察する様に見ていた。その視線に気付いた青年はヒロに訊くも、当の本人は視線を逸らして短くそう返した。

「……」

そんなヒロの様子が気になったのだろう。今度は青年がヒロを観察し始めた。しかし、それは長くは続かなかった。

「――マスター」

聞きなれた、しかし何処か凛とした声が響く。条件反射で声がした方を見ると……。

「……え？」

「……へぇ」

なのははは驚き、ヒロは感嘆の声を漏らす。

そこにいたのは、小さい頃のなのはにそっくりな顔をした少女だった。

二十二話　『忘れてたもの』（後書き）

とりあえず、少女の容姿を書いてみた。おそらくこれで少女の正体が分かったはず……今更だけど。
あ……更に今更だけどＰＶ３００，０００、ユニーク４０，０００越えてました。ありがとうございます。
それを記念し……って訳でもないですけど、只今アインハルトがメインの番外編を書いています。正直、いつ出来るか分からないし、若干ネタバレも入っていますが、出来次第投稿する予定です。
期待しないで待ってて下さい。

二十三話　『星光』（前書き）

題名からして分かると思うけど、あの娘です。

二十三話　『星光』

視線の先――青年の背後にいる少女を見たなのはは我が目を疑った。

幼い頃の自分と瓜二つの顔。髪は長くなく、肩の辺りで切られている。

暗く、光を写さない青い瞳は、されど強い意思を持っている様にも感じた。

「マスター、車の準備が出来ました」

「ああ、ありがとう。いつも気を遣わせて悪いね」

なのはの視線に気付きながらも少女は敢えて無視し、青年にそう言う。

それに対し青年は笑いながら少女に礼を言った。

「それじゃあ、僕達も失礼するよ」

「待って……」

青年と少女はなのはの静止も聞かず、病院を後にする。

残されたなのはは浮かない顔で二人の出て行った、病院の出入口を見続けた。

「……」

そして、ヒロは気になる事があるのかなのはを一瞬見た後、背中で寝ているアインハルトを背負い直した。

病院の出入口前。
そこに見るからに『高級車』と言った感じの黒い車が停まっていた。
傷や汚れはなく、新品の様に光を反射して佇むその姿は、かなり場違いな光景だった。
そんな空気を読んでいない車に、病院から出て来た青年と少女は何の躊躇いもなく乗り込む。

「はは、面白い事になったね」

後部座席に座るや否や、青年――リーオ・オルグラスは笑いを溢す。リーオの次に車内に入った少女はそんな主に対し、疑問符を浮かべる。

「何がそんなにおかしいのですか？」

「何が？　決まってるじゃないか。まさかこんな所で君の『オリジナル』に会うなんてね」

少女の疑問に対し、リーオは即座に返し、その後も笑い続ける。こうなったら暫くは戻らないだろうと判断した少女は、仕方なく運転手に『発進』の合図を送る。リーオの反応に戸惑っていた運転手は、少女のその配慮に内心感謝しながら車を走り出させる。

一分、二分、三分……。

病院を出た車は今、首都クラナガンの街道を走っている。都市部という事もあり、ビル等の高い建物が次々と流れていき風景の一部と化す。
そして、目的地である管理局の本局が見えてきた時、リーオが口を開く。

「ねぇ、キミはオリジナルである彼女――高町なのはと戦ったら勝てるかい？」

「愚問ですね」

唐突な質問の内容にも関わらず、少女――星光の殲滅者はまるで一笑するかのように答えた。

「例え私の形の元になった存在とはいえ、実力も互角なはずがある訳がないです。そして、そうなったら私が勝ちます」

「自信満々だねぇ」

静かに目を閉じ、けれど気迫だけは十分に備えた少女。そんな彼女の態度にリーオは疑問を持つ。

「己が武を誇らぬ者などいないでしょう？」

「……ぷ、はっは♪　そうだね！　そういう者だよね、キミ達は！！」

だが、それが当然に、当たり前の様に言った少女を見たリーオは吹き出し、再び大笑いをした。

「……はぁ……」

何処が面白く、何がツボだったのか理解できない少女は、笑いっぱなしの主に対し半ば呆れながらため息を漏らす。

「ま、その時が来たらよろしく頼むよ」

未だに笑いながらも、それだけははっきりと言うリーオ。

「はい、マイマスター」

そしてそれに対し、はっきりと強い意思を持って少女は頷いた。

――数時間後、ストラトス邸。

「なっとくいきません」

家に着き、目を覚ましてから数刻。アインハルトは兄の隣で暢気に夕食を共にしているなのはを指差し――もとい、箸差しながら文句を垂れる。

「行儀悪いぞ、アイン」

ヒロに指摘を受けると「う～」と唸りながらも、その行為を止める。それを微笑ましく見守っていたなのはにアインハルトは再度睨む。

「……どうしてですか？」

今度は頬を膨らませ、ジト目で兄を睨む。

「さっきも言ったろ？　コイツにも個人的な用があるからな」

「……だからって、なんで……」

先程から何度も軽く流すヒロにアインハルトは最後の抵抗を示す。

「なんでなのはさんがウチにとまっていくんですかーーー！！！！」

日が暮れてから数十分後、幼い少女の叫びが市街地に響き渡った。

二十三話　『星光』（後書き）

少女もとい星光の殲滅者の名前がようやく出せたぜ……

あとは星光の名前をどうするか……あの娘だけ横文字だと上手く区切れないからいい感じの名前がなかなかできない……一応『ルーチェ』という厨二臭い事この上ない名前を考えてもみたが、さてどうするかなぁ……。

二十四話　『何を思い浮かべたのかな？』（前書き）

題名で分かるだろう、皆。
シリアス突破したぜ！
ちなみに、今回は思い浮かんだのを書いただけなので短いです。

二十四話　『何を思い浮かべたのかな？』

「……ぁっ！？　う、ん～～ッ……に、にい……さん……うぅぅッ！？」

「あ、悪い。痛かったか？」

「す、少し、だけ……あふっ！？」

夕食から三時間後。

ヒロとアインハルトは居間のソファーである事をしていた。

「穴が小さいから力加減が難しいな」

「ひゃぅっ！？　にいさん！　そこは……！！」

年相応に小さい穴を多少強引に入れて、弄くる。

その度に穴の中が刺激され、アインハルトはその何とも言えぬ感覚に身悶えていた。

「大人しくしてろ、なるべく優しくするから」

「はぁ……はぁ……はぁ……は、はい……」

自分から誘ってきたというのに思いの外抵抗する為、一応釘を刺す。

もっとも、あまり効かないだろうが……。

「さて、再開するか」

「お、お願いします……」

そして、再びやり始めようとした時。

「……なにやってるの？」

なのはが居間に入って来た。

シャワーを浴びた後だからか、肌が潤って何処か艶やかな雰囲気を醸し出している。ストラトス邸に来る前に買ったピンクのパジャマも相まって、更に魅力が溢れていた。

「なにって……見て分からないか？」

しかし興味がないのか、はたまた別の理由か、そんななのはの姿を見てもヒロは顔色一つ変えずに返答に答えた。

「『耳かき』だが」

「うん、だと思うけどさ……」

改めて現在の二人の状況を確認する。

ソファーに座ったヒロ。その膝に頭を預け、悶えながら寝転ぶアインハルト。そして、ヒロの手には耳かきの棒がしっかりと握られていた。

「何で、アインハルトはそんな息も絶え絶えに悶えてるの？」

横たわりながら年不相応の色っぽい声を上げるアインハルトを指差す。

「……知らん、何故か俺がやるとこうなるんだ……」

「ふ～ん」

ため息混じりに語るヒロになのはは疑い半分で頷く。

「にゃ、にゃのはしゃんもやってもらへば、わ……わかりゅとおもひまふ……ひゃぅ！？」

そんななのはにアインハルトは言う。ただでさえ舌足らずなのに、呂律も回らない為何を言っているのかうまく理解出来ないが……。

「……じゃあ、お願いしようかな？」

「いやまあ、俺は構わないけど……」

アインハルトの言葉を聞き興味を持ったのか、なのはは『試し』にといった具合で申し出る。それにヒロは、気は乗らないが『まあ、いっか』とアインハルトのついでにやる事にした。

「ひゃ！？　ちょっ、ヒロ君、そこダメ！！　そんな奥までしちゃいやぁ……！！　そこは止めて、弱いの！！」

「お・ま・え・も・かッ！！」

半ば予想出来ていたが、やはり色っぽい声が出てきた様だ。

二十四話　『何を思い浮かべたのかな？』（後書き）

と、いう訳で、最初の会話でどんな事思い浮かべましたか？　こんな感じの話は一回書いてみたかった。

そういえば本日の更新日、６月４日ははやてさんの誕生日です。おめでとう。

はやて「ラグナロク」

ぎゃあああああ！！！！

はやて「よし、掃除終了」（作者がやられた原因は活動報告の『あ……忘れてた』にて）

ヒロ「八神ー、ケーキ焼けたぞ」

なのは「はやてちゃん、早く早く」

フェイト「パーティーの用意出来たよ♪」

はやて「うぅぅ……みんな、ありがとな」

パーティー内容は時間がない為書けませんでした。みなさん、思い思いに想像して下さい。

二十五話　『血の接吻』（前書き）

前回、シリアスを抜けたと言ったな……あれは嘘だ（オイ

妄想と勢いで書いてるので、こうなりました。

あと多分今回はＲ－１５指定だと思われ、注意……する必要があるのか分からないけど、一応……。

二十五話　『血の接吻』

「お～い、大丈夫か？」

「にゃ……にゃんとかぁ～……」

耳かきを終えてから数十分。
現在、なのははヒロの部屋でダウンしていた。ベッドの上でだらしなく五体を預け、枕に顔を埋める。

「ふにゃ～……ヒロ君の匂い～」

「……そういうのニオイフェチって言うんだっけ？」

にやけきったなのはの顔を見たヒロは、ふと後輩が以前言っていた事を思い出し、呟いた。

時刻は、そろそろ十一時を告げようとしていた。
時間が時間だけあり、アインハルトは既に自室で寝ている。本当はヒロと一緒に寝たかったのだろうが、この後ヒロとなのはが『他人に聞かれたくない大事な話がある』というと、怪しいと思いながらも渋々引き下がった。

「……そろそろ始めるが、いいか？」

「うぅ～……やっぱりやるの？」

ヒロの問いに、なのははは枕を抱きしめながらごろごろと転がる。
本人としては反抗的な表現らしい。
「やらなくてもいい。が、その場合お前が『困る』だけだ」
そんな態度のなのはにヒロは淡々と――だが、何処か嫌味を感じる語り口で説明した（様になのはには見えた）。
「うぅ～……分かったよ……それじゃあ、お願いします」
流石に『困る』状態に陥るのは嫌なので大人しくいつもの如く頼み込む。
「じゃ、始めるぞ」
「……うん」
ベッドに腰を掛け直すなのは。そのすぐ目の前に立っているヒロ。
二人の間に暫しの沈黙が続いた頃。
不意に『ガリッ』という音が聞こえた。
音の出所を探すよりも先にヒロの口端から紅い液体が滴り落ちる。
恐らく、故意に口を切ったのだろう。
そんなヒロの様子にもなのはは慌てず、静かに身構える。
口の中が血の味しかしなくても気にせず、ヒロはなのはに近づく。
一歩、二歩、三歩……。狭い部屋だから、十歩もしない内になのはの元にたどり着く。
腰を落とし、視線を合わせ、どんどんと距離を詰め寄る。
「う、ん……」

そして互いの口が触れ合い、接吻――俗に言う『キス』という行為をする。しかし、二人が行なっているそれは恋人同士が行なう物とは違う。

「ん！　ん～～～！？」

抵抗を始めたなのはが逃げない様に、ヒロはベッドに押し倒す。なのはの口を犯すのは、愛しい者の媚薬の様な甘美な唾液ではなく、全身を巡る熱い血潮そのものだった。

意味や捉えは違えど、今のなのはは吸血鬼の様に生き血を呑んでいた。……正確には無理矢理呑まされていた。

「……っぱ！！　ハァ……ハァ……ひ、ヒロ、君……ちょっと待っ……んむぅ！？」

呼吸をさせる為一度は口を離すも、数秒もしない内に再び塞いでくる。

見た感じ、ヒロが一方的になのはを押し倒している様に見えるが、一応これは二人の同意の上である。更に言えば、これは性行為ではなくどちらかというと儀式に近い物だ。

必要なのは『ヒロの血』を、『なのはが呑むｏｒ体内に入れる』事だ。

ちなみに、何故こんな方法かというと……。普通の人なら分かると思うが、輸血以外で好き好んで他人の血を自分の体の中に取り込む事は基本的に少ないだろう……それも口から。最初こそはヒロも普通に呑ませようとしたのだが……身体が拒否し、危うく戻してしまう所だった。結局その後も、あの手この手で呑ませようとするも全滅。注射でヒロから抜いた後、なのはに入れるという方法もあっ

たが、道具の準備等色々と問題があったのでこれも却下。

「ん、ぷ……ぁ、ハァ……ヒロ、くぅん……」

結果、残ったのがこの方法だけだったのだ。

幸か不幸か、『キス』が感情を昂らせているおかげか、今の所ののはは戻していない。

……まあ、色っぽくなるのは仕方ない。理由や意味合いはどうあれ、これは立派な『キス』なのだから……。

――数分後。

「うぅぅ〜〜……」

ベッドの上で一人身悶えるなのは。

ちなみにヒロはシャワーを浴びに行った為、現在部屋にいない。

「やっぱり生殺しだよ〜〜！！」

そして、一人っきりになったなのはは先程の『キス』の影響で身体が火照っていた。それを一体どうやって冷ますか、なのはは本気で悩んでいた。

「……いっそのこと……」

――受け入れてくれればいいのに……。

そう思うも、『無駄だ』とすぐに頭が理解する。

それはヒロの性格を考えたからでも、女の勘でもない。単純な問題、なのはは既に『告白』しているし、『振られて』もいるのだ。

「……ヒロ君のバカ……」

当時の事を思い出すと自然に口から言葉が漏れる。聴かせるべき相手がいないそれは、虚しく部屋の中に響くのだった。

二十五話　『血の接吻』（後書き）

シリアス抜けたと思っていたけど、まだ続いてしまったか……恐らく次回もそうかな……。

あと、タイトルが若干厨二っぽい……しかしこれ以外あまり思い浮かばなかったという現実……。

ちなみに、なのはがヒロの血を呑まないといけない事にはそれなりの理由があります。

告白と振られた事についてもまた後で、一応こちらもちゃんとした理由持ち。

二十六話　『期間』（前書き）

ホントに珍しく早めに更新。

……え？　ページ数が少ない？　これでもがんばってるんです……

ｏｒｚ

二十六話　『期間』

――ザァァ……。

幾千もの滴が重力に従って落ち、フローリングの床で爆ぜる。適度に温まったお湯が湯気を作り、室内に軽い霧を発生させる。

ヒロは換気扇のスイッチを押してから、熱い雨に打たれ始めた。

「……はぁ……」

汗と共に疲れも流れたのか、自然とため息が漏れる。

気付けば、最近ため息が多いと感じる。最早癖と言われてもおかしくない程だ。気苦労が絶えないからか分からないが、しかしそろそろその内の一つは終わる。

「早くて一ヶ月、どんなに遅くても三ヶ月……」

それはなのはに残された期間の事。『期間』と言っても悪い意味ではなく、良い意味で。

恐らく、その間になのはは完治するはず……そうなれば……。

「ようやく返済か、随分と掛かったな」

今まで貸していた物がようやく返ってくる。そう思うと自然と安堵の息が漏れる。だが、同時に寂しさを感じていた。

「……良くも悪くも、彼処まで実直に好意をぶつけてきたヤツは、アインを除けばアイツが初めてか」

不意に『あの時』――初めて告白を受けた時の事を思い出した。

『私――高町　なのはは、ヒロ君の事が好きです……付き合って下さい』

場所は確か……公園だった。帰宅時間だからか、周りに人はいなかった。夕焼けの緋色をバックに告白してきたなのはは、純粋に綺麗だと思った。好意を持たれる事は素直に嬉しかった。だから……。

『……悪い……』

――だから、ヒロは断った。

なのはの事は好きだ。友人として、そして異性としても好意を持てる存在だ。

「……でも、だからこそ……」

“その関係”にだけはなってはいけない。絶対に“後悔”するから。

それなのに、後悔したくないから振ったのに、何故彼女に未だに尽くしてくれるのか？　確かに彼女には『貸し』がある。しかし、それを入れても此処までする理由が分からない。恐らくその答えはなのは本人にしか分からないのだろう。

仕方ないと頭を切り替え、今問題な物に目を向ける。

「……」

ふと、ヒロの視線が左腕に注がれる。湯気でよく見え難いそれを自らの目線の前に持ってくる、湯気の霧に覆われて見えなかったそ

れが姿を現す。

――赤く、朱く、紅く染まった一本の腕が……。

手首から肩にかけ一切の皮膚が剥がれ、筋肉の筋や血管がはっきりと見える。普段は長袖で隠している為見えないが、今この瞬間でも脈打つそれは、まさに生きている証とも言えた。

一見剥き出しになっているそれは、しかし魔力でコーティングしている為水を容易に弾いている。

「限界、だな……」

今までの経験から見切りを着け、諦めた口調でヒロはそう宣言する。

不意に虚空に向け軽く空打ちをする。水滴を弾き、綺麗な型の突きが出来た。

動作には問題ない。しかし、やはりそろそろ維持する事が難しくなってきている。現に、既に左腕の感覚はほとんど感じなくなった。多少の熱を感じる程度だけ、痛覚等はもう死んでいるだろう。

「この状態で、あとどれだけ持つか……」

そう思い、件の左腕を一瞥するヒロ。しかし、今考えても仕方ないと諦め、来る時が来たら考えよう……何処か客観的に思考を纏めると、シャワーを止め浴室から出て行った。

その際に、右肩口だけでなく両足の付け根にも、何かで切断した様な痕が生々しく残っていた。

二十六話　『期間』（後書き）

シリアスが……続く……いつ頃抜けるかな？

二十七話　『愚痴』（前書き）

睡眠時間を削り、何とか書けた。
何故か寝る直前が一番書けるという……まあ、結果寝るの遅くなりますが……。

二十七話　『愚痴』

寝間着に着替えたヒロは自室には戻らず、居間へとやって来た。ソファーに腰掛け、携帯端末からある回線に繋ぐ。そして数回のコールの後、その人物は応えた。

『どうしたの？　ヒロ』

回線が開き、モニター越しにその人物――ユーノの顔が映し出された。気のせいか、何処かやつれている様に感じる。

「ちょっと頼み事があるんだが……いいか？」

『？　うん……まあ、僕に出来る事なら……』

返ってくる言葉に覇気が感じられない。いや、元々覇気は感じなかったが今日は更に弱々しい。

「無理なら別にいいが」

『あ、いや、別に大丈夫だよ……』

そうは言う物のやはりユーノの顔は優れない。

「どうかしたか？」

純粋に気になった、だからそう訊いたのだが……それは間違いだったとすぐに思い知った。

『それがさぁ、聞いてよヒロ！　クロノってば酷いんだよ！！』

（……マズイ……）

そう思った時には既に遅し、ユーノはお喋り大好きな女子高生すら霞む程のマシンガントークに入っていた。

『フェイトがヒロを連れて行った後、遅れてきた局員に事情を説明しなくちゃいけなくて、それだけで半日潰されたのに、それなのに帰ったらいきなり「この書類が欲しいからすぐに送ってくれ」ってあのバカが言ってきてさぁ！　大体アイツはこっちの事なんてお構い無しにいつもいつも……』

以下同じような内容の愚痴が数十分続く。

要約すると……せっかくの休みだったのにフェイトがいない間の処理や、クロノからの急な入り用で潰された、らしい。

細かくは知らないが、ユーノの仕事がどんなにハードか、愚痴られていたヒロはおおよその予想が出来た。だから、久々の休みを潰されて腹が立っている事も理解出来る。

「……今度奢るから、まずは落ち着け」

『……うん、ありがとう……』

ヒロの説得により、何とか怒りが収まる。苦労しているんだなぁ……と改めて思った瞬間だった。

「ま、本当に余裕がある時でいいからな」

『うん……それで、頼みたい事って何？』

愚痴を吐いて落ち着いたのか、ユーノは改めてヒロの用件に触れる。小首を傾げ、頭に『？』マークが浮かんでいる。

「お前、コイツの事知ってるか？」

そう言って新たに端末を弄ると、あるデータを送る。

『……と、届いた届いた……え〝……』

送られて内容を見てユーノは声を上げる。何度確認しても送られた内容に変わりはない。

『……ねぇ、ヒロ……まさか、コレって……』

モニターの端の方に表れたデータ、そこに映し出された人物の写真を観てユーノの頬が引き吊る。

「そうだ、若くしてその地位にまで上り詰めた男、時空管理局少将――リーオ・オルグラスだ」

『……やっぱり……』

ヒロの言葉を聞き、改めてデータを観る。

銀色の髪に、銀と紫の光彩異色が特徴的な青年。歳はまだ二十に入って少しだけ。だと言うのに、彼は異例なスピードで今の地位にまで上り詰めた。

「実は今日、コイツとあった」

『え……！？』

唐突な告白にユーノは声を上げる。

「ま、会ったと言っても軽く顔を合わせた程度だがな」

昼間、病院で会った事を思い出す。あの特徴的な瞳を持つ者はそう多くはいないだろう。

「正直な感想は……きな臭かった」

元々、その異常過ぎるスピードで昇格していったリーオにはよくない噂が幾つも存在していた。

金で買収しているだの、目障りな人間を秘密裏に消している等がある。事実、リーオが昇格する前に人が殺された話があった。勿論表向きは事故扱いだが、現場を見る限り明らかに何者かによって殺害された事は一目瞭然だった。

『そう？　僕も何度か会った事あるけど、笑顔を絶やさない良い人だと思うけど』

「だからだ……」

それにあの張り付いた様な笑み。ヒロはあれも気に入らなかった。上辺面だけは人畜無害の様な顔をしているが、その本心は全く読めない。何を考えているのか分からない。

「ん？　『何度か会っ事がある』って……どういう事だ？」

確かユーノは仕事場から出る事はほとんどないはず。今日はあれは偶々休みが入ったからの珍しい例だ。

『あ、そっか……一般的には知られていないんだ。彼、結構な比率でここに来るんだ』

「無限書庫に？」

『うん。それが凄いんだよ！　彼、一度に五冊以上の本を速読するんだ！！　しかも、ほとんどを数分もしない内に読み終えるんだ！！』

趣味が合うからか仕事柄か、ユーノは熱心にリーオの事を語る。曰く、素晴らしい人材らしい。

「あっそ……ん？」

興味がない。そう思い、ユーノの言葉を右から左に流そうとするが、一つ気になる点があった。

「五冊以上……おい、まさかと思うが、十冊以上の同時読みとかやってないよな？」

まさかと思うも、やはり気になったので単刀直入で訊く。

『よく知ってるね、僕は知らないけど、司書の一人がその光景を見た事があるらしいんだ。目の前に並べた十冊全てを、いつもと同じ速度で読んでいたらしいよ』

「いや～凄いね」と感心しているユーノを他所にヒロは思考を走

らせる。

「目の前……て事は視界には入ってるって事か……ならアイツは……いや待て、確かあの適合者は……」

『……ヒロ……？』

突如、目の前（モニター越しだが）でぶつぶつと呟き出したヒロにユーノは不安を覚えた。ヒロがこうなると大抵が“アレ”絡みだったりする。

「……やっぱり可能性はあるか……」

ある程度考えが纏まったのか、ヒロは改めてユーノに顔を向ける。

「……出来る範囲でいいから、コイツの過去について調べてくれ」

『……うん、分かったよ』

真剣な表情で『出来る範囲』や『過去』と限定的に言い直す。その雰囲気を察しユーノも気持ちを切り替える。つまり、彼は危険を孕んだ存在の可能性があるとヒロは考えているらしい。

そして、ヒロがそう考えているモノは一つしか考えられない。

『なんとか調べてみるよ』

だから、ユーノは“出来る限り”頑張るつもりだ。それが今出来る唯一の事だから……。

二十七話　『愚痴』（後書き）

はい、またしてもユーノさん登場。
二次では比較的、淫獣やいらない子扱いされる悲しい子だけど、ウチの所では意外とキーパーソン。こう見えてヒロとはアインハルトよりも長い付き合いなんだ……設定上は。

夢話（前書き）

タイトルで分かる通り、今回は夢の話。回想みたいな物。誰の回想かはすぐ分かると思う。

ちなみに内容はかなり短い、二ページいきませんでした……ｏｒｚ

夢話

――初めて『彼』に出会ったのは小学五年の時だった。

その年、彼女――高町　なのはは大きな怪我を負ってしまった。それこそ、医者に「魔法を使うどころか、もう二度と歩けないかもしれない」と言われてしまう程に致命的な……。

誰が悪い訳でもない……強いて言うなら、周りの制止を振り切り無理に働き続けた『なのは（自分）』だろう。

そんな自分勝手な我が侭で起きた事態……はっきり言って自業自得だとなのはは思った。

……けど、それでも……なのははまた魔法を使いたいと思った、空を自由に飛びたいと思った。それは管理局員としての義務や使命ではなく、ただ単純に『好き』だから。

自称『普通の小学生』が、唯一はっきりと取り柄として言える物。それを失った後はただただ無気力な毎日が続いた。

その日、なのはは人知れず屋上に来ていた。この世界の病院は、なのは達の世界に比べ科学が発達している為か一人で院内のほとんどを詮索する事が出来た。

『歩けない』と言われた体は今、車椅子に預けている。思う様に動けない体を持つ親友の気持ちが少しだけ分かった気がする。

「あ……」

外に出た瞬間、僅かに声が漏れた。それは失望に満ちたものだっ

た。

――曇天。

それが本日の空模様。厚く暗く覆われた雲は、今のなのはの心情を現すかの様だった。

「……」

期待していた物が見れず、心に影が落ちる。青空でも見れば、今の鬱蒼とした気持ちが多少は晴れるかとも思っていたのだが……期待は裏切られた。

そうなると只でさえ暗い気持ちが更に暗く、後ろ向きになる。

ふと、人が落ちない様作られたフェンスに目を向ける。否、正確にはその向こう側……空だ。暗くても、青くなくても、やっぱり空は広く高い。

無意識の内になのははフェンス越しに手を伸ばしていた。もう無理だと分かっているのに、意味がないのに、尚足掻こうとする様に只手を空に向かって伸ばす……。

「もう……少し……」

“それ”が何かは分からない。しかし、なのはは後少しで何かを掴める様な気がした。

ただ必死に、ただ滑稽に、手を伸ばす。端から見ればおかしな子どもだ。

だからだろうか……その滑稽さに神が慈悲を与えたのか……いや、この場合は悪魔かもしれないと後になのはは思う。

「自殺でもするのか？」

「……え？」

唐突に背後から聴こえた声になのはは驚き、振り返る。

そこには、自分の出身国ではよく見る……しかし、この世界では余り見ない黒髪の少年が、冷めた視線でなのはを見ていた。

――コレが、高町なのはとヒロ・ストラトスが初めて出逢った瞬間だった。

夢話（後書き）

という訳で今回は回想回。時期的にはなのはさんが死にかけたあの時。此処からオリジナル要素がめちゃくちゃ入っていくと思われ……。

『七夕』（前書き）

久しぶりの投稿、タイトル通り『七夕』。
番外編です。

『七夕』

「に・い・さーーーん！！」

「ぐは！？」

早朝一番、アインハルトは愛しき兄に目覚めの一発――ボディプレスをかます、熟睡していたヒロはそれをまともに受けてしまい、一瞬呼吸が出来なくなった。

「にいさん、にいさん！　タナボタですよ、タナボタ！！」

しかし、そんな兄の状態に見向きもせず、アインハルトは普段の倍以上のテンションではしゃいでいる。

「はぁ……はぁ……はぁ……っ。……た、タナボタ？」

疑問符が頭に浮かぶヒロに「そうでーす」と元気よく返す。

「こら」

「あぅ！？」

そこになのはがやって来る、半ば暴走していたアインハルトの頭を『ポカ』という擬音が聞こえそうな程弱い勢いで軽く叩く。

「なにするんですか！？　なのはさん！！」

涙目で反論するが、そんな事は関係ない様になのははアインハルトの襟首を掴み、まるでネコの様に持っていく。

「まずは朝ごはんの準備だよ」

「うにゃあぁぁ！！　にいさ～～ん！！」

「……なんなんだ、一体……」

二人が去った後、静かになった部屋にヒロの呟きが響いた。

「ふ～ん、七夕ねぇ……」

朝食時、みそ汁を啜りながらヒロは呟いた。

「うん、そうだよ。今日、七月七日は七夕の日なんだよ」

ヒロの正面で焼き魚の赤身を崩していたなのははそう応えた。

そう、先程アインハルトが言っていた「タナボタ」とは「七夕」の事だった。

「そうです！　タナボタなんです！！」

「『たなばた』、な」

尚も間違い続ける妹に兄は優しく訂正を入れる。

「で、その『七夕』をやろうと？」

「うん」

「はい！」

ヒロの質問に即答する両名。仲良いな、などと思いつつも気になる点を一つ。

「別にやる事に反対はしないが……ミッドチルダ（こっち）に笹はないぞ」

『……あ……』

なのはは肝心な事を忘れていた……此処は、日本どころか地球ですらなかった。

夕方、ストラトス家のベランダになのはとアインハルトがいた。

「うぅ〜〜……」

「まぁ、仕方ないよね……」

あれから、二人は急いで管理外世界等の品を扱っている店を回ったが、結局何処にも笹は見当たらなかった。多くはないものの、地球の出身者やリンディと同じ様に地球に興味のある人達が同じ目的で買って行ったらしく、全て売り切れだった。

「せっかくきがえたのに……」

そう言ったアインハルトの今の姿は浴衣だった。青を基調とし紫

陽花の模様が入った綺麗な物だった。

「仕方がないよ、来年やろう、ね？」

慰めているなのはも浴衣姿だった。ピンクを基調とし、桜が模様が入った物だ。二人とも、せめて気分だけは味わおうと着替えたのだが、結果は更に暗くなってしまった。

「……なにやってんだ、お前ら……」

そこにバイトからヒロが帰って来た。

家に帰ったら、明かりも灯さずベランダでシクシクと泣いてる浴衣の少女が二人。時期が時期だから、一瞬お化けかとも思ってしまう……それ程までに今の二人は暗かった。

「あー……もう、ほれ」

見ているだけで、こちらも憂鬱な気持ちになりかねない。

だからヒロは、少し乱暴だが手にしていた物をなのはに向けて投げ渡す。

「え……？」

いきなりの事でなのはは驚く物の、何とか“それ”を受け取る。

「これって……」

なのはの手の内にあるのは、自分達があれほどまで必死に探してなかった物。

「笹？」

子どもの時から使っているのに比べれば明らかに小さいが、それはまごう事なき『笹』だった。

「ヒロ君、これ……」

片手で持てる程の小さな笹。大きいのがないと分かった時点で、なのは達も同じ物を探していた。だが、結局それも見つからなかった。だというのに、一体どうやって……。

疑問符が浮かぶなのはにヒロは簡潔に答える。

「店にデカイのがあったから、笹の部分だけ貰ってきた」

そう、今日ヒロがバイト先に向かうと、何故かそこには店の天井に届く程の大きな笹があったのだ。そして思い出した、『店長、イベント物（こういう事）好きだったなぁ……』と。

そして仕事の最中、店長に予約しなければ手に入らなかった事を聞き、なのはとアインハルトの苦労が徒労に終わった事を察したヒロは、仕事が終わった後店長に頼み、笹の部分だけ手に入れてきたのだ。

「うわぁ～～ん！　にいさ～～～ん！！」

粗方の理由を聞き終わるとアインハルトが抱き着いてきた。多分、七夕がやれる事が嬉しいのだろう。

「はいはい。飯の支度もあるんだから、さっさとやるぞ」

「はい♪」

「うん♪」

そうして思い思いの願いを記した短冊を笹に吊るし、ストラトス家での『七夕』は呆気なく終わってしまった。

――ずっとずっと、にいさんといっしょにいられますように。
アインハルト

――ヒロ君が長生きできますように……。　なのは

――とりあえず、今ある『日常（幸せ）』が続きますように。
ヒロ

各々の書いた願いが叶うかどうか、それはまだ誰にも分からない。

『七夕』（後書き）

速攻で書き上げたのでちと心配……。

４０万ＰＶ突破記念・番外編（前書き）

正確には４５万ＰＶなんだけどね。

今回はアインハルトがヒロインの番外編を書いてみました。遅くなったけど……。

※注意※
若干ネタバレあり
なのはさん不在
ヒロインのはずなのに若干扱いが酷い……ｅｔｃ．
以上の事に注意して下さい。

４０万ＰＶ突破記念・番外編

「お、起きてください！！　兄さん！！」

「う……うん……？」

それは、ある朝の事だった。
いつもの様に起こすアインハルトの声に、夢のまどろみの中からなんとか起きるヒロ。
目が覚めたばかりだからなのか、重く感じる体に鞭を打ちなんとか起きる。

「ぉ……おはよう、ございます……兄さん……」

それを確認するとアインハルトは先程よりも小さい声で挨拶した。

「ふわぁ……おはよう、アイン……？」

不意に漏れる欠伸を噛みしめながらも返事をしたヒロだが、ある違和感に気付いた。

「誰……？」

そこにいたのは、アインハルトと同じく碧銀の長い髪に、青と紺の虹彩異色の瞳。唯一違うのは彼女が大人だという事だ。
どう見積もっても自分と同い年か、下手をしたらそれ以上の少女がヒロの横に座っていた。

「……」

最初は姿が似ている為、母かとも思ったがそれにしては若過ぎる。それに……。

「母の胸は真っ平らだった気が……ッ！？」

その瞬間、何処からともなく飛んできた直径１０ｃｍ程の鉄球が、勢いよく窓を割りヒロの頭へと直撃した。

「に、兄さーーーん！？」

頭から大量の血が溢れ出て白いシーツが紅く染まる。そんなヒロの姿に、件の少女は心の底から叫び、あたふたとしている。

そして、薄れいく意識の中ヒロは思い出した。

「……胸に関しては、タブーだった事……忘れて、た……」

我が母の唯一にして、絶対に触れてはならない禁忌を……。その事に気付くと同時に、ヒロの意識は途切れた。

「いやあああああ！！　兄さあああああん！！！！！」

その直後、少女の一際大きな叫びが辺り一帯に響き渡った。

そんな朝の騒動から一転。

ようやく落ち着きを取り戻したヒロは、少女とともに朝食を取り始めていた。

「で、何でそうなったんだ？」

まだ痛む頭を擦りながらヒロは、少女を見る。

「だ……だから、それは……」

「『朝起きたら背が伸びていた』って？」

「うぅぅ……」

そう、ヒロを『兄さん』と呼ぶ目の前の少女は紛れもなく彼の妹―アインハルトだった。いつもより少しキツ目な兄に若干涙目になる。

「あぁもう、悪かったから泣くなよ……疑ったりしてゴメンな」

そう諭し、『いつも通り』にアインハルトの頭を撫でる。

「兄さん……」

それを、『いつものように』気持ち良さそうに受け入れる。アインハルトはヘソを曲げても大概は頭を撫でてやれば機嫌は直るらしい……もっともヒロが相手の時限定だが……。

「大好きです♪」

そして、機嫌が直ったアインハルトはいつもの様にそう言って抱き着いて来た。

……ただいつもと違うのは、抱き着いた時に生じる軽い衝撃だけでなく、柔らかい『何か』が当たったという事である。

「て、その姿で抱きつくなぁッ！！」

その『何か』の正体に気付いたヒロはすぐにアインハルトを引き剥がす。

「兄さん……？」

何故そんな反応をされたのか分からない当の本人は、きょとんと小首を傾げる。

アインハルト本人は未だに実感がない様だが、今一度確認しよう。

――今のアインハルトは“大人の姿”である。

つまり、身長以外にも子どもの時にはなかった物がある。そう、例えば……胸とか。

「――ッ！？」

頭を左右に振り、先程の感触を必死に忘れようとする。

なのはとかならまだしも妹に対してそういう感情が出るのは色々と問題がある。気持ちを落ち着かせる為に一度深く息を吸う。

「はぁ……とりあえず、元の姿に戻るまでは抱き着くのは自重してくれ、頼むから」

「む……よくわかりませんが、兄さんがそう言うならわかりました……」

ヒロの懇願に、仕方なくアインハルトは従うが、やはり不服なの

か頬を膨らませて不機嫌である事を小さくアピールする。
「あ～……ほら、拗ねるなって、別に一生って訳じゃないんだから別にいいだろ？」
「んぅ……。……そう……ですね。分かりました、兄さん」
むくれた妹の頭を撫で、ご機嫌を取るヒロ。アインハルト自身も嫌いではなく、むしろ嬉しいので一呼吸置いた後機嫌は直った。
「さて……となると、どうするか？」
朝食を食べ終え、適当なニュースを見ていたヒロは考える。
――どうすればアインハルトが元に戻るのか、を。
「～♪」
視線をキッチンの方に向けると、アインハルト（大人ｖｅｒ）が上機嫌に鼻歌を歌いながら食器を洗っていた。普段は踏み台を使わないと出来ない作業が出来るからか、はたまた別の理由かは分からないが、当の本人は楽しそうだった。
あの様子なら本人は気にしていなさそうだが、兄であるヒロはそうもいかない。
外見は変わってもアインハルトはまだ五歳なのだ。まだまだ精神的に未熟な所がたくさんある。なのに内と外で格差が出た場合、最悪精神に影響をきたす可能性もある。

「と、なると……」
やるべき事は一つ。
「い〜〜や〜〜で〜〜す〜〜〜！！」
数分後。そう思い行動した結果、アインハルトはソファーを掴んで必死に抵抗していた。結構な力で引っ張っているのだが、なかなかに握力が強い。
「私は何処も異常ありません！　だから、病院にもユーノさんの所にもいきません〜〜！！」
と、大人の姿で駄々を捏ねる。やはり中身は変わっていないようだ。
「仕方ないか……」
諦めて手を離す。おそらくこのまま続けても平行線である事は目に見えている。なら……。
「今日一日だけ様子を見る。明日までに治らなかったら無理矢理にでも連れて行くからな」
「あ……」
しょうがなくヒロが半ば呆れながらもそう言うと、アインハルトは今までソファーに押し付けていた顔を上げる。
「はい、わかりました♪」

そして、満面の笑顔を浮かべながら了解の意を取る。

「……やれやれ」

口ではそう言いながらも、顔は綻んでいた。やはり、妹にはとことん甘い兄であった。

「そうと決まれば……兄さん」

「ん？」

何か思いついたのか、アインハルトは改めてヒロに向き直る。

「デートしませんか♪」

「……は？」

そして、その口から意外な言葉が出るとヒロは暫しの間呆然としていた。

「兄さん兄さん、次はあっち！　あっちに行きましょう！！」

昼下がりのクラナガン。その街中でアインハルトはかなりはしゃいでいた。

「ちょっと待て、いくらなんでもペースって物があるだろう……」

先程から手を引かれ、連れ回されるヒロ。体力はある方だと思っていたが、如何せんこういう時の女性はかなり元気だ。昔、何度か

なのはに付き合わされた事があるのでよく分かる。

「！！　今度は向こう、向こうに行きましょう！！」

今はウィンドウショッピングという物をしている。移動したと思ったら、次の獲物を見つけ、また移動を開始する。そして、また獲物を見つけ……のエンドレス。次から次へと移動するのにアインハルトは一向に疲れを見せない。

「またかよ……」

それに反比例するかの如く、ヒロは疲れが溜まっていく。

やはり、断っておけばよかった……。自分の決断の甘さを後悔するヒロだった。

それからもヒロは色々な場所に連れ回された。

昼食でのちょっと洒落た店に、有名な衣服を扱う店。ゲームセンターによく行く公園にバイト先。背伸びをしてかランジェリーショップにも同伴されたが、そこでは結局アインハルトが赤面しただけで終わってしまった。

他にも今日一日で色々な場所を歩き回った。そして、気が付けば既に日が暮れかけていた。

「……今日は、とても楽しかったですね……兄さん」

「そうだな」

今二人は、最後にもう一度いつもの公園に訪れていた。

沈みいく夕日をベンチに座りながら静かに眺める。

「本当に……夢のよう……」

ふと、アインハルトが感慨深く呟く。それは悲しみと懐かしさが混じりあった物だった。

「兄さん……私、実は……」

そして、だから伝えようと決心した。

「『アインハルトじゃない』だろ」

「え……」

だが、それは伝えるべき相手――ヒロによって遮られた。いや、正確には『続きを言った』と言った方が正しいか……。

「いや少し違うか、お前は『アインハルト』なんだろうな、間違いなく。だが、俺が知ってる『アイン』ではないんだろ？」

きょとんとする『アインハルト』にヒロは訂正する。そんな兄を見て、彼女は此処数年持ち得なかった感情が沸いてきた。

「やっぱり、兄さんは凄いです……」

それは――『愛』。家族に向けるものと、愛しい人に向けるもの、その両方が彼女の中に再び溢れてくる。それを理解した時、彼女は自然と笑みを溢していた。

「いつから気付いていたんですか？」

「ほぼ最初から」

アインハルトの疑問は即座に返された。

朝起こされた時点でヒロはアインハルトの様子が違う事にはとっくに気付いていた。仮に『アイン』が大人の体を手に入れたら、あんなに大人しい訳がないし、いきなり大きくなった身体を何の違和感もなく動かせるのは普通に考えて無理がある。視点が、リーチが、歩幅が、その全てが一気に変わったのに『普通』に動かしていた。この時点でヒロは何通りかの推測が出来ていた。

「はい。確かに兄さんが言う通り、私は“この時代”のアインハルトではありません」

腰を上げ、数歩前に出ると、アインハルトは語り始めた。

「私は……今よりももっと後の時代から来ました。そこには『今』とは違って頼れる仲間も、友達もいます」

優しく、満たされている表情。それを見るだけで、立派に恵まれて育った事が容易に想像出来た。アインハルトの将来への不安が少し減って、ヒロは僅かばかり安心した。

「でも、同時になくなったモノもあるんです……」

だが、そこに影が一つ落ちる。ヒロはその『なくなったモノ』が何なのかすぐに分かった。

「そうか……」

だから、それしか言えなかった。それ以外に掛ける言葉が見つからなかった。ヒロは自身の運命（さだめ）を知っている、だから今も必死にそれに抗っているが……。

「……」

悲しみに覆われた彼女の顔を見れば分かる。

――失敗したな……。

家族だから、愛しい存在だから、傷つけたくなかったのに……。恐らくこれから先か、もしくは“既に”かミスを犯したのだろう。……だから今、目の前にいる『アイン』はそんな顔をするのだ。

「……悪いな……」

「……いえ」

どんなに探しても、結局ヒロの口からは謝罪の言葉しか出なかった。

そろそろ日が完全に沈む。海を紅く、空を藍に染めながら静かに沈む。

しょっぱい海風がアインハルトの綺麗な碧銀の髪を靡かせた。思いの外強い風に不意に目を閉じる。

「あ……」

風が止み、目を開けるとそこにはヒロが立っていた。

そして、アインハルトの前に拳を突き出す、咄嗟の事に小首を傾げるもアインハルトは手の平を差し出す。

「記念だ、持っていけ」

そう言って渡したのは一つのネックレス。先についている蒼いひし形以外特に目を惹く物のない質素且つ簡素な作りだった。

「兄さん……これは？」

いまいち状況を掴めていないアインハルトは、どういう事か説明を求む様にヒロに視線を向ける。

「デバイス」

「え……？」

「だからそれ、お前専用のデバイス」

その言葉にアインハルトは驚いた。恐らく作ったのは父だろうが、機能や形状等の主だった部分は兄が考えてくれたのだろう。

本人以上にアインハルトの事を知っているヒロが考案したデバイス。恐らく下手な専用機より扱い易いはず。まだ起動すらしていないのにアインハルトは本能的にそう悟った。

「本当は、お前がある程度強くなったら渡そうと思っていたんだが……無理そうだからな……」

少し寂そうな顔でそう告げる。分かっていた事だが、やはりアインハルトがこの年になる頃には既に自分はいない様だ。

しっかりと成長を確めた上で渡したかったが、あの驚きようではデバイスの存在すらしなかったようだ。まあ、誰にも分からない場所に隠していたのだから、当たり前と言えば当たり前か……。

「兄さん……」

そんな、大事に大事に隠していたデバイスは今、本来持つべき者の手に握られている。

兄から送られたそれを愛しそうに両手で握り、胸元で抱き寄せた。本当に自分は愛されていたのだとアインハルトは実感する。

「ありがとう……お兄ちゃん……」

『今』はもういない兄からの贈り物。例えこれが夢だとしても、ロストロギアによって見せられた幻だとしても……アインハルトにとって、夢の様なありえなかった奇跡。

「あ……」

だが、夢は必ず覚めるもの。

気付けば、アインハルトの体は段々と薄れてくる。本来なら見えないはずの景色が、薄れた身体越しに見える。

「時間だな……」

すぐに状況を察したヒロが呟く。

恐らくアインハルトは何らかのロストロギアによって過去に来たのだろう。だがそれは一方通行のものではなく、ある一定の時間が経てば元の時間に強制送還される類いのものなのだろう。

「兄さん……ッ！？」

その事にアインハルトも気付くと、彼女はヒロに抱き着いてきた。

「……んぅ……！！」

「――ッ！？」

そして、勢いを殺さずそのまま唇にキスをする。

いきなりの事で混乱するヒロ。何故こんな事をするのか考えるよりも早く、アインハルトは離れる。

「……思い出、です」

未だ状況を把握し切れていない兄に対し、恥ずかしそうにそう言う妹。頬を赤に染め、瞳が潤んではいるものの、笑顔が浮かんだ。

『思い出』の意味が一体どういう意味のものかまだ分からないが、どうやらアインハルトの中で何か踏ん切りがついたらしい。

「……そうか」

それを理解するとヒロも自然と笑みが溢れる。

「兄さん……」

徐々に薄れ、光に包まれいく体。

本当に時間がないと悟ると、アインハルトは生前の兄に言えなかった事を言う。

「……愛しています」

ただ一言、それだけを残してアインハルトは光に包まれ、消えてしまう。

後に残ったのは、一人の少年と……。

「……ごめん」

懺悔の言葉だけだった。

――翌日。

「にいさん、にいさん」

「？　どうした、アイン」

自室で目を覚ましたアインハルトは、一階に降りて来るなり兄に質問する。

「わたし……きのうなにしてましたか？　どうしてか、おもいだせないんです」

頭を捻りながら必死に思い出そうとするアインハルト。

結局、家に帰るといつものアインハルトは自室で寝ていた。恐らくは未来のアインハルトが何かしらの方法で眠らせ続けたのだろう。流石に過去の自分と会うのだけは危惧していた様だ。

「ああ、一日中ぐっすり寝てたからそうだろうな」

「ふぇ……？」

特に隠す事もないだろうとヒロは軽くそう返す。それを聞いたアインハルトは自然とテレビに目を向ける。丁度、天気予報の画面に変わると日付が出てきた。

そこには、自分が予想していたのより一日早い日付が記されていた。

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー！！？！？！」

アインハルトの驚愕の悲鳴が、近くの住宅街一帯に響き渡る。それを微笑ましく見ていたヒロは朝食の用意を始めた。

「いつも通りだな」

その言葉通り、いつも通りの日々が今日も始まった。

４０万ＰＶ突破記念・番外編（後書き）

という訳で『アインハルト』がヒロインの番外編を書いてみました。ロリハルトは大人版の企みにより家で熟睡中……一日中寝れるとか羨ましい……。

以下若干ネタバレ。

未来のアインハルトの世界では既にヒロはいません。ぶっちゃけると死んでます。

まあ、あくまで『そういう可能性のある未来から来たアインハルト』なんで、絶対に死ぬ訳じゃありません。確率的には８：２くらいですかね……どっちがどっちの数字かは言いませんが……。

ちなみに、ヒロが死んでいなかった世界のアインハルト版も考えていましたが……この場合最後ギャグになります。細かくは無理なんで大雑把に書くと……。

アインハルト、未来へと帰還
←
Ｖｉｖｉｄの同じみ三人娘と合流
←
完全武装化
←
教会に強襲
←
「兄さんを返せぇぇぇぇ！！」とブラコンパワーで無双
←

ヒロの元に到着
←
拉t……もとい救出するも魔王さま降臨
←
ＯＨＡＮＡＳＨＩモードのなのはと対決
←
置いてきぼりをくらったヒロが「今日、式（結婚）なんだけどなぁ……」と呟いて終わり。

グダグダになりそうだったし、無駄に長くなりそうだったのでやらなかったネタ。
花嫁泥棒ならぬ花婿泥棒。ウチのアインハルトならガチでやりかねない……。

長くなりましたが、番外編に関しては以上ですかね？

稚拙なものですが、これからもよろしくお願いします。

二十八話　『慣れ』（前書き）

久しぶりの更新。でも話は余り進まない……。

二十八話　『慣れ』

「ふわぁ……」

翌日、早朝六時。外が明るくなり、自然と目が覚めたヒロは欠伸を噛み殺し、ソファーから起き上がる。

何故こんな所で寝ていたのかと言うと……昨夜、部屋に戻ると完全に眠りに落ちていたなのはがベッドを占領していたからである。いくら呼びかけても起きなかったので、仕方なく居間のソファーに寝る事にしたのだ。

「さてと……」

朝食の準備をしようと軽く伸びをすると背骨が鳴った。右腕とは違い、生身の音が聞こえる。それが『まだ大丈夫』と思えるように感じた。

「……さっさとやるか」

そう思い台所に立った瞬間。

『なあああああああああああああああ！！！！！！！！！』

奇妙な叫び声が二階の――更に正確に言うなら、自分の部屋から聴こえてきた。

嫌な予感しか浮かばない中、今度はドタバタと廊下を走り、階段を降りて来る音が聞こえる。

「にいさん！　なぜ、にいさんのベッドでなのはさんがねてるんですか！！？！」

そして、案の定それは自分の元にやって来た。壊れんばかりに強く扉を叩きつけて入ってきたアインハルトは、鬼気迫る勢いでヒロに問い質す。

そんなアインハルトの後から来たなのはは手を合わせ、『ごめんね』とジェスチャーをする。

「あ～……それはな……」

軽くため息を吐いた。なのはが泊まると決まった時から、これくらいの事が起きるのは予想していた。なのはやアインハルトの性格を考えればこうなる事も大体分かる。だから、前もって考えていた言い訳をヒロは淡々と述べていった。

――曰く、日頃の疲れが溜まっていたからか話している最中に寝てしまった。起こすのも気が引けるので、自分は居間のソファーで寝た。

あながち間違った事は言ってないし、それなりになのはと付き合いのあるアインハルトは、なのはが日頃からどれだけ働いているのか分かっている為か、「今回だけ」と目を瞑ってくれた。

「……でも、まよなかにへやでふたりっきりというのは、やっぱり『ふけんぜん』だとおもいます……」

朝食時、箸を動かしながらずっとそんな感じの事を、アインハルトはぶつぶつと呟いていた。事実、ある意味『不健全』な事はして

いたかもしれないが、当人達は一切気にせず、アインハルトの様子を微笑ましく眺めている。
和気藹々――そんな言葉が似合う空気が流れ、食事は何事も程なく終わる。

「あ、そうだ。ヒロ君、今日のバイトはお休みだよ」

食器を洗い終わり、出掛ける準備をしていたヒロになのはは思い出したように言った。何でなのはがそんな事を知っているのか疑問に思っていると、それを察したのかなのはは昨日ヒロと会うまでの経緯を話してくれた。

昨日唐突に休みを言い渡されたなのはは、突然の休みをどう過ごすか悩んだ結果、ヒロのバイト先である喫茶店に行って時間を潰す事に思い至った。
そして、いざ目的地に行ってみると何故か店から爆発音がし、急いで中に入るとそこには真っ黒に焦げた店長と慌てふためくアインハルトの姿があった。それを見たなのはは「なんだ、いつもの事か」とすぐに状況を把握。
店長が料理をしようとして爆発した。うん、いつもの事だ。
慌てず騒がず冷静に病院を連れていき、そして医者に預けた後、アインハルトのセンサーがヒロを捉えた結果ヒロ達と合流したのだった。

「なんだ、いつもの事か」

なのはから事情を聴いたヒロもそう言って納得してしまった。普通なら疑問に思う部分が多々あるはずだが、当人達は全く気にせず日常の一部になっている。

恐らく、フェイト辺りが今この場にいたら確実に頭を抱えていただろう……『慣れ』とは恐ろしいものである。

二十八話　『慣れ』（後書き）

人間はどんな状況に置かれても一週間経てば慣れるらしい……とある仮面のゲームの社長令嬢な先輩がおっしゃっていた。
つまり何が言いたいかと言うと既に手遅れ（ｒｙ

二十九話　『指導』（前書き）

ケータイが壊れた……ｏｒｚ

二十九話　『指導』

視界の隅に小さな桜色の弾が見えた。捉えたと同時に、小さな体を駆使して何とか避ける。
頬を掠めた後、弾はUターンをし再び襲いかかった。本来ならあり得ない動きに多少なりとも動揺するかと思われたが、予想に反し少女は冷静に弾を殴って打ち落とした。
その動きを見た彼女は『面白い』と笑みを溢す。対して弾を消した少女はほっと一息をする。

しかし、弾は一つだけではなく、次々とその姿を現していく。十に達するとそれ以降は増えず、静かに漂っているだけだった。
不気味な程静かなそれに意識を集中し、いつでも動ける様な態勢を取る。

暫しの沈黙が流れ、先に破ったのは弾の方だった。一発の弾が少女目掛けて迫るが少女は拳で打ち落とす。それを皮切りに弾は一斉に襲いかかってきた。
少女は冷静に一つずつ対処していく。避けて、交わして、拳で打ち落とす。面倒だが、これが一番確実な方法だ。下手に纏めて倒そうとしても、今の少女の実力では返り討ちが関の山なのだから……。

思いの外粘る少女に少し驚く。恐らくは教え方が上手いのだろうと木陰で涼みながら見ている少年を一瞥する。その後、すぐに意識を少女に向き直した所に少女の拳が彼女の顔面を捉え、迫っていた。

「ぎゃぅん！？」

だが、それは後一歩の所で届かなかった。彼女が保険の為近くに配置していた弾、迷彩魔法によって隠れていたその一つが少女――アインハルトの脳天に直撃。おかげで変な悲鳴を上げながら撃墜されてしまった。

「筋は良いんだけど、やっぱりまだまだかな」

「うぅ～……」

少し厳しく評価するなのはに、アインハルトは涙目で睨み付ける。よほど痛かったのか、まだ頭を抑えている。

「でも、この歳でここまで出来るのはやっぱり凄いと思うよ」

「……えへへ♪」

軽いこぶが出来た頭を撫でながら、なのはは褒める。くすぐったい感触と、その言葉が素直に嬉しいアインハルトは笑顔を浮かべた。

事実、アインハルトは強かった。手加減していたとはいえ、たった五歳の少女がなのはの元にまでくるとは正直思っていなかった。なのはが『念のため』に周囲に隠していた魔力弾は、ヒロとの模擬戦で着いた癖の様なものだ。この癖がなければ、本気で迎撃したかもしれない……それほどまでにアインハルトは強い。

恐らく、このままヒロとなのはに鍛えられながら成長し続ければ、将来的にはかなり優秀な魔導師になるだろう。それこそSランク以上の力を身につける事だって出来るかもしれない。

「……」

だがそれは、ヒロとなのはの二人が揃った状態での話だ。如何になのはが教導官で教える事に長けているとはいえ、彼女の本分は射撃兼砲撃と防御が主だ。基礎的な部分は出来るだろうが、自分の範囲外である接近戦の応用に関する知識はそこまで豊富ではない。だからこそ、それに長けたヒロがいなければいけないのだが……。

「……」

此処から少し離れた木の根本に視線を向ける。

現在、件のヒロは端末を使い後輩であるルリエルに連絡を取っていた。用件は『店長が怪我をしたから暫くバイトはない』という物で、端末片手に木の根本に腰を下ろしていた。

肝心な用件は終わった様だが、どうやら相手側が一方的に別の話題を延々と喋っているらしい、ヒロはそれを軽く聞き流し、適当な頃合いで回線を切る。

そしてこちらの様子を見、終わった事を確認すると腰を上げ、なのは達の元に向かってくる。

「終わったのか？」

「はい♪」

前もって買っていたスポーツドリンクを二人に向け投げ渡す。二人共上手くキャッチした後、アインハルトがヒロの問いかけに応えた。褒められた事がまだ嬉しいらしく、気分が良いようだ。

「で、どうだった？」

「凄かったよ～、流石にヒロ君が育てただけの事はあるね」

通話していた為、訓練の様子がよく分からなかったヒロはなのはに訊く。もっとも、アインハルトの様子を見る限り悪くはないだろうし、事実、教導官であるなのはもそれなりの評価を与えた。

「じゃ、今日は此処までにするか」

「え？　わたしはまだ大丈夫ですよ？」

思いの外早く終わった事にアインハルトは小首を傾げる。

「買い物に行く予定なんだが、お前はずっと特訓しているつもりか？」

「私としてはそれでもいいよ」

「いきましょう、にいさん！」

なのはが微笑みながら言うのを見て、即座にヒロの腕を取って離脱する。その様子をなのはは「やれやれ」といった具合で見ながら二人の後を追いかけた。

二十九話　『指導』（後書き）

一応投稿。前書きでも書いたようにケータイが壊れたので、投稿は出来るけ執筆がなかなか……まあ、投稿出来る程のストックなんてないんですけどね……。
ちなみに自分はメールで執筆しています。壊れる前に送っていなかったら、努力が無になる所でした……危なかった……。今は昔使っていた古いケータイを使って投稿しています。

正直、この内容は後書きで書く必要はあまりないですね。でも、一応報告。次の更新がいつもより遅かったら、百％これが原因です。
ただそれだけが言いたかっただけ。

……バイトが忙しくなる中、ケータイも壊れるとか……最近運がない朝人でした。

三十話　『邂逅』（前書き）

頑張った……今回は結構頑張った……慣れないケータイで何とか書き上げたよ……。

……というか、このケータイ、キーが小さいんじゃボケーッ！！

三十話　『邂逅』

とあるデパートの中にある、広場の様な広い空間。そこのベンチに一人の少年が体の全体重を預け、だらけていた。
ベンチや自動販売機といった休む為以外の物――障害物がない自由な空間な為か、先程から子どもが騒がしく走り回っている。
特に意味もなく走って、転んで、泣く。その連鎖反応を起こしたのはアインハルトと同い年の少年だった。泣きじゃくる少年に母親らしき女性が近付き宥める。

「……」

その二人の姿に思うところがあるのだろう、ヒロは昔を思い返す様に目を閉じる。

『もう……ダメだよ、クロウ。そんなんじゃ強くなれないよ』

『うっせぇ！　別に今より強くなっても何もないだろ』

瞼の裏に蘇る光景には、生意気そうな少年と、それを咎める少女の姿があった。クロウと呼ばれた少年はまともに訓練をしなかった為に少女に注意されていた。

『……はぁ、これだからお前は……』

その様子を離れた所から見ていたもう一人の少年が、呆れながらため息を吐いた。

『待てコラ、何だその『お前バカだろ？』みたいな目は？』

『なんだ、分かってるじゃないか』

バカにした様な態度の少年に、クロウは憤りを覚える。

『よし、その喧嘩買った！　今すぐぶちのめしてやる！』

『もう！　二人とも喧嘩しないでよ！』

少女の制止を無視してクロウは少年に殴りかかった……だが結局はいつも通り惨敗してしまい、少女に看病して貰う羽目になった。

『だからお前はバカなんだ。“ちゃんと”強くなれよ、クロウ』

傷どころか汗一つかかなかった少年をクロウは睨み付ける。この余裕の態度が更にクロウを苛つかせた。

『……絶対ぶん殴ってやる』

『ふん……』

静かにそう決意するクロウを少年は一笑する。その笑いにどんな感情が籠もっていたのかクロウは理解していなかった。

「――にいさん？」

不意に自分を――兄を呼ぶ声が聞こえ、意識が現実へと呼び戻さ

れた。
目を開けると、そこにはアインハルトがいた。心配そうな顔を浮かべ、こちらを見ている。
「だいじょうぶですか？」
「ああ。悪い、寝てた」
懐かしい夢を見た所為だろう、少し気分が低い。
「あの……なのはさんとおようふくをみにいきたいんですが……」
訓練が終わり、久しぶりに買い物へと来たヒロ達だったが、なのは達の買い物の時間が長くなると判断したヒロは、別行動を取っていた。
少し心配になって様子を見に戻ってみると、そこには気分の優れない兄の姿があった。その姿を見て、こんな状態で放置していいものかと、子どもながらに考えてしまう。
「うん、俺は大丈夫だから行ってきな。久しぶりの買い物でもあるんだから」
そんなアインハルトの思考を読んだヒロは心配させないように微笑みながら応えた。
基本的にヒロと一緒にいるアインハルトは、女の子同士の買い物に行く事なんてそうそうないのだから、下手に気を使って貴重な時間を潰してしまうのは勿体無い。実際、ヒロはただ夢見が悪かっただけなのだから……。
「……はい。では、いってきます」

尚も心配そうに窺うアインハルトだったが、兄の厚意に気付き、申し訳なさそうにしながらもなのはと共に違う階に移動して行った。

「……」

それを見送り、もう一眠りしようと再び瞼を閉じる。だが、その瞬間ふと違和感を覚え、目を開ける。

するとそこ――デパートだと思っていた店内は、灰色に染まった世界へと変貌していた。床に天井、壁やガラス、ヒロが座っているベンチまで、色素を失ったように灰へと変わり果てていた。

ヒロは疑問を持つ前にベンチから立ち上がり、数m先にいる黒い影に視線を向ける。ヒロが座っていたベンチは彼が離れると同時に、まるで砂城の様に呆気なく崩れ、大量の灰へとその姿を変える。

――『崩界』。

ある呪宝の担い手が使える結界魔法。普通の結界と同じく、ある範囲内を切り取って別空間にする物だが……『崩界』にはタイムリミットが存在する。崩界内では生物を除いた全てが 常に崩壊現象に見舞われており、放って置けば空間その物が消滅してしまう危険な代物だ。解除する為には担い手を倒すか、何らかの手段を用いて結界を内側から破壊する以外に方法はなく、もし術者が結界外にいる場合はほぼ絶望的である。

ヒロが座っていたベンチが灰のようになったのは、崩壊現象により限りなく脆くなってしまった為だ。もしこれで術者が結界外にいたら、面倒な事になっていたが……ヒロの前にはその術者がいる。

「久しぶりだな、クロウ」

ヒロはその術者、黒いコートに黒いバイザーで顔を隠した少年ーークロウへと向けて言った。

「ふん、『崩界』の中に閉じ込められたってのに相変わらず余裕かよ……ヴェルグ」

発せられたのはかつての名前。それは自分であり、自分ではない者の名前。

「ホント、お前はムカつくな」

苛立たしげにバイザーに手を掛け、それを外す。

「ーー“今度こそ”殺してやる」

そこにはヒロと瓜二つの顔を持つ少年がいた。

三十話　『邂逅』（後書き）

実はクロウとヒロは別人だったんだ！！

……て、みんなはとっくに気付いてたよね……。

三十一話　『憎悪』（前書き）

久しぶりに更新出来た……。

三十一話　『憎悪』

「そういえば、面白いものがあるんだ」

いつものように我が物顔でクロウがソファーに寝そべっていると、唐突にリーオはそう言って手元のキーボードを弄り、立体モニターを出す。

何事かと疑問に思い、目線だけを動かす星光の殲滅者。興味なさげにバイザー越しに見るクロウ。そして、このプチ上映の主催者であるリーオ。三人分の視線を一身に受けながらも映像は流れ始めた。

『何か心当たりは？』

「ーーッ！！」

色褪せたクラナガンの街並みを映すと同時に『声』が聞こえた。それはクロウとよく似た声質で、余裕を感じさせる言い方だった。

慌ててモニターの中の街を探すと、忌々しい存在がその姿を見せる。

『だんまりか？』

挑発的な余裕の笑み。それが今映像を見ている自分に向けられた様な錯覚すら起きた。

そして次の瞬間、クロウはソファーから立ち上がり、部屋から出ようとする。

「どうしたんだい？」

「……野暮用を思い出した」

リーオの問いにそれだけ応えると、今度こそ部屋を後にした。

――これが数時間前の出来事。

そして、時は戻って現在。

同じ顔の二人の少年は脆い灰色の世界で対峙していた。

『殺す』と言い、怒りと憎悪に満ちた鋭い視線がヒロを――ヴェルグと呼ばれた者を捉える。

「懐かしいな」

しかし、当の本人はそんな事は気にも止めず、昔の事を思い出していた。

ヒロ――ヴェルグとクロウ、そして少女はいつも一緒だった。食う時も寝る時も訓練の時だって一緒だった。

当時は気にしていなかったが、今にして思えばかつて居た所はあまりいい所ではなかったかもしれない。でも、三人にはそんな事は些細な問題だった。

クロウがヴェルグに突っ掛かり、ヴェルグはそれを軽くあしらい、少女が止めに入る。そんな在り来たりな毎日が続くと思っていた。

例え籠の中の鳥で、限られた時しか生きられなかったとしても、少なくとも『まだ大丈夫だ』と思っていた。……そうクロウは思っていた……だが。

「殺してやる……」

憎悪の言葉が口から放たれた。

当時、そう思っていたクロウに待っていたのは『裏切り』と『喪失』。

「――くッ！！」

不意にあの時の映像が頭を過る。

赤い液体で真っ赤に染まった部屋とその中心に佇むヴェルグ。

床には、今まで自分達を監視していた白衣の学者擬き達と思わしき肉塊が四散しており、まともに原型を留めていたものはいなかった。

そして、そんな嫌悪感しか抱けない光景の中には、自分がよく知る少女もいた……何かを引き摺り出した様に胸を抉られ、変わり果てた姿で。

『う、うぁ、あ……あああああぁぁぁぁあああぁぁぁあああぁぁぁあああ！！！！！！！』

断末魔を上げたクロウに気付きヴェルグが振り返る。彼の身体は彼女の血で汚れていた。

その時クロウは分かってしまった。何だかんだと言っても仲間だと思って信じていた少年が、少女を殺したという事実に。

「ッ……！！」

ギリッと何かが切れる音がすると、口の端から血が流れる。『あの時』の事を思い出し、怒りのあまり口を切ってしまったらしい。親指でそれを払うと、端から見ても分かる程の怒気や殺気といった負の感情を露にする。

「――“クロウクル”」

そして自らの一部であり、自分の名前の由来にもなった呪われた宝の名前を口にする。

すると、クロウの腕を黒い影が覆い、徐々に形を成していく。

黒い……黒いそれは、蛇の如くクロウの腕を這い、指先まで達するとまるで鉤爪の様に鋭利な形となる。そして影は完全に固形化すると、鋭利で禍々しい籠手にその姿を変えた。

「――死ね」

一呼吸置いた後、クロウは腕を振るう。

黒く染まった爪が空気を切り裂き、その軌跡をなぞる様に爪から斬撃が放たれた。それは迷う事なく対象に向かっていき、ヴェルグの体を三つに引き裂いた。

三十一話　『憎悪』（後書き）

暫くは厨二っぽい展開が続きます。

三十二話　『呪宝』（前書き）

睡眠時間を削って何とか書いたぜ……。

三十二話　『呪宝』

『呪宝』――数あるロストロギアの中でも特に曰く付きの代物の一つであり、同時に古代ベルカから伝わっている呪われた宝具。
元々はとある王が所持していたモノで、数は全てで八つ。聖遺物と同格の力を持つとも言われていた。しかしその王の死後、それを手にした者達はいずれもが悉く死に至った為、呪われた宝具……『呪宝』と呼ばれる様になったとされる。

先も言ったが呪宝の力は聖遺物と同格である。それは八つ一セットで同じという意味でなく、一つ一つの力が聖遺物と互角という意味だ。

例えば、悪魔の腕の様に禍々しく、鋭利な形状の籠手――『クロウクル』は、『破壊』という一点にのみ特化しており、『モノを壊す』事に関していえば、あの『闇の書』以上の性能を秘めている。文字通り『壊れた』様な力を持つが代償に使える人間がかなり絞られる。もし、決められた使い手以外がそれを使おうとすれば、力が逆流し文字通り体が壊れ、骨すら残らないだろう。

そんな異常な力を持つロストロギアを扱える人間が普通な訳がない。

「……」

三つに裂かれた肉塊が、まるでビデオ映像のスローでも見るかの様にゆっくりと地面に向かって落ちて行く。

クロウクルの『破壊』という『毒』に犯されたモノは形を残さず消滅する。無論有機、無機を問わないそれを受けたヴェルグの肉体が徐々に砂の様に細かく分解され……そして。

「――ッ！？」

――そして、それは爆発を起こし、文字通り『木っ端微塵』となった。まるで水素が爆発をした様に音は響き、その衝撃に身体が震える。

『破壊』しか出来ないクロウクルが対象物を爆破した事に疑問を持つ前に。

「なるほど、多少は使えるようになったみたいだな」

自分と良く似た声が後ろから聴こえた。

「クソッ！！」

一体どうやって逃れたのか分からないが、考えるより早く体が反応し、振り向きざまに腕を振るう。空気もろとも破壊の爪がヴェルグを引き裂こうと迫る。

「断空拳」

――だがしかし、振り切る前に腕を弾かれ、先にヴェルグの拳がクロウを捉えた。まるで吸い込まれる様な綺麗な動きで拳が鳩尾に入る。衝撃が体を突き抜けると、その余波でクロウ本人も吹き飛ばされた。

「――がッ！！」

壁にぶつかるも、壊れ易くなった結界内にいる為易々と壁を壊し、横のフロアに飛ばされる。

「はっ……はっ……」

灰塵が舞う中、先程の攻撃で酸素が肺から抜き出てしまった。苦しくなり慌てて息を吸う、口に壊れ欠けが入ろうとも気にはせず、ただ体が命ずるがままに。

魔導師ならば本来はバリアジャケットがあり、ダメージを軽減させるだろうが、生憎とクロウはバリアジャケットを着ない主義だ。……いや、正確には少し違うが、そういう癖を“持っていた”が為に今でもクロウはバリアジャケットを着ない。これはヴェルグにも言える事だが。

その結果、クロウの鳩尾はダイレクトにダメージを受け、呼吸困難に陥り、一瞬無防備になってしまった。うつ伏せの状態から一刻も早く脱しようと、酸素が循環されていない体を無理矢理起こす。

そこに、魔法で身体を強化したヴェルグの一撃が無情に振り降された。

「かぁッ――!?」

まるでハンマーで殴られた様な痛みが背中から胸に突き抜け、その衝撃で脆い床は意図も容易く崩れると、クロウを下層へと落とす。

一切抵抗出来ず、ただただ落ちていくクロウを見下しながら、ヴェルグは右手を突き出す。

すると、灰色の世界に風が舞い、踊る様に螺旋を描いて彼の手の平に収束、形を為す。半透明な水晶の如き、綺麗な球体と化したそ

れを、ヴェルグは何の躊躇いもなくクロウが落ちた穴の底へと放る。
それはゆっくりとクロウ目掛けて落ちていった。

「ぁ……ぐ……」

下の階に叩き落とされたクロウは、小さなクレーターの中心で倒れていた。本来なら更に下の階にまで落ちたのだろうが、彼はこの階で止まった。つまりは、彼がデパート全体に施した結界が既にそこまで小さくなっていたのだ。
結界である以上必ず何処かに張ってある『面』がある。クロウは今その底辺にいる。
ヴェルグの全力の拳を喰らった体は思う様に言う事をきかない。無様に倒れているクロウの下に半透明の水晶がふわふわと、雪の様にゆっくりと降ってくる。
水晶は、まるで散歩しているかの如くのんびりと降り、クロウが視界に捉えると、それはシャボン玉の様に弾けた。

三十二話　『呪宝』（後書き）

眠い中やったから、上手く書けたか微妙……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9875m/

覇王の兄の憂鬱(仮)

2011年11月10日07時18分発行